

瓜生堂遺跡 資料編

1972

瓜生堂遺跡調査会

はしがき

瓜生堂遺跡調査会

理事長 益倉辰次郎

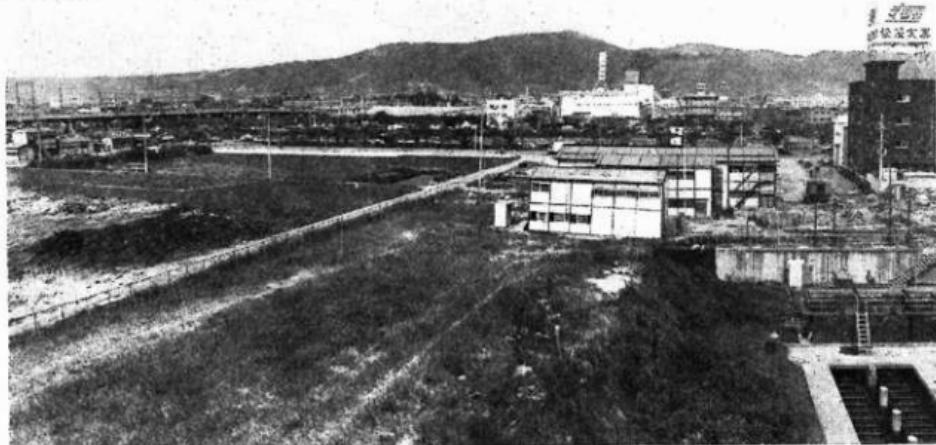
東大阪市瓜生堂1～2丁目、および若江西新町1～2丁目にかけて拡がる瓜生堂遺跡における発掘調査は、昭和46年5月より大阪府によって着工された中央南幹線下水管渠築造工事に伴って開始され、昭和46年度、47年度には東大阪市建設局下水道部による中部第2排水区若江分区下水管渠築造工事に関連して継続的に行なっております。

すでに公表したように中央南幹線下水管渠予定地区内からは、全国的にもまれな盛土のある方形周溝墓が検出され、また土塁墓も數多く発見されました。また弥生時代人の生活を物語る多くの土器、石器、木器など龐大な量の遺物が出土しており、瓜生堂遺跡の重要性が増々明らかになってまいりました。

瓜生堂遺跡調査会としましては、これら龐大な遺物の整理作業を発掘調査と平行して行なっておりますが、今回主だった遺物についての整理作業の一部が一応まとまりました。遺物の整理は大変長い時間と多くの人員を必要としますため、学術報告書の作製まで資料の公表が遅れる場合が多く、貴重な資料が陽の目をみないままねむってしまっている場合が多くあると思われます。しかしながら、こういった貴重な資料はより迅速に公表するのが調査関係者の義務であると考えて、ここに『瓜生堂遺跡』(資料編)として公表すると共に、今後の整理作業の技術的、学問的向上のためにも、各方面の方々より、多くの御教示、御批判をいただければ幸いです。

最後に短期間に集中的な仕事をして下さった調査関係者、および多くの御教示をいただいた関係各位に深甚の謝意を捧げる次第です。

- 例　　言**
1. この冊子は昭和46年度および昭和47年度の間に中央南幹線内西岩田瓜生堂遺跡調査会（昭和47年5月1日付、瓜生堂遺跡調査会と名称変更）が、大阪府および東大阪市の委託を受けて実施した瓜生堂遺跡の調査により出土した遺物について、その整理結果の中間報告である。
 2. 遺物の整理は、土器を今村道雄、曾我恭子、中西靖人、松下　彩、石器を四手井晴子、木器を大西真由美が中心となって行ない、阿部幸一、岡本信夫、國乗和雄、田川朝子、寺田千津子、中本百合子、福本孝弘、藤沢真依、宮前貴美子がこれを補助した。
また、阪上昌代、藤本艶子、中川美代子の協力があったことを付記する。
 3. 遺物の写真撮影はすべて藤原和子が行なった。
 4. 全体の監修は、調査部長田代克己、事務部長藤井直正、調査主任中西靖人の3名がこれに当った。
 5. 本冊子製作にあたっては、石器の材質について大阪市立大学教授笠間太郎氏に多くの御教示を受け、また土器については奈良国立文化財研究所技官佐原　真氏、同沢田正昭氏に多くの御教示を受けた。



第1図 瓜生堂遺跡全景

瓜生堂遺跡 資料編 日次

はしがき	理事長 益倉辰次郎
例　　言	
I 土　　器	5
1. 弥生式土器（中期）	曾我 慶子 5
2. 弥生式土器（後期）	今村道雄，松下 彰 11
3. 土　師　器	今村道雄，松下 彰 12
4. 須　恵　器	中西 鑑人 13
II 石　器　類	59
1. 打製石器	四手井晴子 59
2. 磨製石器	四手井晴子 61
III 木　　器	67
1. 弥生時代前期の木器	大西真由美 67
2. 弥生時代中期の木器	大西真由美 68
IV あとがき	72

図 版 目 次

- 図 版 1. 弥 生 式 土 器 (C地点出土實物)
 2. " (第2号方形周溝窓, 第2号壺棺)
 3. " (第2号方形周溝窓, 第3号壺棺)
 4. " (壺 棺)
 5. " (壺)
 6. " (")
 7. " (")
 8. " (")
 9. " (壺, 水差)
 10. " (鉢)
 11. " (高杯蓋)
 12. " (高杯)
 13. " (甌)
 14. 土 篩 器
 15. 土 篩 器
 16. 須 恵 器
 17. 打 製 石 器
 18. 刻 片
 19. 磨 製 石 器 (石窓丁)
 20. 磨 製 石 器
 21. 木 器 (農耕具, その他)
 22. " (杵, 叉, その他)
 23. " (容器類)
 24. 弥生式土器実測図 (壺)
 25. " (")
 26. " (")
 27. " (水差型土器, 盆棺, 壺)
 28. " (壺)
 29. " (第2号方形周溝窓, 第3号壺棺)
 30. " (第2号方形周溝窓, 第2号壺棺)
 31. " (鉢, 無颈壺)
 32. " (高杯)
 33. " (鉢)
 34. " (甌)
 35. " (")
 36. " (甌, 蓋)
 37. 弥生式土器・土篩器実測図
 38. 土 篩 器 実 測 図
 39. 須 恵 器 実 測 図
 40. 石 器 実 測 図 (石鏡, 石槍, 石錐)
 41. " (不定形石器)
 42. " (刻片)

43. " (磨製石器)
 44. " (石斧丁)
 45. 木器実測図
 46. "

挿 図 目 次

- 第1図 瓜生堂遺跡全景
 2 遺跡調査風景
 3 瓜生堂遺跡地区割及び調査地域図
 4 弥生式土器出土状態
 5 第5様式土器出土状態
 6 古墳時代井戸遺構
 7 須恵器出土状態
 8 第6号方形周溝墓木棺内石器出土状態
 9 サヌカイトとサヌキトイド
 10 磨石実測図
 11 斧の木取模式図
 12 茎の文様
 13 斧出土状態

表 目 次

- | | | |
|----|-------------------------|-----|
| 表1 | 3OC24溝上層下層出土土器器種別表 | |
| 2 | 3OC24C溝上層下層出土土器の3段階の分類表 | |
| 3 | 3OC24溝上層下層出土壺の文様 | |
| 4 | 3OC24溝上層出土の文様別土器片 | |
| 5 | 3OC24溝上層出土壺口の鉢の文様 | |
| 6 | 3OC24溝上層出土段上口縁部の鉢の文様 | |
| 7 | 3OC24溝上層下層出土壺の肩部の整形 | |
| | 土器観察結果一覧表..... | ⑩～⑯ |
| | 石器観察結果一覧表..... | ⑯～⑰ |



第2図 遺跡調査風景



第3図 瓜生堂遺跡地区割及び調査地域図

I 土 器

1. 弥生式土器（中期）

今回は、主に整理の終った5BW1~5, 3OC24地区出土の土器と、その他の地区出土の完形に近い土器をとりあげた。これらの土器は、第Ⅲ様式から第Ⅳ様式まで同一包合層から出土している。第Ⅲ様式から第Ⅳ様式の変遷過程をみるために、3OC24地区の溝内上層、下層の土器を分類した。しかし、上層、下層とも第Ⅲ様式の特徴をもつ土器と、凹線をもつ土器と一緒に出土している。これらの土器を様式別に分けるのは困難であるが、土器の特徴別に3つの段階に分けることを試みた。

また他地区からこの3段階に入らない第Ⅱ様式に近い土器が出土しており、全体的には4段階に大別し、それぞれを仮に第Ⅲ様式最古、第Ⅲ様式古、第Ⅲ様式新、第Ⅳ様式と想定している。

第1段階 第Ⅱ様式の形態を受けついで土器。

第2段階 第Ⅲ様式の特徴（櫛縞文の盛用、ヘラ磨きなど）をもつ土器。

第3段階 口縁端面に凹線文をもつ土器、凹線文を身にもちいでいるが、その存在が上器の形態に変化をあたえておらず形態は第Ⅱ段階のものと同様の土器。（以後凹線₁と呼ぶ）。

第4段階 巾の広い部分（口縁部、頸部など）に凹線文をもつ土器（凹線₂と呼ぶ）と、凹線₁と凹線₂を組み合わせてもつ土器。

表1 3OC24溝上層下層出土土器種別表

段階 Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ Ⅴ	壺	壺 軒 部	壺 底 部	無縞文	水 差	鉢	高 杯	甕	甕 底 部	蓋	蓋 底 部	不規 則 表 面	計
	18	15	4	1	32	17	36	11	1	76	7	204	
	3	2	0	1	5	2	12	3	0	8	0	36	

表2 3OC24溝上層下層出土土器の3段階分類表

段階 Ⅰ Ⅱ Ⅲ Ⅳ	壺口縁		無縫壺		水差		鉢		高杯		カメ口縁	
	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層	上層	下層
2	17	2	3				24	3	16	1	35	11
3	1	1					4	2			1	1
4			1			1	4		1	1		

第1段階の土器

壺 口頭部が漏斗状に開く壺(1,3,4), 頭部は短くて太い壺(2,12)がある。また擦状文を頭部下に一帯しか施さない土器がある(1,12)が、第Ⅲ様式の最古の段階に属するものにこの種の土器があること

が、奈良県橿原市藤原宮跡下層の調査で報告されており(註1)，これと比較することができる。この壺(1)は第Ⅱ様式に近い形態で、内外共に荒い刷毛目を残している。形態の上で和泉に多い頸部の長い壺との関連が考えられ、乳褐色を量する胎土も瓜生堂に一般的なものではない。しかし、簾状文を数帯重ねたものにも形態上、第1段階に属するとみられるものがある(5)。器体が算盤玉状のもの(4)は大津市南滋賀遺跡出土の第Ⅱ様式末の壺(註2)によく似ている。

水差 柳描直線文帶に、簾状文を1帯加えているが、仕上げも施文も粗雑である(23)。口縁部は把手側にやや傾斜しており、くりこみはない。

壺 腹径が口径より小さい壺(81)，底部が非常に厚く、口縁端面の調整が不十分な壺がある(88)。形態の上で第Ⅱ様式の壺と酷似しているため先の概報で第Ⅱ様式と考えていた壺は、その後検討した結果、この段階に入れる。

この段階に入ると柳描の簾状文、列点文の施文が盛んになる。またハラ磨き調整がすべての器種に共通な特徴としてあげられる。

壺 漏斗状に開く口頸部をもつ壺A(弥生式土器集成による)のうち、口縁端が下に折れ曲るものが多い(6~9, 14, 15, 17~19)。口縁端面と口縁部直下から胴部まで簾状文を数帯施し、最下端は扇形文か列点文で終る(10)。この壺は器壁がうすくバラバラに割れて出土するため完形になるものが少ないが、やや形状の異なるもの(26)、漏斗状に開く口頸部をもちながら頸の太いもの(13)、小型のもの(16)もある。なお、壺Aのうち口縁部端面を上下に拡張した形態のもの(註3)は、今回あつかう資料中にはほとんどない。これが偶然か意味をもつものかは検討を要する。口縁が水平に折れ曲り、頸部が短く立つ壺には文様のないものが多い。しかし、頸部に直線文、波状文を交互に施す例(11)、直線文を数帯施し、最下端に波状文をめぐらした例(25)がある。後者は壺檜の身として用いている。この種の壺のなかには瓜生堂で作ったとみられるものもあるが、ここでとりあげた2個の壺は、第1段階の壺(2, 12)と共に他地方からの搬入が考えられる。水差の1例(21)もこの段階に属するものと考えられる。口縁部内側に刻目文を加えている。なお卵形の器体をもつ超大型の壺がある(20)。いま欠損してはいるが、大きな口頸部をそなえるものとみられる。いちおうこの段階にあつかっておく。

細頸壺 大型の1例(27)は原体の幅の広い壺(3.7cm)で簾状文



第4図 弥生式土器出土状態

をぎっしり施し、その上に円形浮文を貼り付けている。特に肩部の円形浮文は段ごとに3個、4個、5個1組と数を意識して貼りわけている。小型の細頸壺には列点文と簾状文の組み合わせが多い。壺の文様下、腹部から底部はヘラ磨きで調整している。

表3 3OC24溝上層出土壺の文様

口縁端面の文様	簾状文	簾状文	簾状文	無文	不明
頭部の文様	△	直線文	—		
壺Aの口頭部	8	1	3	1	1

無頸壺 全体に出土数は少ない。口縁端を折り曲げたもの(44, 45)から、段状口縁部になるもの(46, 47)まで、いずれも簾状文を施す。また無文の無頸壺で、口縁端面の上端は平らで、外方内方にそれぞれ肥厚するもの(42, 43)がある。ただし、この2例は第3段階にさがるかもしれない。いずれも胎土は白っぽく他からの搬入品と考えられる。

鉢・台付鉢 直口の鉢(40, 41, 50, 52~55)、無頸壺と同じく口縁端を折り曲げた大型の鉢(24, 56, 57)、段状口縁部をもつ鉢(38)がある。これらは壺棺、壺棺の蓋としても多いことが多い(24, 38)。台付鉢は段状口縁部をもち(38, 59, 61, 62)、鉢と同じく文様は簾状文、列点文が多い。直線文を施した台付鉢(62)は第1段階かもしれない。鉢(54)の柄の原体は径2mmの管状のものをたばねて使用している。他にも管状の原体を使ったものがある、調整はヘラ磨きによる。鉢(56)は横位の簾状文の下に縦に簾状文を施しているのが珍しい。壺棺(25)の蓋(24)は体部に直線文と波状文を交

表4 3OC24溝上層出土の文様別土器片

簾状文	41
直線文	12
直線文と波状文	11
直線文と円形浮文	3
直線文と列点文・列点文	3.2
波状文	2
刻み目文	1
簾状文と円形浮文と網格子文	1

表5 3OC24溝上層出土の直口の鉢の文様

無文	9
列点文	2
刻み目文	2
列点文、簾状文、圓形文	1
波状文	1
不明、簾状文、刻み目文	1
圓線文1	2
圓線文2	4

表6 3OC24溝上層出土段状口縁部の鉢の文様

口縁端面文様	器体の文様	件数
列点文	簾状文	2
簾状文	簾状文	1
列点文	圓形文、刻み目文	1
無文	波状文、簾状文	1
簾状文、刻み目文	簾状文	1
刻み目文		1
無文		1
圓線文		2

互に配し、胎土も壺棺の身と同じ赤褐色を呈し、瓜生堂のものではない。台付鉢(58)は棒状浮文の間に流水文を施している。棒状浮文を脚台にまでおろす実例は、奈良県天理市平等坊遺跡にある(註4)。また瓜生堂では、ヘラ磨きだけでついに仕上げた無文の鉢が多い。他に、上半部を欠いてはいるが脚台に波杉文と三角形の孔(不貫孔)をほどこした台付把手付鉢がある(49)。

高杯 口縁が水平にひろがる高杯(63~66)で全面をヘラ磨きしている。高杯(65)は口縁外端面、上端面にヘラによる斜格子の暗文を施している。高杯の脚部の内面に煤付着のものが多いことは、今まで指摘されていない用途を考えさせ注意をひく。

壺 3形態に分ける事ができる。

a形態 口縁部の外反する内外面が円みをもち、端面は丸く終る(82~87、92~95)。數は少ないが平らなものもある(90)。

b形態 口縁部は「く」の字形に外反し、口縁端は上方に立ち上りをもつ(39、99~108)。

c形態 大型壺に多いが、わずかに斜めに外反する口縁部をもち、口縁端は下方に折れ曲る(37、96~98)。口縁端面に刺突文を施すのが多い。河内に特有の土器であるが、まだ本処はわかっていない、この口縁の作り方は壺A、大型鉢の口縁の形態に共通する。

壺にもやはり刷毛目調整で仕上げているものにくらべて、ヘラ磨き調整で仕上げたものが多い。肩部内面を横方向にヘラ磨きしているのは必ず壺のa形態になる。c形態の大型壺は底部まで内外ともヘラ磨きし、壺棺に使用される。壺(105)は胴部に泡の背に矢がつささった絵画をヘラでえがいており、珍しい実例である。

表7 30C 24溝上層下層出土カヌ
肩部の整形

外 面	内 面	上 層	下 層
ヘラ磨き	ヘラ磨き	12	4
刷毛目	刷毛目	5	3
ヘラ磨き	刷毛目	4	3
	刷毛目	3	1
ヘラ磨き		1	
ヘラ削り	刷毛目	1	
刷毛目			1

面に凹線をもつ壺A(28), 壺D(29), 頸部に指頭正底文突帯をめぐらした壺F(34), 台付鉢(60), 水差(22)がこれにあたり, 横描文の施文が少なくなる。また大型の鉢(36)は横描文様帶の下に凹線文をもち, 豊棺の蓋にもちいられている。第2・3・4段階の差を識別することはできない。しかしさきにあげたa形態は第3・4段階にはこらないだろう。また, 口縁端面に凹線文をもつ壺(109~118)は, 第3段階あるいは第4段階に属する。壺(109, 112)は口縁端面の凹線文の上にそれぞれ, 5個, 6個の刻み目文を入れている。

第4段階の土器

壺A(30)の頸部, 高杯(70)の脚部, 水差(71)の口縁部, 鉢(75~79)の口縁部に凹線を数条もつ。直口の台付鉢(72)は1帯の波状文を上, 下の凹線文で囲んでいる。段状口縁部をもつ台付鉢は無文である(68)。高杯(80)は口縁端面を肥厚させた上端に凹線文をもち, 杯部内面は煤付着物が非常に厚く残っている。調整はいずれもヘラ磨きが多いが, 鉢(75)の外面はヘラ削りのままである。他に脚部に円窓をもった台付鉢(74), ヘラによる直線文をもつ脚部(67)がある。また壺F(35)は口縁部の受口状のところに凹線文をもち, 頸部下は貼り付突帯の上にヘラによる刻み目文を入れている。第3段階の壺F(34)の変化したものとして第4段階に入れる。頸部の突帯を欠く1例(33)は第4段階に属するだろう。把手付壺(31)は口縁に穿孔があり, 脚部に刻み目文をもつ。さきに第3段階に入れた壺(111)も脚部に刻み目文をもち, 第4段階に入るかもしだれない。

なお所屬段階は明らかでないが, 壺用の蓋(119, 121)と壺用の蓋(120)がある。壺用の蓋の1例(121)はわれ目にそって, 補修孔をつけている。畿内弥生式土器には補修孔は珍しいものである。

以上, 瓜生堂の中期の弥生式土器を4段階に分けて考えてきた。瓜生堂に多い第2段階に属する土器の特徴をやや明確にできた。しかし, 第3から第4段階への変遷過程はまだ今後の検討を要する。

方形周溝壺の土器

豊棺および供軸土器は第1から第4段階にわたっている。第2マウンドの土器は第1から第3段階まである。これは当然だが方形周溝壺がこの期間にわたって営まれた事を示している。しかし, 第1段階でみた供軸土器の壺(2)はただ型式学的に古いと考えられるだけで, その他の土器においても先に述べたように層位的な裏づけがない。したがって今後さらに精密な検討を必要とする。

なお本遺跡出土の土器片8個体について、奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部文部技官沢田正昭氏をわざわざして、科学的研究を行なっている。現状では、比重、有孔度(porosity)および主な岩石組成についての成果が出ている。このうち注意をひくのは、瓜生堂窯の土器と想定しているものには、角閃石の含有が多い事実が明らかにされていることである(表8)。いっぽう瓜生堂で出土した土器のうち、肉眼的に瓜生堂窯の土器と区別できる胎土の土器にはこれを含んでいない(表8のUU-3)。さきに、大阪府和泉市池上遺跡で出土した生駒西麓窯と推定される土器についての観察において、やはり角閃石を多量に含むことが明らかにされている。従来、生駒西麓の土器には黒色または金色墨母を含むことが重要視されてきたが、角閃石の含有は、この地方の土器を特色づける性質として新たに認識されるにいたったわけである。今後、河内の各地の土器との検討をすすめることによって、いっぽう土器の小地域差、集落差についての問題を明確にしたいものである。

表8 胎土分析結果一覧表 (沢田正昭氏提供)

Sample	Quartz (石英)	Hornblend (角閃石)	Na (ナトリウム)	K.feldspar (長石)
池上遺跡	IKB-3	100	150	44
	IKB-4	100	135	31
	IKB-6	100	246	67
瓜	UU-1	100	131	32
	UU-2	100	80	31
生堂窯	UU-3	100	—	—
	UU-4	100	133	41
	UU-5	100	184	54
	UU-6	100	361	167
	UU-7	100	100	119
	UU-8	100	82	34

註1) 西村康・西弘海・宮本敬一「平城宮跡、藤原宮跡の発掘調査」第3次調査出土弥生式土器(『奈良国立文化財研究所年報1972』、1972)

註2) 田辺昭三「滋賀県大津市南滋賀遺跡の土器」(『弥生式土器集成』資料編2、1961) PL. 44-7

註3) 「瓜生堂遺跡」(1971.12) 図版28

註4) 帝京山大学織田研究会「岩室」P. 20 第3図(1967)

付記 奈良国立文化財研究所技官佐原 真氏には、ご多忙中にもかかわらず、多くの時間、ご指導、ご教示をしていただきました。

<曾我恭子>

2. 弥生式土器（後期）

今回、報告しうる土器は、前回の調査以後の整理過程および新しく出土した土器の一部で、中周の土器に比べればその量は非常に少なく、よって各器型、器種のすべてを見ることはできない（図版37）。これらの中で最も目につくのは壺である。それらは口縁径より腹部最大径が大きいもの（127）、大体同じもの（123、124）、口縁径の方が腹部最大径をはるかにしのぐもの（122）などがあり、（127、123）は焼成・胎土などが堅緻、良好で全般に精良な土器が多い。これらの土器の内面にはほとんど刷毛目があり、口縁部、くびれ部にはなでた痕跡がみられる。内面の器壁にはヘラ削りのなされた形跡はあるまい。鉢には大小2種類があり、（126）には外面に叩目が、そして内面にも叩目が残っているが、（128）は外面をヘラ削りし、その上をなで、ヘラミガキを施し、内面を粗い刷毛目で整形している。高杯（129）は小さな杯部におそらく短い脚部とやや広がる裾部のつくもので、内面をていねいにヘラ削りし、外面には横方向に刷毛目が残っている。（128、129）の口縁端部はいずれも丸くおさめられている。（122、125）は粗砂層中より出土したもので、表面の磨滅はいずれもはなはだしく、壺の外面にはかろうじて叩目が、壺の表面はヘラミガキが看取れる程度である。内面はこれに比して保存度の点では良好である。内面にはつなぎ目が残っているものもある。以上述べた土器は、畿内第5様式の中でも後半に属すると考えられるものが多く、遺跡の東部地域より多く出土している。

（松下彌、今村道雄）



第5図 第5様式土器出土状態

3. 土 篩 器

遺跡の東部地域より出土したものが多く、それらは庄内式土器をはじめとして、多くの土篩器が出土し、中でも 6 AX10よりは 2 点の墨書き土器をはじめ各器種の土器を得ることができた。その中のごく一部の図化しかできなかったが、須恵器とともに簡単に報告しておきたい（図版37、38）。

庄内式土器には（1～3）、高杯、甕が主にみられ、（1）は杯底部とわずかに外反する体部とを区分するのに外側に段を作るなど、庄内式に通有な高杯であり、甕は体部の器壁が削られ薄くなつた痕跡が明瞭な土器で、くびれ部内面に非常にするどい稜をつくっていることなどからみて庄内式に属するものであろう。庄内式につづく土器として、瓜生堂遺跡においては（4～10）があり、これだけでは必ずしも編年するのに十分な量の資料とはいがたいが、後日これらの間隙を新しい資料の出土によって少しでも埋めたい。奈良・平安時代の土器は（11～17）、6 AX10から得られた。これらの土器の観察結果は一覧表に示したように精良な土器が多く、また墨書き土器の出土によって、当地域の南方に若江郡衛の存在が考えられ、6 AX10はその周囲の北側の一地区に相当するのであろう。

＜今村道雄、松下 彰＞



第6図 古墳時代井戸遺構

4. 須恵器

瓜生堂遺跡における須恵器の出土量は、弥生式土器、土師器と比較して極めて少ない。須恵器の出土している層は、そのほとんどが整地層、あるいは後世の擾乱層であって、遺構に伴なって出土した例は、先の概報でふれた30124地区の井戸に伴なうものと、新たに発見された6BH10地区の井戸に伴なうものしかない。

瓜生堂遺跡の須恵器を時期的にみると第Ⅰ期中頃以降に属するものが比較的多く認められ、第Ⅱ期も末期をのぞいて第Ⅰ期と同量程度認められる。しかしながら、第Ⅱ期末から第Ⅲ期全般にわたってはまったくといってよいほど認められず、須恵器のみにおいて大きな空白時間を示している。そして第Ⅳ期の須恵器は再び遺跡全域に認められる状態である。

一方、胎土の内段による観察と、成形技術の優劣などから、陶邑古窯址群で作られたものと、それ以外の地で作られたものとの比較もある程度可能であると思われる。これによると古い時期（第Ⅰ期）に属する瓜生堂遺跡の須恵器は、極めて精製された粘土が使用されており、また大変ていねいな成形を施していく、そのすべてが陶邑製であろうと思われる。ところが、第Ⅱ期に属する当遺跡の須恵器になると、胎土に3～5mm程度の砂粒を比較的多く含む須恵器が目立ってくる。これら一連の須恵器は、成形技術の未熟さからか、非常に器壁が厚く、ヘラ削りも荒く、上述の陶邑製の須恵器との間に大きな差を感じさせる。このような須恵器が陶邑以外の地で製作されたものであるか否か、早急な結論を出すことは危険であるが、もし地方窯で焼かれた物だとするとなら、農中市桜井谷古窯址群や、吹田市駅遊池古窯址群、原古窯址群などが考えられ、これら地方窯の成立の時期の問題や、その政治的、経済的背景を考える上で一つの資料としての価値は大きなものであろう。

第Ⅳ期の本遺跡の須恵器は、第Ⅱ期のそれと比較して、胎土、技術面ともそれほど貧弱なものではなく、また遺跡全般からまんべんなく検出される。

さらに、各時期における須恵器のセット関係をみると、全時期を通してほとんどのセットがそろっており、これといって欠落するものはないが、中でも変が一番多い。

以上、瓜生堂遺跡出土の須恵器の概略を述べてきたが、この中で最大の問題はやはり第Ⅲ期の須恵器の欠落であろう。これは瓜生堂における第Ⅲ期の集落の位置、構造などが、第Ⅰ期、第Ⅱ期の集落

のあり方から大きく変化したものと思われる。

この点に関しては、瓜生堂遺跡のみでなく、他の遺跡でも同じことが云えるのではないだろうか。特に瓜生堂遺跡の場合は、若江郡衙跡がすぐ南に臨接して存在することからも、当時の中河内地方の政治、経済の中心地として大きな地位を占めていたと考えられ、また第Ⅲ期の時期が、我國の歴史においても大きな変化をみせる直前に当たることとも、何らかの関連があると考えられる。

＜中西靖人＞



第7図 6AH9地区、須恵器出土状態

土器番号	1	2	3	4
種類 摘要	壺	壺	壺	壺
法 量 (cm) 器 底 径 高 度 口 底 径 底 径	22.7 28.4(現存値) 23.2 欠損のため不明	26.1 40.65 32.95 9.85	17.4 16.7(現存値) 欠損のため不明	17.2 29.5 19.3 5.2
出土地区	3PT25	2号方形周溝基	3LY19	5DB8
口 文 部 類 整 形 外	○斜めに折がった長い頸部に水平に折れ曲る口縁部 ○口縁裏面に波状文 ○口縁内面に肩形文 ○頸部に6巻の直線文 ○頸部下端に1巻の肩形文 ○荒い刷毛目	○扁平状に開く口頭部、口縁端部は上下に肥厚、下端が外へはりだす。 ○口縁裏面、内面に波状文。 ○部分的にある刷毛目以 はナデ	○簡状の頸部から斜め上 にひろがり、口縁が水平に折れ曲がる。口縁端部は上下に少し肥厚。 ○口縁裏面、内面に刻み目。 ○縱方向に刷毛目	○頸部下は、細くしまり 口縁に向って、なだらかに斜めにひろがり、 口縁端部は下端が外へ はり出す。 ○口縁下端に刻み目。 ○横ナデ
口 文 部 類 整 形 内	○斜め横に荒い刷毛目	○横ナデ		○横方向にヘラ磨き
肩 文 部 刷 整 形 外	○いちじく形の肩部になると 考えられる。	○肩が中ごろで強くはり だす。	○いちじく形の肩部にな ると考えられる。	○そろばん玉形をなす。
肩 文 部 刷 整 形 内	○頸部からつづいて肩部 に7巻の直線文	○頸部下端から肩部にかけ て直線文9巻 最下端に波状文1巻	○頸部からの直線文がつ づく。	○頸部から肩にかけて直 線文、最初と最後がく いちがっている。
底 部	不明	底はヘラ磨き 一部ヘラ削りあり	不明	外側はヘラ削り。
色 調	乳褐色	上半部黄褐色 下半部こげ茶色	乳灰色	外 茶褐色 中核 茶褐色と黒色 内 茶褐色
胎 質 工 程	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒含む。 硬	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	0.2~0.3cmの砂粒含む 硬
備 考	頸部に黒斑(5×10cm)	西側溝内における供献土 器		肩から底にかけて黒斑

注、高杯、台付鉢の場合は口部が杯部に、肩部が脚部になる。

土器番号	5	6	7	8
種類 摘要	壺	壺	壺	壺
法 量 (cm)	口縁径 19.4 器高 28.5(現存値) 腹径 19.5 底径 欠損のため不明	18.3 11.2(現存値) 欠損のため不明	21 9.1(現存値) 欠損のため不明	19.6 7.3(現存値) 欠損のため不明
出土地区	3 PY 14	5 BW 5	5 BW 5	3 OA 23溝内
口 文 部 部	形態 ○頭部下は細くしまり、 口縁に向って長く斜め にひろがり口縁端は外側 下方に折れ曲っている。 ○口縁端面に攘状文 ○口縁下端に刻み ○口縁内面に円形浮文	○斜めにひろがる口縁部 口縁端は外側下方に肥 厚する。 ○口縁端面に攘状文 ○頭部に攘状文	○(6)と同じ ○頭部の攘状文の原体の 幅は他に比べると広い。	○(6)と同じ ○(6)と同じ
肩 部 部	形態 ○口縁付近は横ナデ ○頭部下はしづら目あり。		○頭部の部にヘラ痕あり。	
肩 部 部	形態 ○頸が低くはる。 ○頸部から胴部にかけて 計7帯の攘状文と4 帯の直線文	不明	不明	不明
底 部	不明	不明	不明	不明
色 調	口縁～頸部・淡灰褐色 頭部～胴部・乳灰色 ヘラ磨きの部分は黒色	茶褐色	外 喀灰青色 内 赤褐色	外 赤灰色 内 茶褐色
胎 質	微砂粒、雲母 硬	0.1~0.3cmの砂粒、雲母 含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母 を含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母 含む 硬
備 考	○胴部に黒斑		煤付着一部	

土器番号	9	10	11	12
種類 摘要	壺	壺	壺	壺
法 器 高 度 (cm)	口縁径 23.3 6.3(現存値) 腹径 欠損のため不明	欠損のため不明 28.9(現存値) 25.4 7.0	欠損のため不明 32.2(現存値) 29.7 7.8	21.4 28.2(現存値) 32.2 欠損のため不明
出土地区	5BW5	第3号方形周溝基	3LY19	3PA24
口 部	形態 文様 整 形 外 内	○(6)に同じ ○(6)に同じ ○頭部に腰状文 ○刷毛目	○頭部は直立 ○頭部には文様がないと考えられる。 ○指頭圧痕	○短い頭部に水平に曲る口縁部、口縁端は上方に肥厚する。 ○口縁下端に刻み目 ○頭部下に腰状文 ○頭部、横方向に刷毛目 ○横ナデ
肩 部	形態 文様 整 形 外 内	○だ円形に近い ○腰状文、列点文、扇形文 ○横、斜めにヘラ磨き ○指頭圧痕 不明	○腰部が中ごろで強くはり出す。 ○頭部下端から腰まで直線文波状文を交互にくり返す。	○腰が丸くはりだし、腰径が器高より大きい。 ○直線文6帯 最後は波状文1帯。 ○文様の下・上部は横方向にヘラ磨き、下部は縱方向にヘラ削り。 ○腰部に指頭圧痕あり。 ○斜めに細かい刷毛目。
底 部	部 不 明	ヘラ磨き	○部分的に指頭圧痕 不明	
色 調	茶褐色	茶褐色	淡灰色	淡灰褐色
胎 土 質	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	微砂粒、雲母含む 硬	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	微砂粒含む 硬
備 考		○第3号方形周溝基の供 獻上器 ○腰部に巾の広い黒斑	○肩胴部に黒斑(12×14) cm下半部全面に煤付着	胴部上半に煤付着

土器番号	13	14	15	16	
種類 摘要	壺	壺	壺	壺	
法 量 (cm)	口縁径 22 器高 31.9(現存値) 腹深 31.05 底径 欠損のため不明	20.8 6.8(現存値) 欠損のため不明	22.8 5.55(現存値) 欠損のため不明	11.4 3.9(現存値) 欠損のため不明	
出土地区	3LY21	5BW5	3NW24	5BW4	
口 頭 部	形態 文様 整形 外 内	○太く短い頸部に口縁が 少しひろがり端面は丸 く下方に折れ曲っている。 ○口縁端面に列点文 ○頸部下に直線文 ○横ナデ	○(6)と同じ ○簾状文 ○斜めに刷毛目 ○横方向に刷毛目	○(6)と同じ ○簾状文 ○横ナデ	○短く立つ頸部に斜めに 外反する口縁部、外側 下方に肥厚する。 ○口縁内面に扇形文
肩 部	形態 文様 整形 外 内	○太い頸部のまゝ、腰部 もひろがり腰は低くは り出す。 ○頭部につづき、簾状文 2帯、列点文、扇形文 直線文1帯ずつ ○横方向にヘラ磨き	欠損のため不明	欠損のため不明	欠損のため不明
底 部	部 色 胎 質	不明	欠損のため不明	欠損のため不明	不明
	赤茶色	茶褐色	茶褐色	淡灰青色	
	微砂粒含む 硬	0.2cmの砂粒少量、雲母 含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒含む、 雲母含む 硬	0.3~0.7cmの砂粒、雲母 含む 硬	
備 考	○胴中ごろに黒斑あり	○口縁部に煤付着			

土器番号	17	18	19	20
種類 摘要	壺	壺	壺	壺
法 量 (cm)	口縁径 高 度 底 径 18.2 5.7(現存値) 欠損のため不明	22.2 3.5(現存値) 欠損のため不明	21.6 5.8(現存値) 欠損のため不明	欠損のため不明 63.0(現存値) 54.5 8.0
出土地区	3 OC 24	5 BW 5	3 OA 23	3 LY 13
口 部	形態 文様 整形 内外 ○(6)に同じ ○兼状文 ○横ナデ	○(6)に同じ ○(6)に同じ ○兼状文	○(6)に同じ ○(6)に同じ ○文様帶間ヘラ磨き ○横ナデ	○長い頸部をもつもの と考えられる。 不明
肩 部	形態 文様 整形 内外 ○直線文の下に刷毛目 ○肩上半分は横にヘラ磨き 下半分は縱にヘラ磨き。 ○肩部は横に、胴～底部 は縱にヘラ磨き	○大型の卵形に近い肩部。 ○頭部下に直線文あり ○直線文の下に刷毛目 ○肩上半分は横にヘラ磨き 下半分は縱にヘラ磨き。 ○肩部は横に、胴～底部 は縱にヘラ磨き	○直線文の下に刷毛目 ○肩上半分は横にヘラ磨き 下半分は縱にヘラ磨き。 ○肩部は横に、胴～底部 は縱にヘラ磨き	○直線文の下に刷毛目 ○肩上半分は横にヘラ磨き 下半分は縱にヘラ磨き。 ○肩部は横に、胴～底部 は縱にヘラ磨き
底 部	不明	不明	不明	底は厚い
色 調	外 茶褐色 内 黄土色	茶褐色	黒色	黒色(光沢あり)
胎 質	土 微砂粒、雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒、雲母 含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母 含む 硬	微砂粒、雲母含む 硬
備 考				

土器番号	21	22	23	24	
種類 摘要	水 差	水 差	水 差	壺棺の蓋	
法 量 (cm)	口縁径 器 高 腹 径 底 径 10.5 24.6(現存値) 20.7 欠損	7.7 16.9(現存値) 18.7 欠損のため不明	7.5 17.85 14.5 4.3	24.4 16.4 25.3 6.7	
出土地区	5 O Z	3 O C24 大溝内	3 P T25 溝内	5 D Y 9	
口 部	形 態 文 横面 整 形 内	○口縁は内弯しながらひ ろがり、把手側が低い、 端面内側が削られてい る。 ○口縁端面に刻み目 ○腰から下、指揮え ○頭部に指頭圧痕	○少し広がりをもつ筒状 の口頭部に把手側をえ ぐりとっている。 ○横ナデ	○口縁は直口で、やや把 手側の反対側はひろが り、把手側は下ってい る。 ○頭部に横位の把手 ○口縁内外面に刻目文 ○頭部に直線文3帯 ○ヘラ磨き ○把手はヘラ削り ○ヘラ磨き	○口縁端は外側下方に 折り曲がる。 横ナデ
肩 部	形 態 文 横面 整 形 内	○腰は低くはり出してい る肩に横位の把手 ○頭部につづいて簾状文 計10帯 ○把手はヘラ削り ○指揮え	○腰は低くはり肩部に横 位の把手をもつ。	○頭部は中頃ではりだし 円味をもつ。 ○直線文3帯、間に簾状 文1帯 ○文様間ヘラ磨き ○細かくヘラ磨き ○腰部の上に離き目痕あ り、その上に指頭圧痕	○腰に稜をもち、内方に 傾斜して立つ ○波状文と直線文 ○調中央は横方向にヘラ 磨き、下半部は縱方向 にヘラ磨き。 ○斜めにヘラ磨き
底 部	不 明	不 明	ヘラ		
色 調	灰褐色	赤茶褐色	黒~茶褐色	赤褐色	
胎 質	0.2~0.4cmの砂粒、雲母 含む 硬	微砂粒含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒、雲母 含む 硬	0.1cmの砂粒含む 硬	
備 考	○頭部に黒斑(5×3)cm 腰部の下に粗い引っか き痕		○頭部に黒斑(4×4)cm 口縁から肩にかけて媒 付着	○口縁から頭部にかけて 黒斑(15×7.5)cm	

土器番号	25	26	27	28
種類 摘要	壺棺の身	壺	細頸壺	壺
法量 (cm) 器高 腹径 底径	21.3 36.8 28.1 6.8	16.0 26.0(現存値) 21.6 欠損のため不明	26.4 33.6(現存値) 欠損のため不明	18.0 8.5(現存値) 欠損のため不明
出土地区	5D Y 9	第5号方形周溝墓	3O Y 24	3L Y 13
口文様部 類 形 整 部 外 内	○短く立つ頸部に水平に折れ曲がる口縁部をもつ、口縁端は上下に肥厚する。 ○口縁端面に櫛による刻み目文 ○口縁はナデ ○頭部は横方向にヘラ磨き	○短く斜めにひろがる頸部。 ○口縁端面に波状文 ○頭部に簾状文と直線文 ○頭部に刷毛目 ○横ナデ	○頸部が細くしまり、斜めに広がる。口縁近くは内側する。口縁端は内側に少し肥厚する。 ○口縁上端に削突文 ○口縁から頸部にかけて簾状文 ○口縁に円形浮文4段 ○円形浮文を押しつけたための凹凸あり ○刷毛目	○短い頸部に水平に折れ曲がる口縁部をもつ。腹部は上下に肥厚、特に下に長く肥厚 ○口縁内面に列点文 ○口縁端面に四線文 ○頭部に断面三角形の貼り付け凸彔 ○頭部下に直線文 ○横ナデ
肩文様部 類 形 整 部 外 内	○縱長のだ円形 ○直線文6帯に最後に波状文。 ○腰部は横方向にヘラ磨き。 ○下半部は縱方向にヘラ磨き。 ○縱方向に刷毛目	○ほぼ円形をなす。 ○肩部に簾状文と簾形文 ○文様下は刷毛目 ○肩部はヘラ磨き ○指頭圧痕	○腰が低くはり出る形になると考えられる ○口縁からつづけて簾状文 ○肩部に円形浮文、3個1組、4個1組、5個1組 ○指頭圧痕	不明
底部		不明	不明	不明
色調	赤褐色	淡茶褐色	暗褐色	灰褐色
胎質	土硬 0.1cmの砂粒含む	0.1~0.5cmの砂粒少量、含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒、含む 硬	0.1cmの砂粒含む 硬
備考	○下半部に煤付着、腹部に黒斑(8×18)cm	○外面全体に煤付着 ○溝内における供献土器		○口縁から頸部にかけて煤付着

土器番号	29	30	31	32	
種類 摘要	壺	壺	把手付壺	壺	
法 量 (cm)	口縁径 22.5 器高 15.3(現存値) 腹径 欠損のため不明	21.8 10.7(現存値) 欠損のため不明	11.2 13.3(現存値) 欠損のため不明	21.65 4.1(現存値) 欠損のため不明	
出土地区	3 PP 24 溝内	3 OC 24	3 OG 24	3 OA 23溝内	
口 部	形態 文様 頸 部	○太く直立する頸部に水平に折れ曲る口縁部、口縁端は上方に肥厚する。 ○口縁端面に凹線文あり。 ○頸部下に指頭圧痕文の貼りつけ突帯あり。	○漏斗状に開く頸部に水平に折れ曲がる口縁端部は上下に肥厚する。 ○口縁外端に凹線文を施し、その上に刻み目文と円形浮文。 ○口縁内面はくの字形の列点文。 ○頸部に巾広く凹線文 ○縱方向の荒い刷毛目 ○口縁は横ナデをつくる時生じた凹凸あり。 ○頸部は凹線文あり。	○わずかに外方に傾斜して立ち、斜めに折れ曲る。口縁端は上下に肥厚。 ○口縁部に2孔1対(2組)	○口縁部は外反し上下に肥厚する。 ○口縁端面に凹線文
肩 部	形態 文様 整形外 内	○横ナデ	○肩部から胴部にかけて刷毛目	横ナデ	
底 部	部	不明	○肩部に横位の把手付 ○胴部に刻み目文あり。	不明	
色 調	淡褐色	茶色	灰茶色	赤乳灰色	
胎 質	土 質 硬	0.1~0.3cmの砂粒含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母 極少量含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母 含む 硬	
備 考			○口縁~頸部内外共に 煤付着	○黒斑あり	

土器番号	33	34	35	36	
種類 摘要	壺	壺	壺	甕棺の蓋	
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹深 底径 19.0 14.3(現存値) 欠損のため不明	25.5 19.1(現存値) 欠損のため不明	22.5 31.9(現存値) 29.4 欠損のため不明	40.4 10.8(現存値) 40.7 欠損のため不明	
出土地区	3 LY 13	3 OG 24	3 OY 24	第2号方形周溝墓 3号甕棺の蓋	
口 文 頭 部	形態 整形外 内	○長く立つ頸部に受口状の口縁部をもつ ○口縁部は横ナデ ○頸部は荒い刷毛目 ○口縁部は横ナデ ○頸部はヘラ痕あり	○頸部は漏斗状に開き口縁部は上方に立ち上る受口状のもの。 ○口縁受口状の部分に凹線文 ○口縁部と頸部のつぎ目に凹線文 ○頸部下端に貼り付けた突帯と指強圧痕文 ○頸部は縱方向に刷毛目 ○口縁は横ナデ ○頸部は縱方向に刷毛目	○34と同じ ○口縁受口状の部分に凹線文。 ○頸部下端に貼り付け突帯とヘラによる刻目文 横ナデ	○口縁端は水平に折れ曲る。 ○口縁端面に刻目文 ○横ナデ
肩 部	形態 整形外 内	不明	○刷毛目 ○荒い刷毛目	○上半部細い刷毛目 ○下部はヘラ磨き ○ヘラ磨き	○腰に綫をもちまっすぐ立つ。 ○翼状文3帯と波状文 ○腰部に凹線文。 ○横方向にヘラ磨き。
底 部	不明	不明	不明	不明	
色 調	黒褐色	淡褐色	黄褐色	灰褐色	
胎 質	土 微砂粒、雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒、含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬	
備 考	○内面に煤付着	○口縁に黒斑		○胴部から底部にかけて 黒斑(12×3)cm	

土器番号	37	38	39	40
種類 摘要	壺棺の身	壺棺の蓋	壺棺の身	鉢
法 量 (cm) 高 度 底 径	口縁径 59.8 (復元値) 腹 径 39.7 底 径 8.9	32.5 (復元値) 27.8 45.2 10.8	43.6 43.0 (現存値) 32.1	28.9 3.6 (現存値)
欠損のため不明				欠損のため不明
出土地区	第2号方形周溝墓 3号壺棺	第2号方形周溝墓 2号壺棺の蓋	第2号方形周溝墓 2号壺棺	30C24
口 文 頸 部	形態 ○短く外反する口縁部で 口縁端は外側下方に折 り曲げている。 文様 ○口縁端面に刺突文 整形 外 内 ○横ナデ	○段状口縁部をもつ ○口縁端面に刺み目文 (間隔をあけて) ○横ナデ	○わずかに立つ頭部に斜 め上に外反する口縁部 ○横ナデ、刷毛目調整 ○横ナデ	○内方に傾斜して立つ ○波状文2帯直線文 ○横ナデ
肩 部	形態 ○いくぶん上方の方で肩が がはり出し、なだらかなカーブを持って、そ のまま底部につづく。 文様 ○縱方向にヘラ磨き。 整形 外 内 ○横方向にヘラ磨き。	○腰に後をもち、やや内 方に傾斜して立つ ○直線文 ○腰の下横方向にヘラ磨 き、下半部、縦にヘラ 磨き。 ○上半部横にヘラ磨き ○下半部縦にヘラ磨き	○なだらかなカーブをえ がき、頭部はあまりは り出さない。 ○ 下→上→下へと山形 のヘラ磨き。下部は斜め にヘラ磨き ○刷毛目、上部は刷毛目 の上に間隔を大きくと ってヘラ磨き。	不明
底 部	底はヘラ削り		不明	不明
色 調	茶褐色	黄褐色	暗褐色	黒褐色
胎 質	土 0.2~0.3cmの砂粒、雲母 含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母 少し含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母 含む 硬	微砂粒、雲母含む 硬
備 考	○胴部に黒斑	○胴部から底部にかけて 大きな黒斑	○外縁に煤付有、内面、 底面、胴部下半に黒斑	

土器番号	41	42	43	44
種類 摘要	鉢	無頭壺	無頭壺	無頭壺
法量 器高 底径 (cm)	11縁径 23.4 2.65(現存値) 欠損のため不明	12.5 5.8(現存値) 17.05 欠損のため不明	17.8 5.5(現存値) 欠損のため不明	13.7 10.9(現存値) 20.9 欠損のため不明
出土地区	5BW1~3	5BW5	5BW3	3OC24
口頭部 形態 文様 外 内	○縁に波をもち内寄して立つ口縁部。 ○簡による刻み目文 ○横ナデ	○口縁の上端は平らで外端は外方擴に肥厚する。 ○無文 ○横ナデ	○口縁の上端は平らで、内方に肥厚する。 ○無文 ○横ナデ	○口縁端はわずか下に折れ曲っている。 ○口縁下に2孔1対2組 ○横ナデ
肩部 形態 文様 外 内	○球形に近い胴部になると見えられる。 ○不明	○42と同じ	○縦は低くはりだす。 ○口縁下から脈状文 (表面剥離のため鮮明ではない。) ○横方向にヘラ磨き。	
底部	不明	不明	不明	不明
色調	赤褐色	乳褐色	乳褐色	暗灰青色
胎質	0.1~0.2cmの砂粒、雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒、雲母含む 硬	微砂粒を多量に含む (表面はザラザラ)雲母少量含む。硬	0.1の砂粒、雲母含む 硬
備考				

土器番号	45	46	47	48
種類 摘要	無頭壺	無頭壺	無頭壺	台付鉢
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径 欠損のため不明 16.0 5.85(現存値)	12.6 10.9(現存値) 22.0 欠損のため不明	12.3 4.9(現存値)	6.35 5.5 (脚部) 4.1(裾径)
出土地区	5BW1~3	3PE24	3NW24	3PP24
口 頭 部 (杯部)	形態 文様 整形外 内 ○口縁端を外側下方に折り曲げており、内面は「く」の字型である。 ○口縁端面に腹状文 ○横ナデ	○丸みのある段口縁部をもつ。	○口縁端部を外側へ折り返した段状口縁部をもつ。 ○口縁部下に円孔 ○横ナデ	○縦長にひろがる直口の口縁部、端面は丸い。 手づくね
肩 胴 部 (脚部)	形態 文様 整形外 内 ○腰は低くはり出するものと考えられる。 ○簾状文2帯と列点文 ○簾状文の間と、腰部横方向にヘラ磨き。 ○剥離のため不明	○胴が低くはり器体は斜めに立つ。 ○簾状文 ○剥離のため不明	○45と同じ ○口縁下から腹状文 剥離のため不明	○短い袖広がりの中央の脚部。 手づくね
底 部	不明	不明	不明	
色 調	暗灰青色	赤褐色 (中核)暗灰色	赤褐色 部分的にこげ茶色	茶褐色 (下半部は黒色)
胎 土 質 硬	0.1cmの砂粒、雲母含む	0.1~0.3cmの砂粒含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒多く、 雲母含む 軟	0.2cmの砂粒含む 粗粒 硬
備 考				

土器番号		49	50	51	52
種類 摘要		台付把手付鉢	鉢	無頭壺	鉢
法 量 (cm)	11縦径 器高 腹径 底径	欠損のため不明 6.6(現存値) (脚部) 7.05(縦径)	11.25 4.3 5.8	8.6 2.2(現存値) 欠損のため不明	18.8 9.75(現存値) 欠損のため不明
出土地区		3LY15	3NW24	5BW4	3LY14
口 文 頸 部 (杯部)	形態 文様 整形 内外	○縦長の直口の鉢になる と考えられる。	○口縁端面は丸い。	○「く」の字形に曲る口縁 部	○斜めにまっすぐ立つ口 縁部上端面は平たん。
肩 文 頸 部 (脚部)	形態 文様 整形 内外	○短い脚部ですそまでな だらかにひろがる。腹面 は少し棱をもつが円く 終わっている。 ○ヘラによる沈線と斜線 ○すそに三角形の孔(不 貫孔) ○しづり目あり、すそに 指頭圧痕あり。	○浅い碗状の器体 ○横方向に刷毛目 ○横ナデ	○擦拭文 ○横ナデ	○II縦から簾状文3帯と 扇形文 ○縱方向にヘラ磨き
底 部		底に近い部分はヘラ痕あ り	不明	不明	
色 調	淡褐色	茶褐色~黒色	暗灰青色 中核は黒色	灰褐色~黄褐色	
胎 土 質	0.1~0.3cmの砂粒含む 粗雑 硬	0.2cmの砂粒少量、雲母 含む 硬	0.1cmの砂粒含む、雲母 含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒、雲母 含む 硬	
備 考	○円板充填法				脚部に巾のはっきりしな い黒帯

土器番号	53	54	55	56
種類 摘要	鉢	鉢	鉢	鉢
法量 (cm)	口縁径 18 12.6 19.4 底径 5.2	24.9 11.3(現存値)	26.7 14.2	35.15 6.15(現存値)
出土地区	3 OC 24溝内	3 OC 24	5 C 1 20	5 BW 5
口文様部	形態 ○桃状形の直口の口縁を もち、端面は丸い(口 縁はきれいに整形され ていない) ○横ナデ 内 ○刷毛目	○斜めに広がる直口の鉢 ○口縁からすぐ列点文2 帯(原体は管状のもの) ○横ナデ	○ならかなカーブをえ がく直口の鉢。 ○口縁内端面に刻み、口 縁部に列点文 ○横ナデ	○口縁端を外側下方に折 り曲げ、内端は少し下 がる。 ○横ナデ ○斜め方向にヘラ磨き
肩胴部	形態 ○上部は横方向にヘラ磨 き。 ○下部は縱方向にヘラ磨 き。	○文様の下は横方向にヘ ラ磨き、その下は縱方 向にヘラ磨き。 ○斜めに刷毛目調整をし た上にヘラ磨き。		○籠状文、その下、間隔 (2.5) cmをおいて縱向 に腰状文、その間に列 点文。
底部	底は指頭圧痕、中央部が 少しくぼむ。	不明	底の外へラ削り 内へラ磨き	
色調	茶~黒褐色	外 褐色 内 灰黒色	淡茶褐色	茶褐色
胎土質	0.3~0.5cmの砂粒少量、 雲母含む 硬	微砂粒含む 硬	0.1~0.5cmの砂粒少量、 雲母含む 硬	0.1cmの砂粒、雲母含む 硬
備考	○底部に黒斑(7×5)cm	○巾のはっきりしない黒 斑		

土器番号	57	58	59	60	
種類 摘要	鉢	台付鉢	台付鉢	台付鉢	
法 量 (cm)	口縁径 39.8 器高 10.45(現存値) 腹深 底径	欠損のため不明	19.1 7.0(現存値) (脚部)	21.6 8.0(現存値) (脚部)	24.8 13.1(現存値) (脚部)
出土地区	5BW5	3OH-S	3PD24A溝内	3PO 24	
口 頭 部 (杯部)	形態 文様 模様 外 内	○口縁端を外側下方に折り曲げ、内端は少し下がる。 ○口縁端面に藤状文 ○文様の下剥毛目 ○横方向にヘラ磨き	○腰に棱をもち、内方にやや傾斜して立つ段状口縁部をもつ。 ○藤状浮文に細かい刻み ○模様浮文の間に縦の流水文 ○文様の下剥毛目	○腰に棱をもち、内方にやや傾斜して立つ段状口縁部をもつ。 ○口縁端面に籠状文 ○口縁下は原体の巾の広い籠状文と巾がせまく広い籠状文1帯 ○文様間をヘラ磨き	○腰に棱をもち、直立する段状口縁部をもつ ○浅い彫書きによる直線文、波状文 ○口縁は横ナデ ○ヘラ削りの上にヘラ磨き ○口縁部は横ナデ ○下半部は細かく剥毛目
肩 部 (脚部)	形態 文様 模様 整形 外 内	○裏伏文 ○文様表面をヘラ磨き ○横方向にヘラ磨き	不明	不明	不明 ○わずかにしづり目の痕あり。
底 部	不明				
色 調	茶褐色	暗褐色	灰褐色	上半部 淡褐色 下半部 黒褐色	
胎 質	0.1~0.3cmの砂粒多量、雲母含む硬	0.1~0.2cmの砂粒、雲母含む硬	0.1~0.3cmの砂粒、雲母少量含む硬	0.1~0.3cmの砂粒、含む硬	
備 考				○円板光塗法 ○口縁から脚部まで墨塗	

土器番号	61	62	63	64	
種類 摘要	台付鉢	台付鉢	高杯	高杯	
法量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径 欠損のため不明	24.8 6.2(現存値) (脚部) 欠損のため不明	30.9 26.1 (脚部) 17.0(掘挫)	22.6 8.6(現存値) (脚部) 欠損のため不明	27.5 8.3(現存値) (脚部) 欠損のため不明
出土地区	3 NW23	3 LY13	5 CH20	3 PB24	
口 文 類 部 (杯底)	形態 外 内	○腰に棱をもち、内方に傾斜して段状口縁部をもつ。 ○口縁端面列点文 脚部は腰状文と列点文 ○横方向にヘラ磨き ○部分的に指頭圧痕あり。	○腰に棱をもちまっすぐ立つ段状口縁部 ○宣縁文 ○腰部は横方向にヘラ磨き ○腰部の下から脚部にかけて縱方向にヘラ磨き ○横方向にヘラ磨き	○水平にひろげた口縁部で、内端は1条の凸帯をもち、外端は下に折れ曲る。 ○口縁は横にヘラ磨き、 体部はヘラ削りの上に ヘラ磨き ○口縁は横ナデ、体部は 頬かくヘラ磨き	○軸と同じ形態で外端は 下に長く折れ曲っている。 ○口縁は横方向、体部は 縱にヘラ磨き
肩 文 類 部 (脚底)	形態 外 内	不明	○裾までなだらかにひろがり端部は上下に肥厚する。 ○ヘラ磨き ○上半部しばり目 ○下半部横にヘラ削り	不明	不明
底 部	部	不明	不明	不明	
色 調	濃茶褐色	赤褐色	外 黒褐色 内 暗褐色	褐色	
胎 質	土 質	0.1~0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	微砂粒少量 硬	0.1~0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒少量 雲母含む 硬
備 考		脚部外 杯部内 に黒斑	○杯部内面に植物性付着物 ○口縁に煤付着 ○円板充填法	○口縁に黒斑 (3×12cm)	

土器番号	65	66	67	68
摘要 種類	高 杯	高 杯	高 杯	台付鉢
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径 25.1 20(現存値) (脚部) 欠損のため不明	28.8 12.0(現存値) (脚部) 欠損のため不明	欠損のため不明 21.9(現存値) (脚部) 17.1(縦径) 欠損のため不明	13.2 10.3(現存値) (脚部) 欠損のため不明
出土地区	30L 24土域No.1	3PT 25	3PY 20	3OF 24
口 文 様 頭	形態 ○63と同じ形態で外端は少し内方に向く ○口縁の上端面と外端面に細かい刷毛目の上を斜格子の暗文	○63と同じ形態で内端の凸帯は「く」の字形を呈す。 ○口縁部のかえりの内面は不整形でザラザラ	○63と同じ形態のものか下部は斜めまっすぐ立つ	○腰部ではっきりした棱をもち内寄して立つ口縁部で端面は2本の棱をもつ
部 (杯部)	整 形 外 内	○縦にヘラ磨き ○刷毛目の上にヘラ磨き	○口縁端面は横方向にヘラ磨き ○体部は縦方向にヘラ磨き ○横方向に短く切ってヘラ磨き	○縦方向にヘラ磨き ○上半部は横方向ヘラ磨きの上に縦にヘラ磨き ○下半部は縦にヘラ磨き ○横方向にヘラ磨き
肩 部 (脚部)	形態 ○長い柱状部は中空で器壁はうすい。 文 様 ○ヘラ磨き		○長い柱状部をもち根部はなだらかにひろがり、腹部は上下に肥厚する。 ○柱状部下にヘラによる直線文 ○縦方向にヘラ磨き ○裾は横ナデ ○横にヘラ削り ○しづり目あり ○裾は横ナデ	不明
底 部				
色 質	赤褐色	杯部は黒褐色 脚部は灰色	淡褐色	淡褐色
胎 質	上 0.1~0.2cmの砂粒少し 雲母含む 硬	0.2~0.3cmの砂粒 硬	0.1~0.3cmの砂粒 硬	0.1~0.2cmの砂粒多い 硬
備 考	○円板充填法	○杯部にうすく煤付着 ○円板充填法	○円板充填法	○杯下部に墨斑 ○円板充填法

土器番号	69	70	71	72
種類 摘要	高 杯	高 杯	水 差	台 付 鉢
法 量 (cm)	口縁径 帶 高 腹 径 底 径 欠損のため不明 13.5(現存値) (脚部) 11.5	欠損のため不明 11.1(現存値) (脚部) 14.2(現存値)	9.2 14.7(現存値) 欠損のため不明	21.1 16.3(現存値) (脚部) 欠損のため不明
出土地区	3 P T 25	3 OC 24溝内	3 P Y 1	5 C H 20
口 文 頸 部 (杯部)	形 態 整 形 外 内	不明 ○下半部は横にヘラ磨き ○横方向にヘラ磨き	不明 ○頸部は少し内寄して立つ、端面は丸い。 ○頸部に凹線文 ○横ナデ	○腰に棱をもち、やや外方に直立する口縁部 ○凹線文の間に波状文 ○下半部は細かい縦方向のヘラ磨き ○横ナデ ○下半部は刷毛目の上をヘラ磨き
肩 文 頸 部 (脚部)	形 態 整 形 外 内	○柱状部から裾まで、なだらかにひろがり、端面に凹線文 ○縦にヘラ磨き ○上半部しばり目 ○下半部はヘラ削り	○柱状部は短く裾までなだらかにひろがり、端部は上下に肥厚する。 ○柱状部に凹線文 ○縦にヘラ磨き ○上半部しばり目 ○指頭圧痕、裾部ヘラ削り	○球形に近い形態になると考えられる。 ○直線文と波状文を交互にくり返す。 ○短い柱状部 ○有孔 ○縦にヘラ磨き ○上半部はしばり目 ○下半部は横にヘラ削り
底 部			不明	
色 調	乳灰色	褐色	外 褐色 内 赤褐色	淡灰色
胎 土 質	微砂粒多い 硬	微砂粒多い 硬	微砂粒多い 軟	0.1~0.5cmの荒い砂粒多量含む 硬
備 考	○円板充填法	○裾部に墨斑有 ○円板充填法	○外に煤付着	○円板充填法 ○杯部に墨斑(7×16)

土器番号	73	74	75	76
種類 摘要	台付鉢	台付鉢	鉢	台付鉢
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径 7.5 (縦径)	欠損のため不明 6.8 (現存値) (脚部) 7.5 (縦径)	11.5 9.05 (脚部) 6.95 (縦径)	20.9 12.4 21.5 6.9
出土地区	3 NW 23	3 P F 24	3 OQ 9 南pit	5 BW 1~3
口 文 頭 部	形態 不明	○浅い梅形の器体で、口 縁部は内方に丸く肥 厚する。	○直口の鉢で、口縁部は 内窪する。 ○口縁部に回線文	○腰に棱をもつ直口の鉢 ○口縁部に回線文
	整形外 内	○口縁部は横ナデ ○下半部はヘラ磨き ○横ナデ	横ナデ	○ヘラ削り ○ナデ
肩 部 (脚部)	形態 ○脚部で底はやや内 窪する端面は丸い。 ○脚部に回線文	○底は内方にちぢまる脚 部で端面は丸い。 ○6ヶ所に穿孔		○ヘラ削り
	整形外 内	○穿孔の部分は縦に、そ の下は斜めにヘラ磨き ○横方向にヘラ削り	○斜めに刷毛目、その上 をヘラ磨き	○底はヘラ削り
底 部				
色 調	外 乳灰色 内 灰茶	外 黒褐色~褐色 内 茶色	乳黒褐色	灰褐色
胎 質	0.1cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1cmの砂粒極少量 硬	0.1~0.5cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1cmの砂粒 硬
備 考	○脚部に黒斑 ○円板充填法	○円板充填法 ○口縁から脚部にかけて 黒斑	○内面に植物性付着物 ○口縁部に黒斑(14×3)	

上器番号	77	78	79	80
種類 摘要	鉢	鉢	鉢	高杯
法量 (cm)	口縁径 27.8 高 5.35(現存値) 底 径 深	23.8 6.2(現存値)	24.3 16.0	30.4 13.1(現存値) (脚部) 欠損のため不明
出土地区	5BW4	3PY17	3LY23東西自然溝	5CI20
口 文 様 頭	形態 ○腰に棱をもち、少し内 湾する口縁部 ○凹線文が間隔をあけ一 2本	直口の口縁部 ○口縁部に凹線文	橢形の器体で、口縁内 端が少し下っている。 ○口縁端面に細かく刻み ○口縁部に凹線文	直口の杯部で、端面は 内方が低く傾斜し、肥厚 し、上端に凹線文をも つ ○口縁部に凹線文
部 (杯部)	整 形 外 内	横ナデ	口縁部は横ナデ	上半部は横方向にヘラ 磨き ○下半部は縱方向にヘラ 削り ○口縁部は横ナデ
肩 部 (脚部)	形態 文様 不明	○凹線文の下からヘラ磨 き。	上半部刷毛目 ○下半部ヘラ削り ○刷毛目	脚部の器壁は相当厚い ○ヘラ削り ○しづり目の痕あり。
底 部		不明		
色 調	外 赤褐色 内 淡褐色	淡茶褐色	外 淡褐色 内 淡灰色	外 乳白色 内 全面にわたって煤付 着のため不明
胎 質	上 0.2cmの砂粒 0.3 の雲母含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒 雲母少量含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒、 雲母含む 硬
備 考				○内面全体に厚く煤付着 ○杯の上半部に黒斑

上器番号		81	82	83	84
種類 摘要		カ メ	カ メ	カ メ	カ メ
法 量 (cm)	口縁径 器 高 度 径 底 径	9.9 4.3(現存値) 9.0 欠損のため不明	11.75 8.65(現存値) 12.8 欠損のため不明	12.4 4.2(現存値) 欠損のため不明	14.6 3.75(現存値) 欠損のため不明
出土地区		5 BW 5	5 BW 4~5	5 BW 1	5 BW 1~3
口 文 頭	形 態 整 形 部	○口縁部は外反するが、内外とも円味をもち端面は丸い。 横ナデ	○口縁部は斜めに外反するが、内外とも円味をもち端面は丸い。 ○口縁端面に刻み目文 ○口縁内端に横方向に荒い刷毛目	○82に同じ 横ナデ	○82に同じ 横ナデ
河 文 頭	形 態 整 形 部	○腹径は口径よりも小さい。 ○ヘラ削り	○胴部はあまりはり出さずなだらかなカーブをもつ。	○82と同じ形態と考えられる。 ○交差する刷毛目 ○荒い刷毛目	○ヘラ削き ○横ナデ
底 部		不明	不明	不明	不明
色 調	灰褐色	外 灰褐色 内 口縁 灰褐色 胴 茶褐色	乳黄色	茶褐色	
胎 質	上: 0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 質: 硬	0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	○肩部に断ぎ目痕あり
備 考					

土器番号	85	86		
種類 摘要	カ メ	カ メ		
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径	13.0 7.0 (現存値) 欠損のため不明	14.5 8.4 (現存値) 欠損のため不明	
出土地区	5 BW 1 ~ 3	5 BW 5		
口 部	形 態 文 様	○ 85に同じ	○ 85に同じ	
	整 形 外 内	横ナデ	横ナデ	
肩 部	形 態 文 様	○ 85と同じ		
	整 形 外 内	○ 橫方向の細かい刷毛目 の上にヘラ磨き ○ 横ナデ	○ 橫方向に深い刷毛目	
底 部	不 明	不 明		
色 調	黄褐色	濃茶色		
胎 土 質	0.1~0.2 cm の砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.2 cm の砂粒 雲母含む 硬		
備 考		外全面に焼付着		

土器番号	87	88	89	90	
種類 摘要	カメ	カメ	カメ	瓶	
法量(㌘)	口縁径 高 腹 底 底 径 底 径	15.9 4.7(現存値) 欠損のため不明	11.2 15.7 12.1 4.65	11.1 8.9(現存値) 12.6 欠損のため不明	14.7 23.3 16.1 5.1
出土地区	5 BW5	5 BX~BY7	30C24溝内下層	30A23溝内	
口部	形態 文様 整形 (外) (内)	○認に比べるとほぼ水平に外反する ○口縁は短く水平に折れ曲る ○口縁端面の整形不充分 ○横ナデの上に細かい刷毛目 ○刷毛目	○口縁は水平近く折れ曲り、内面に棱をもつ。端部は矩形をなす ○口縁端面に刻み目文	○わざかに直立する頭部をもち、口縁は水平に折れ曲る。端面は矩形	
肩部	形態 文様 整形 (外) (内)	○認と同じ形態になると 考えられる ○煤付着のため不明 ○横方向にヘラ磨き	○口径とあまり変わらない 腹径で器壁も他のカメに比べると厚い。器面の凹凸が激しい ○上半部はヘラ磨き ○下半部はヘラ削りのまま ○ヘラの痕あり	○腰部は丸くはり出す ○ヘラ削りの上に細かい ヘラ磨き ○縦に間隔をあけてヘラ 磨き	
底部	不明	(外) 指頭圧痕 底は厚い		焼成後に穿孔	
色調	(外) 濃茶色 (内) 茶褐色	(外) 茶褐色 (内) 黄褐色	灰褐色	茶~黒褐色	
胎質	0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	砂粒多い 雲母含む 硬	微砂粒 雲母含む 硬	
備考	○外面に煤付着	○胴上半部に煤付着 ○腰の部分に黒斑	○ほとんど全面に煤付着	○頭部と肩部の一部分に 煤付着	

土器番号	91	92	93	94
種類 摘要	瓶	カメ	カメ	カメ
法 量 (g)	口縁径 器高 腹径 底径	欠損のため不明 15.5 23.7 17.45 4.8	15.5 23.7 17.45 5.8	17.2 24.6(現存値) 20.1 欠損のため不明 21.4 8.95(現存値)
出 土 地 区	3 OA23溝内	3 LY18	3 ZZ	5 BW1~3
口 部	形 態 文 様 整 形 (外) (内)	○體に同じ ○横ナデ ○左右の腰の高さがちが い、形もいびつである が、だ円形に近い。	○體に同じ ○横ナデ ○だ円形をなす	○體に比べると少し上向 きに外反する ○横ナデ
肩 部	形 態 文 様 整 形 (外) (内)	○ヘラ削り ○縱方向にヘラ磨き ○上半部は横方向、下半 部は縱にヘラ磨き	○縱方向にヘラ磨き ○部分的にヘラ磨き	○縱方向にヘラ磨き ○横方向にヘラ磨き
底 部	焼成後に穿孔	内外ともヘラ削り	不明	不明
色 調	黒褐色	暗茶褐色	黒褐色	茶褐色
胎 土 質	0.1~0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	微粒 雲母含む 硬	0.1~0.25cmの砂粒 雲母含む 硬	0.2~0.5cmの荒い砂粒 雲母 硬
備 考	○内面に煤付着	○外面、厚く煤付着	○全面に煤付着	○口縁に部分的に煤付着

土器番号	85	96	97	98
種類 摘要	カメ	カメ	カメ	カメ
法 量 (mm)	口縁径 21.4 器高 21.3(現存値) 腹径 23.7 底径 欠損のため不明	28.9 6.9(現存値) 欠損のため不明	37.2 4.35(現存値) 欠損のため不明	38.8 7.8(現存値) 欠損のため不明
出土地区	3 PY16	3 OC24溝内	5 BW3	5 BW1~3
口 部 類 型	形態 ○鶴に同じだが内面は稜 をもつ 文様 横ナデ	○わずかに立つ頸部に斜 めに外反する口縁部で 端部は下に少し肥厚 横ナデ	○口縁部は少し斜めに立 ち、端部は下に折れ曲 る ○口縁端面に刺突文 ○横ナデ	○口縁上端は平らで外端 は下に折れ曲っている ○口縁端面に刺突文 ○横ナデとヘラ磨き
肩 部 類 型	形態 ○腹径は口径とあまり変 らないでなだらかなカ ーブをもつ 文様 ○縦方向のヘラ磨き ○肩部上に輪づみの痕あり ○刷毛目			○縦方向にヘラ磨き ○横方向にヘラ磨き
底 部	不明	不明	不明	不明
色 調	黒褐色	茶褐色	茶褐色	茶褐色
胎 質	土 0.1~0.2cm砂粒含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	0.2cmの砂粒含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒を含む 硬
備 考	○外全面に煤付着	○口縁部に煤付着		

土器番号	99	100	101	102
種類 摘要	カメ	カメ	カメ	カメ
法 量 例	口縁径 器高 腹高 底径 欠損のため不明 16.1 4.9(現存値)	13.5 9.5(現存値) 15.4 欠損のため不明	16.9 9.3(現存値) 欠損のため不明 欠損のため不明	22.3 3.45(現存値) 欠損のため不明
出土地区	5BW5	5BW4	5BW5	5BW5
口 文 部 類 部 整 形 (外) (内)	形態 ○口縁部は「く」の字形に 外反し端部は上方に少 し立上りをもつ 横ナデ	○99と同じ形で立ち上り をもつ 横ナデ	○99と同じ 横ナデ	○口縁部は水平に折れ曲 り端部は上方に少し立 ち上りをもつ 横ナデ
肩 文 部 刷毛目 部 整 形 (外) (内)	形態 ○肩部ははり出ると考え られる ○煤付着のため不明 ○交差する刷毛目	○99と同じ形態になると 考えられる ○刷毛目 ○刷毛目の上に部分的に 斜めにヘラ磨き	○99と同じになると考 えられる ○部分的に縦に荒い刷毛 目	○口径より肩部は内方に 入る ○交差する刷毛目 ○斜め、横方向に刷毛目
底 部	不明	不明	不明	不明
色 測	濃茶色	(外)赤褐色 (中核)黒色 (内)乳黄色	茶褐色	乳灰色
胎 土 質	微砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1cmの砂粒 雲母含む 硬	微砂粒 雲母含む 硬
備 考	○全面に煤付着	○肩部に煤付着	○口縁から肩部にかけて 一部煤付着	○全面にうすく煤付着

土器番号	103	104	105	106	
種類 摘要	カメ	カメ	カメ	カメ	
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径	12.8 22.1 14.8 5.3	25.6 9.35(現存値) 欠損のため不明	30.0 20.0(現存値) 34.5 欠損のため不明	34.6 6.3(現存値) 欠損のため不明
出土地区	3 LY19	5 BW5	5 CU 8 pit6	5 BW1	
口 文 様 類 部	形態 整形 (外) (内)	○口縁部は「く」の字形に 外反し、端部は少し立ち上りをもち、矩形を なす 横ナデ	○99に同じで端面はナデ による凹みをもつ 横ナデ	○円みを帯びた「く」の字 形に外反する口縁部で、 端部は少し立ち上りを もつ 横ナデ	○99に同じ 頭部も(104)に同じ 横ナデ
肩 文 様 部	形態 整形 (外) (内)	○腰はあまりはり出さず なだらかなカーブをえ がいて底部につづく ○上下分は刷毛目 口縁下部はその上から 横ナデ ○下半分はヘラ磨き ○細かく縱方向に刷毛目	○胴部はあまりはり出さ ない ○縱方向に刷毛目	○肩部から丸くはり出さ ない ○背に矢がささった底の 絵 ○荒い刷毛目 ○斜めに荒い刷毛目	○肩部から丸くはり出さ ない ○背に矢がささった底の 絵 ○ヘラ磨き ○ナデ
底 部		不明	不明	不明	
色 調	(外)茶~黒褐色 (内)褐色~黒色	茶褐色		茶褐色	
胎 質	微砂粒 金雲母含む 硬	0.2 cmの砂粒含む 硬	0.1~0.2 cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1~0.15 cmの砂粒極少 量含む 硬	
備 考	○全面に煤付着	○口縁から胴部にかけて 一部煤付着	○胴部に煤付着	○口縁端面にわずかに煤 付着	

土器番号	107	108	109	110
種類 摘要	カメ	カメ	カメ	カメ
法 量 (g)	口縁径 36.0 器高 8.45(現存値) 腹径 欠損のため不明	28.9 43.35 35.85 9.55	16.8 26.6 20.7(現存値) 欠損のため不明	15.8 25.15 19.0 5.8
出土地区	5 BW 5	第2号方形周溝墓	3 PD24 A溝内	3 LY 17
口 部 形 態 文 様	○99よりも水平に折れ曲 る ○頭部は(104)と同じ	○99に同じ ○(104)と同じ	○斜めに外反する口縁部 で端部は少し立ち上り をもつ ○口縁端面は凹線文の上 に刻み目文(一部のみ)	○(109)と同じ ○口縁端面に凹線文
整 部 (外) (内)	横ナデ	横ナデ	横ナデ	横ナデ
肩 部 形 態 文 様		○腰は丸くはり出しなだ らかなカーブをもつ ○上半部荒い刷毛目	○だらかなカーブをもつ。 腰はあまりはり出 さず ○口縁下から刷毛目	○(109)と同じ
整 部 (外) (内)	○刷毛目 ○ナデ	○下半部はヘラ削り ○荒い刷毛目	○胴部中ごろはヘラ削り ○荒い刷毛目	○表面剥離のため不明 ○細かく刷毛目
底 部	不明	底は指頭圧痕	不明	
色 調	乳灰色	茶~黒褐色	暗褐色	(外)赤褐色 (内)黄白色
胎 土 質	0.1cmの砂粒含む 雲母含む 硬	0.1~0.2cm砂粒 雲母含む 硬	微砂粒 硬	0.1~0.3cmの砂粒多い 硬
備 考	○一部煤付着	○肩部に煤付着 ○4号麥稈(蓋がない)	○全面に煤付着	

土器番号	111	112	113	114
種類 摘要	カメ	カメ	カメ	カメ
法量 (cm)	口縁径 15.1 器高 10.5(現存値) 腹径 19.1 底径 欠損のため不明	20.1 8.7(現存値) 欠損のため不明	24.7 37.2 30.9 8.9	15.2 4.65(現存値) 欠損のため不明
出土地区	5 BW 4	3 OC 24	3 OY 24	5 BW 5
口部	形態 文様 横ナデ 整形部 (内)	○「く」の字形に外反し端部は上に立ち上りをもつ ○口縁端面に凹線文 ○口縁端面に刻み目 (5個のみ)	○(109)と同じで、内面は少し凹みをもつ ○頸部に少し凹みをもつ ○口縁端面に刻み目 (5個のみ)	○斜めに外反する口縁で内面は丸く、端部は上方内側に向って立ち上りをもつ ○口縁下は凹みをもつ ○口縁端面はナデによる凹線文
肩部	形態 文様 横ナデ 整形部 (内)	○(109)と同じ形態になると考えられる ○肩部中ごろに横による刻み目文	○(112)と同じ	○肩からひろがり、肩部で丸くはり出し底部につづく
底部	不明	不明	外面に指頭圧痕	不明
色調	(外)乳灰色 (内)茶褐色	(外)黒褐色 (内)茶褐色	茶褐色	濃茶色
胎土質	0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	微砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒 黒雲母含む 硬	0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬
備考	○口縁下に一部茎付着		○内面の肩下半部に焼付 着 ○肩部に黒斑(14×11) ○底部に黒斑(5×12)	

土器番号	115	116	117	118
種類 摘要	カメ	カメ	カメ	カメ
法 量 (mm)	口縁径 高 底 径 15 8.8(現存値) 17.1 欠損のため不明	37.6 22.1(現存値) 41.3 欠損のため不明	27.4 4.1(現存値) 欠損のため不明	27.4 4.5(現存値) 欠損のため不明
出土地区	3 OC24溝(下)	3 OC24溝(下)	5 BW4	5 BW4
口 頸 部	形態 文様 整 形 (外) (内)	○(109)に同じ ○(110)に同じ	○(113)に同じ ○頭部が少し凹む ○(110)に同じ	○ほぼ水平に外反し、口 縁端部は立ち上りをも つ ○頭部は凹みをもつ(110) に同じ
肩 部	形態 文様 整 形 (外) (内)			○(109)に同じ ○わずかに立つ頭部を もつ
底 部				
色 調	(外) 黒褐色 (内) 濃茶色		○腰高で丸くはり出す	
胎 質	土 質 0.1~0.2cmの砂粒 雲母含む 硬	黒褐色	不 明	不 明
備 考	○全面に煤付着			

土器番号		119	120	121	
種類 摘要		蓋	蓋	蓋	
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹深 底径	7.8 2.3	15.7 7.7 12.8 4.8	16.2 5.2	
出土地区	3 NW24溝状遺構	3 OA23	3 OA23		
口 部	形態 文様 整形 (外) (内)	○広いつまみをもち、笠形をなす。口縁端部は上方に肥厚する ○2孔1対2組 指成形	○つまみの部分は上げ底で、ならかな器体に凹みのある頸部から斜めにひろがる口縁部 ○口縁端面に刻み目文 ○口頭部はナデ器体はヘラ削り ○指おさえ	○つまみをもち笠形をなす。口縁端面は丸い ○2孔1対2組と焼成後の穿孔がある(3孔) (割れた部分をつなぐためと思われる) ○刷毛目 ○横ナデ	
肩 部	形態 文様 整形 (外) (内)	不明	不明	不明	
底 部	不明	不明	不明		
色 調	灰褐色	黄茶褐色	茶色		
施 工 質	0.1~0.3cmの砂粒 雲母含む 硬	0.1~0.3cmの砂粒含む 硬	微砂粒含む 硬		
備 考		○器体部に黒斑(8×9) 内面に煤付着			

土器番号	122	124	125	126
種類 摘要	壺形土器	壺形土器	小型壺形土器	鉢形土器
法 量 (cm)	口縁径 13.0 底 高 10.2 底 径 不明	15.4 不明	不明 14.0 3.6	18.4 8.2 不明
出土地区	6 A V10	6 AW10	6 BB10	6 A V10
口 文 様 部	形態 整形 (外) (内) ○最大径が口縁部にあり、急に頸部より屈折して外反する。 ○内外ともに横ナデがなされている。	○縁れた頸部からわずかに外反する口縁部に続く。 ○外面、内面ともに横ナデがなされている	○上端部をそいで外面にわずかな棱をつくり出している。 ○外端部が内端部よりやや低位にある傾斜した端面である。 ○内外面ともに丁寧な横ナデがある。	○上端部をそいで外面にわずかな棱をつくり出している。 ○外端部が内端部よりやや低位にある傾斜した端面である。 ○内外面ともに丁寧な横ナデがある。
肩 文 様 部	形態 整形 (外) (内) ○肩部は殆んど張っていない。 又胴はわずかにふくらんで底部へすぼまると思われる。 ○外面は叩き目あり。 ○内面は刷毛目の痕跡がある。	○肩部が張り出しどの中央部の張りのみられない面長な体部、底部へすぼまっていくのである。 ○外面は斜行した叩き目、内面はゆるやかな斜行の刷毛目がある。	○胴下部が張り出し頭部はほとんど伸びまらない。 ○叩き目、刷毛目が上半部にあり、中央部はヘラナデ、ヘラミガキが施こされている。 ○内面胴上部に離ぎ目が残り、それに沿って刷毛目もある。	○内・外面とも叩き目が横位に施こされている。 ○ヘラ削りが斜め上方向(右下→左上)に行なわれている。
底 部	不明	不明	叩きによって角のある底部となっている。ヘラ磨きがなされている。	とがり気味の丸底。叩き目が四方向にありヘラ削りが下から上方に向う。
色 調	外面は赤褐色で煤の付着がある。 内面は赤褐色	外面は赤褐色で煤の付着がある。 内面は茶褐色	外面は褐色 内面は淡黄褐色	褐色
胎 土 質	砂粒を多く含みザラザラしている 軟弱	砂粒を多く含みザラザラしている 軟弱	砂粒を含む 堅緻	砂粒を含む 堅緻
備 考	○胴下半を欠く	○胴下半を欠く	○口頭部を欠損する	○最大径が口縁部にありやや張りをもって底部へすぼまる。 ○底部はヘラ削りによつてつくられてい。

土器番号	123	127	128
種類 摘要	壺形土器	壺形土器	壺形土器
法量 (cm)	口縁径 15.0 身高 15.6 腹径 底径	14.4 不明	12.5 10.5 10.9 4.7
出土地区	5 DX 9	6 AW10	6 B 110
口部 文様 整形部 (外) (内)	<p>○頸部は緩やかに外反しており、口縁端部に到つても肉厚の変化はない。内外器面共に横ナデをなされている。</p> <p>○胴部から続く頸部の叩き目は横ナデによって消されている。</p> <p>○胴部と口頭部との継ぎ目跡が残っており、継ぎ目跡の整形されている所は明瞭な綫を成している。</p> <p>○底部まで器壁はそうとう厚い。</p> <p>○内外器壁共に横ナデがある。</p>	<p>○口縁端部は立ちあがりつまみあげによる口唇部を形成している。</p> <p>○口唇部の外面上に一条の沈線がめぐっている。</p> <p>○更に口唇部下にも一条乃至二条の沈線がある。</p> <p>○内外器面ともに横ナデがある。</p>	<p>○口縁端部から底部まで非常に磨滅が激しく叩き目のほとんどが消滅している。</p> <p>○口縁の端部は(外上方へのび)面をなす。</p> <p>○くびれ部には指痕がみられる。</p> <p>○不明</p>
肩部 文様 整形部 (外) (内)	<p>○肩はほとんど張らず、口縁径と殆んど同様の腹壁をもつ。肩部の叩き目は右上→左下の方向をもち胴部はその斜傾の叩き目の上を横方向に加えている。</p> <p>○肩部にある叩き目は、強く一度だけのものと、弱く二度、三度程度加えている叩き目がある。</p> <p>○内面器壁は横方向に(左→右)刷毛目があり底部からの刷毛目の上に重っている。</p>	<p>○肩部外面は叩き目があり、頸部に近い部分は横にナデしている。</p> <p>○肩部内面は斜め(左上→右下)に刷毛目がある。</p>	<p>○表面の剥離、磨滅とともに激しい。</p> <p>胴部最大径が器高の四近くにあり、あまり肩のはらない形である。(叩き目が消失しているのであろう)</p> <p>○約2mm幅のあらい刷毛目が下から上へ不均等についている。</p>
底部	<p>○上げ底であり刷毛目が縱方向(下→上)にある</p> <p>○輪状の底部の中央は窪んでいる。</p>	不明	<p>○輪状の底部を押出した形をとり、非常に粗雑なものである。</p>
色調	外面は黒色乃至黒褐色である。 内面は淡黒色である。	暗褐色 媒の付着がある	外 淡黄褐色 内 黒色
胎土質	砂粒を含む 堅緻である	砂粒を含む 堅緻	普通(小石4mm、砂粒を多く含む) 軟弱
備考	<p>○口頭部と胴部の継ぎ合せ部分は胴部より、口頭部に粘土を引き上げ、合せ部分よりや上部まで粘土を引き上げてるので彼は継ぎ目部分よりや上にめぐる。</p> <p>○中央下半を欠損している。</p>	○胴中央部以下を欠損する。	○内面にスス付着(外表面は消失したものか)

土器番号	129	130	131	132	
種類 摘要	變形土器	高杯形土器	鉢形土器	小型變形土器	
法量 (回)	口縁径 器高 腹径 底径	10.9 9.7 9.9 3.8	11.9 4.4(杯高) 2.4(脚径) 他は不明	12.5 10.5 10.9 4.7	13.1 4.9(高) なし なし
出土地区	6 B E 10	6 B L 6	6 B L 6	6 A H 10	
口文様部	形態 整形(外) (内)	○外上部へ立ち上がりその端部はうすぐ丸く仕上げられている。 ○外面は(一部)横方向に叩き目がつき内面は横になでられている。 ○外面は横方向に粗い刷毛目をつけ、端部は内外とも横になでている。内面で横ナデの見られない箇所には粗い刷毛目がみられる。	○端部は丸くおきめられている。 ○なし ○外面は横方向に粗い刷毛目をつけ、端部は内外とも横になでている。内面で横ナデの見られない箇所には粗い刷毛目がついている。	○形態で端部は丸く收められている。 ○なし ○外面はヘラ削りの後その上を横になで平滑にしている。内面は体部から端部近くまで外面の叩き目と同じ原体を用いたと思われる叩き目がついている。	○丸味の口縁端部である ○頭部がやや肉厚になつて外反する口縁に続く ○なし ○外側は横ナデ ○内面は斜め縦方向にヘラ削りの後横ナデを施している。
肩文様部	形態 整形(外) (内)	○肩が張り、肩部最大径は器高の約位の箇所にある。 ○外面は歯減しているが叩き目がある ○内面はなでられている	○小さな瓶状の杯部である。 ○外面には粗い刷毛目が横方向にあり、内面にはヘラ削りの痕跡がかすかに残りその上をなで平滑に仕上げている。	○(130)と同様の形態をとる。 ○ヘラ削りが施されたままの荒い器面で底部から体部へと斜め方向の砂粒の動きがみられる	
底部	底部	○平底をなして 128より数段うすくつくらされている ○削られたものか。	外面には刷毛目はみられず、内面にヘラ削りの痕跡を明瞭に見ることが出来る。	丸い底の外面は、ヘラ削りなされたまま内面には指痕がついている。	平底 内、外面ともにヘラ磨きがある。
色調	外 黄褐色 内 黄褐色	外面 黑褐色 内面 黄褐色	外面 黄褐色 内面 黑褐色	内面とも黄褐色	
胎工質	普通(小石2~4mm、砂粒を含む) やや軟弱	良好(砂粒を少し含む)	良好(砂粒を少し含む)	砂粒を含む やや堅硬	
備考	○口縁の外側の一部にスス付着	○内外面ともに平滑な仕上がり。 ○外面のほとんどならびに口縁の内面の半周にスス付着	○外面、内面のススの付着範囲広し。 ○130、131は黒色灰層中より出土。	○土師器か	

上器番号	2	3	4	5	
種類 摘要	變形土器	變形土器	變形土器	變形土器	
法 量 (mm)	口縁径 14.8 器高 不明 腹径 底径	15.8 不明	13.8 不明	18.2 不明 27.4 不明	
出土地区	6 B E10	6 A W10	6 B A10	3 P Y20	
口部	形態 文様 整形 (外) (内)	○上向きのはね上りの口縁部であり、その立ちあがり部分は縫をなしている。 ○外面は横ナデがあり、くびれた部分は斜め方向に(右上→左下)刷毛目があり、くびれ直下には横方向に叩き目が重なる。 ○内面は横ナデである	○わずかに屈曲しつつ伸びる口縁部の端部は、小さく上方につまみあげられ端面を形成する ○内外面は横ナデ ○頸部くびれ直下に横ナデがある。	○口縁部は頸部からの屈折が少ない。 ○外面には横方向に刷毛目があり、内面は横ナデの後に刷毛目が斜め(左上→右下)につきかれている部分もある。 ○頸部は縱方向・横方向に刷毛目がある。	○頸部に対し、内反しつつ、鈍いふくらみを有して立ち上っている。 ○口縁端部上面には横ナデによる凹線帯がある。 ○内面端部は内方にふくれる。 ○内外器面共に横ナデである。
肩部	形態 文様 整形 (外) (内)	○口縁よりわずかに広い腹径をもつ。 ○側部内面はヘラ削りによって平滑に薄く仕上げられている。 ○外面は叩き目が斜め(右上→左下)にあり、肩部には横位の叩き目が入っている。	○外面は(右上→左下)叩き目があり、刷毛目が右上→左下の方向にある。 ○内面はヘラ削りで平滑にされ器壁は非常に薄い	○肩部より胴中央部にかけて刷毛目がみられる ○頸部には難ぎ目が残っている。 ○難ぎ日の断面は斜行し口縁部の粘土帯の内面下端が内面に残っている難ぎ目跡であり、頸部からの粘土帯の上部が外面に出る。	○外面は不定方向の刷毛目がある。 ○内面は粗雑なヘラ削り痕がある。
底部	不明	不明	不明	不明	
色調	暗褐色 煤の付着がある	黒褐色 煤の付着がある	暗褐色 煤の付着がある	褐色	
胎土質	砂粒を含む 堅緻	砂粒を含む 精緻である	砂粒を含む 堅緻	砂粒を含む 堅緻	
備考	○胴中央部以下を欠損する。	○胴中央部以下を欠損する。	○胴中央部以下を欠く。	○胴中央部以下を欠損する。 ○布留式	

土器番号	1	8	9	10
種類 摘要	高杯形土器	高杯形土器	器台形土器	高杯形土器
法 量 (mm)	口縁径 24.4 器 底 幅 高 底 径 格 不明	17.6 15.2 10.6cm	不明 10.9	14.0 不明
出土地区	6 A T10	6 B E10	6 B E10	6 A T10
口 文 頸 部 整 形 (外) (内)	<p>○口縁部は外反しその端部は丸味をもってうすくおさめられており、横ナデされている。</p> <p>○杯下部にヘラみがきの痕がある。</p> <p>○外面低位に棱を有している。棱は横ナデされ接合部より棱まで瓶方向にヘラ磨きがある。</p> <p>○底部内面はヘラ削りされ底部から上方にヘラ磨きを施している。</p>	<p>○口縁端面は丸くおさめられている。口縁部外面にはにぶい回線文が走りそれに内面の段に照応するものである。</p> <p>○口縁部は内、外面ともに横ナデがある。</p> <p>○内外面ともに指頭圧痕が顕著であり、器面の凹凸が目立つ。</p>	<p>○杯底部に貫通孔がある</p>	<p>○内器面は緩やかな斜行をなしている。杯下部からの肉厚は、中央部の立ちあがりより薄くななり、杯部は外反している。</p> <p>○内、外表面ともに横ナデがなされている。</p>
肩 部 整 形 (外) (内)	<p>○中空円筒、わずかに巾ふくらみである。</p> <p>○外面、丁寧にヘラでナデされている。</p> <p>○肩部の中空は棒状のものによって作られたのであろう。</p>	<p>○脚部は中空で中央はふくらんでいる。内面の整形はなされておらず強い紋目がある。</p> <p>○杯部と脚部の接合部は肉厚化され、指痕がある。又、脚部と握部との接合部にも指痕がある。</p>	<p>○ややふくらみをもって斜行し、三個の円孔がみられる。円孔は外面より内面が広い。</p> <p>○外面は器受部と脚台部の接合部より斜め右下方にヘラ磨きがある</p> <p>○内面は横ナデがなされている。</p>	不明
底 部	不明	不明		不明
色 調	赤味のきした黄褐色	黄褐色	下部に黒斑を有し、黄褐色である。	赤褐色
胎 上 質	砂粒をやや含む 良好である	砂粒含まず 良好	砂粒含まず 良好	砂粒を含む
備 考	○端部を欠損している。		○器受部を欠損する。	○杯部片だけが残されている。

土器番号	6	7	11	17	
種類 摘要	壺形土器	壺形土器	壺形土器	壺形土器	
法量 (cm)	口縁径 9.0 器高 15.0 腹径 12	口縁部 不明	16.2 13.3 15.6	14.3 不明	
出土地区	6 B E10	6 B E10	6 A U10	6 A W10	
口 頭 部	形態 文様 窓 蓋形 (外) (内)	○外上方にやや開き比較的長い頭部、端部断面はするどい丸味をおびる。 ○外面は一部に緻密な刷毛目があり大部分に横ナデがある。 ○内面は緻密に丁寧な刷毛目がある。	○口縁部が外上方にやや開くと思われる頭部を有するのである。 (6)より頭部はややすぼまる。 ○内外面ともにヘラ磨きである。	○外面のくびれの緩漫な割に内面は肉厚化によって明確な棱を有して外反する。 ○内外面はともに剥落が激しく観察は出来ない。	○く字形に外折する口縁は外反ぎみにつくられ端部は上方へ丸くおきさめられている。 ○内外面は左回りの横ナデによってつくられ砂粒の動きがみられる。 ○かなりていねいなつくりである。
肩 部	形態 文様 窓 蓋形 (外) (内)	○肩部は扁平な球形である。 ○肩部はほとんど張らず、ヘラみがきで仕上げている。 ○外はヘラ削りされた後、ヘラ磨きされている。	○肩部はほとんど張らず、なだらかに肩部に続く扁平な球形の体部である。	○くびれ部より緩らかにふくらみつつ底部に到る。 ○外面は縦方向に刷毛目がある。	○やや下ぶくれの袋状の形態をとるのである。
底 部	盛形 (外) (内)	○内面はヘラ削りの後横ナデをしている。 平底、外面はヘラ削りしている。	○外面肩部はヘラ磨きされ、肩部はヘラ削りの後、横ナデされている。 ○内面は荒いヘラ削りである。	○外面の剥落が激しい。 ○内面はヘラ削りである。	○外面は上から下へ粗い刷毛目がみられ内面も上から下へヘラ削りされている。
色 調	淡褐色	淡黄褐色	褐色	赤褐色	
胎 土 質	砂粒を少々含む 堅緻	砂粒含む 堅緻	砂粒を含む やや堅緻	良好(砂粒少し) 堅緻	
備 考	ヘラ削りは主として外面に行なっている。	○口縁部を欠損する。 ○(6)と同形態 ○(6)より胎土が悪い。			

土器番号	12	13	14	15	
種類 摘要	杯形土器	杯形土器	杯形土器	甌	
法 量 (cm)	口縁高 器底 底径 14.2 2.7	15.6 3.5	14.2 不明	26.0	
出土地区	6 AX10	6 AX10	6 AV10	3 PY22	
口 文 類 部	形態 整形 (外) (内)	○やや外反する口縁端部 は丸みをもち内にすこ しふくらむ。 ○外面はヘラ削りの後 横ナデが施こされてい る。 ○内面は横ナデされ、一 条の暗文がある。	○上部端面は内方へふく れています。 ○内外面ともにヘラ磨き がなされている。 ○内面に暗文が入る。	○口縁部は内弯し、端面 はやや丸くおさめられ ている。 ○口縁部底には製作時 に生じたと思われる横 方向の不連続な沈線状 の線がある。 ○指痕の凹凸をかなり有 する体部と底部体部下 端面には横方向のナデ が施こされている。 ○なお、黒色の内面には 不連続な横方向の刷毛 によるナデが均一にみ られ、その上にゆるい 螺旋文がつけられてい る。	○口縁部はゆるやかに外 反している。 ○内面端部及び外面端部 の後は非常に明確であ る。 ○外面は横ナデ ○内面は深い刷毛日の後 横ナデが施こされてい る。
肩 部	形態 整形 (外) (内)	○内面は上・下2段のヘ ラ磨き斜行文がある。 上段は右上→左下 下段はほぼ横方向の右 上→左下 ○外面は横ナデの後、ヘラ 磨きが施こされている。	○内面は上・下2段のヘ ラ磨き斜行文がある。 上段は右上→左下 下段はほぼ横方向の右 上→左下 ○外面は横ナデの後、ヘラ 磨きが施こされている。	○外部から外上方へ、や やまっすぐのび、底よ り13cm位の位置に角形 の把手を左右に付して いる。外面は細い刷毛目 で非常に丁寧に器面を 調整し下部は二段のヘ ラ削りで仕上げている。 ○内面には大きくしかし 丁寧なヘラ削りがみら れる。	
底 部		○外面はナデられており、 貼り付け高台がつけられ ている。	なめらかにナデで仕上げ られている。	底部には長円形の孔が3 個所穿たれている。	
色 調	外面 赤褐色 内面 淡褐色	外面 赤褐色 内面 淡褐色	内面は黒色 付面は褐色	内外面とも淡灰褐色	
胎 土 質	砂粒を少々含む が稍良な粘土。 軟弱	精良な粘土 軟弱	精良な粘土 軟弱	良好(砂粒少し) 堅硬	
備 考	○底部外面に墨書きしてあ るが、墨がうすくなっ ており、判読できない。 ○13と同様の意味か。	○底部外面に墨書きしてあ るがうすくなっている。これは文字として 判読できいためある 種の記号と思われる。		○底部には3孔(2孔)か。	

土器番号	1	2	3	4
種類 摘要	林身	林身	細頸壺	小型壺
法 量 同 文 様 度 底 底 底	11.15 不明	10.1 5.4	9.4 不明	8.6 5.8(?)
出土地区	6 AW10	6 BC10	6 BI10	6 AI9
口 縁 部	形態 文 様 整 形 ○ 縁 部 ○上面に段状の内傾斜面 を形成する。 この内傾斜面とタチア ガリ内面との間に明 瞭な接線が認められる。 従って端部外面は外へ はり出す。	○タチアガリは高くほど 垂直に立つ。 ○端部はひきあげた後に 横ナデ ○蓋受部は水平にはり出 す。器厚は約3~4mm 程度と比較的薄い。 ○内面は水引き痕がよく 残っている。 外面は蓋受部以下ヘラ 削り仕上げ。	○タチアガリは高くNo.1 よりやや内傾するが、 するとく立つ。 他はNo.1と同じ。	○端部はまる味をもって いる。端部より下へ2 cmと2.3cmのところに シャープな接線をもつ 凸帯が2条施されている。 ○凸帯は水引きによるもの である。 ○この2条の凸帯の下に は波長の短い波状紋が 施されている。(7本)
体 部	形態 文 様 整 形 ○ 縁 部 ○蓋受部は水平にはり出 す。器厚は約3~4mm 程度と比較的薄い。 ○内面は水引き痕がよく 残っている。 外面は蓋受部以下ヘラ 削り仕上げ。	○No.1と同じ。	○ 不 明	○口縁部と体部との間に は杯の蓋受部と同様の 形態の外延部がある。 この外延部は厚くシャ ープに外へはり出す。 ○外延部の下8mmには波 長の短かい波状紋が1 条施されている。(6本) ○波状紋の下は、底部ま で荒いヘラ削り仕上げ
底 部	欠損の為不明	器厚5~6mm程度 外面は全体がヘラ削り仕 上げ	不明	中心部は欠損 ヘラ削りが認められる
色 調	内外面とも暗青灰色	内外面とも灰色~青灰色	内 青灰色 外 黒灰色	外 青灰色 内 灰白灰
胎 質	土 良質(1mm程の砂含) 堅緻	良質(0.5~1mm砂含) 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	良好(3~5mm砂含) 堅緻
備 考	○陶邑製か?	○陶邑製か? ○蓋受部に自然釉 従って焼成時は正位に あった。	○陶邑製か? ○口縁部の一部に灰褐色 の自然釉がかかってい る。	○陶邑製か?

土器番号		5	6	7	8
種類 摘要		小形壺	壺	壺	小形壺
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径	10.7 不明	10.3 不明	14.3 不明	不明 不明 18.25 丸底
出土地区		6 BK10	6 BH10	6 BK10	6 AH9
口 縁 部	形文整形	○漏斗状に開く口縁部を持つ、端部は水引きの後、横ナデ成形上面に段状の内傾斜面を有し内面との間に、明瞭な棱線が認められる。頸部から端部までは、2本のシャープな凸唇で3段に区割りされ、下の2段には波状紋(6本と5本)が施されている。	○漏斗状に開く口縁部を持つ、端部は外反し、意識的に外へ引き出している。したがって内部には凹みが形成されていて、内部の線との間に明瞭な棱線が認められる。頸部の胎壁は厚く、頸部迄の間に一帯の作出されたシャープな断面三角形の凸唇を施し、上下2段に区割されている。2段には、それぞれ一条の波状紋が施されている。	○漏斗状に開く口縁部、口縁端部はひきあげの後、横ナデ仕上げ、端面は丸く、やや内側へ立上がる。口縁部から頸部にかけては、2本の凸唇があり、端部直下の凸唇は断面三角を示す。シャープなもの他の一本はやや丸味をもったものであり、この凸唇で頸部は2段に区割されている。上段は波長の短い波状紋2条で全域がおおわれ、下段は中心部に一条の波長の長い波状紋が施されている。	不 ^明
肩 部	形文整形	不 ^明	不 ^明	不 ^明	○肩部が横に強く貼り出し、なだらかに底に向って細くなり、腹部最大径の部分に2本の沈線があり、その沈線の内に整った波状紋が一条施されている。肩下部は指で、粘土をおさえた後こまかにタタキ目で仕上げられている。又、肩部から胴上部は、ヘラ削り仕上げ。
底 部	不 ^明	不 ^明	不 ^明	不 ^明	
色 調	表 黒灰色 裏 灰白色、灰色	表 黒灰色 裏 灰色	表 青灰色 裏 灰白色	内外とも黒灰色	
胎 質	土 精良な粘土を使用 堅緻	土 精良な粘土を使用 堅緻	土 精良な粘土を使用 堅緻	土 精良な粘土使用 堅緻	
備 考	陶邑製か? 口縁内部一面に灰白色的自然釉付着	陶邑製か? 口縁内部一面に自然釉がかかる。	陶邑製か? 口縁内部一面に灰白色的自然釉付着	陶邑製か? 胴部上段に灰白色的自然釉	

土器番号	9	10	11	12	
種類 摘要	甕	甕	小形甕	小形甕	
法量 (m) 底径	口縁径 器高 腹径 底径	24.0 不明 不明 不明	25.6 不明 不明 不明	20.6 不明 不明 不明	17.4 不明 不明 不明
出土地区	6 A X10	5 D F 8	5 C T 8	5 D Y 20	
口部	形態 文様 整形	○強く外反する口縁で端部は若干立上がる。 端面は断面四角形を呈し、中央部がやや沈んでいる。端部直下に断面三角形のシャープな凸部がある。	○強く外反する口縁で、端部はやや立上がりかけている。端面は、内面に向いた方は丸く仕上げられているが、外面はにぶい断面四角形を呈す。端部直下に丸みをもった断面三角形の凸部を持ち、凸部の下には、波長が短く、比較的荒い波状紋が施されている。内外面とも水引きの痕が明瞭に残っている。	○外反する口縁部は端部で上下にふくれて終る。したがって、端面は仕上げの際に指による巾の広い沈線が出来ている。 断面は四角形に近く角はシャープである。 仕上げはすべて水引きによるものであり、痕が明確に残る。	○強く外反する口縁部端部は上端が立上がり、下端は少し下へ下る。したがって端面は中央部がやや凹を呈す。 端部直下に断面三角形のシャープな凸部を持つ。仕上げは水引きのみ。水引き痕は明瞭。
肩部	形態 文様 整形	不明	不明	不明	不明
底部					
底部	不明	不明	不明	不明	不明
色調	外 暗灰緑色 内 灰紫緑色	内外とも暗灰色	外 黒灰色 内 暗灰色	内外面とも淡青灰色	
胎質	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 (若干の砂粘を含む) 堅緻	精良な粘土を使用 やや軟質	
備考	陶色製か? 内面の全部と外縁端部及び凸部上面に自然釉	陶色製か?	口縁端面及び内部上部に灰白色の自然釉	陶色製か?	

土器番号		13	14	15	16
種類 摘要		器 台	杯 蓋	杯 身	杯 蓋
法 量 (cm)	口縁径 器高 腹径 底径	35.0 (器高)不明 (脚高)不明 (脚径)不明	14.6 4.4 (?)	13.0 4.9	14.5 4.5 (?)
出土地区		5 D E 8	6 B E 10	6 B E 10	6 B E 10
口 部	形文 様様 發形	○口縁端部はすこく外反する。端面は丸みをもった断面四角形を呈し、中央部に凹線状の沈線がめぐる。体部は2段分を残すのみである。第1段は波状紋で飾られ、断面四角形にえぐりの残された凸帶で第2段と区切られている。第2段も波状紋を施し、第3段とは、凸帯で区切られている。	○口縁端部は比較的すこく外反する。端部内面には、内傾斜面を作り、内面との間に、比較的明瞭な縦線を示す。 端部外面は水引きの際の指頭による凹みが認められる。上部と口縁部の綫の綫織は脱さに欠ける。上部はその方に荒いヘラ削りが施されている。	○口縁部タチアガリは、やや内傾する。端部は丸く仕上げられている。受部は厚く、やや上を向いて横にはり出す。 体部の肉厚は厚く、水引きの痕がけん著である。体部外面のヘラ削り仕上げは底から秀程度	○口縁部、体部の区別が明らかでない器形である。口縁部は端面丸くほぼ直立に下る。 器厚は厚く、技術の劣弱を示す。 仕上げは体部の方にヘラ削りを施しているがこれも荒い、内面口縁部は水引きのみ。
肩 部	形文 様様 發形	不明	不明	不明	不明
底 部		不明	不明	不明	不明
色 調	外 青灰色 内 灰紫色	外 黑灰色 内 暗灰色	外 暗青灰色 内 青灰色	外 茶褐色～黒灰色 内 暗黒灰色	
胎 質	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 (0.5~1.0の砂粒を含む) 堅緻	1.0~2.0砂粒を含む 精良な粘土を使用 堅緻	2~5mm程度の砂粒多合した粗な粘土を使用 堅緻なるも気孔多し	
備 考	陶色製か? 杯部内面に自然釉		○胎土の断面は暗紫色	外表面全体に暗黄褐色の自然釉	

土器番号		17	18	19	20
種類 摘要		杯 身	杯 身	杯 蓋	杯 蓋
法量 器高 (cm) 底径	C	12.9 4.5 (?)	9.2 4.1	27.4 1.4 (?)	28.0 1.7 (?)
出土地区		6 B E10	5 A U10	6 B H10	5 C T6
II 部 (体部)	形 文 様 整 形	○口縁部タチアガリは薄く、内傾したもので端部は丸く仕上げられている。 ○受部はやや下り気味で横にはり出し、凹みは少ない。体部は薄く仕上げられているが、ヘラ削りは少程度しか施されていない。内外面とも水引き痕がけん著である。	○体部から、口縁部まではゆるやかに広がりながら直線的にタチアガル端部は丸く仕上げられている。器壁には水引き痕が明瞭に認められる。	○口縁部は一度外反し、すぐに屈折する。したがって口縁部と蓋中央部には明瞭な凹みがでている。端部は外を向く様な形の断面三角形を示し、受部の凹みは浅い。 ○蓋中央部は直線的に成形され、その大部分はヘラ削り仕上げがされている。つまみは欠損のため不明	○口縁部は短かく屈折して断面三角形を呈す。受部は19よりは深い。
肩 部	形 文 様 整 形	不明	不明	不明	不明
底 部	不 明	高台は貼付け高台であり底部全体は貼付けの後ナドレ形が施されている。	不 明	不 明	不 明
色 調	外、内とも墨灰色	外 墨青灰色 内 青灰色	内外とも青灰色	内外とも灰白色	
胎 土 質	2~5mm砂粒を含む粗な粘土を使用 堅密なるも氣孔多し	精良な粘土を使用 堅密	精良な粘土を使用 堅密	良好 やや軟質	
備 考	残存部下端の状態から高杯(有蓋)の可能性もある。		口縁端部に灰黒色の自然釉が認められる。		

上器番号	21	22	23	
種類 摘要	杯身	杯身	鉢	
法量 (cm)	口縁径 15.0 器高 4.15 腹高 底径	11.2 3.3	21.0 12.0 21.4 不明	
出土地区	6BF10	6BC10	6AW10	
口部	形態 文様 整形	○口縁端部は横にナデて丸く終る。 ○体部は外傾しながらタチアガル。 ○高台は貼付け高台で仕上げは横ナデ。 ○底部は付高台より若干横にはってあがる、このため覗い後が認められる。	○口縁端部は横にナデて丸く終る。 ○体部は強く外傾する。 ○高台は付かず、したがって底部はヘラ起しの痕が著しい。	○短かい口縁部はやや外傾し、口縁端部は上端を平たくなでて仕上げをしている。したがって内側へ粘土がはみ出し、シャープな棱を作っている。
肩部	形態 文様 整形	不明	不明	○肩部はせまく、丸みをもっている。 腹径は、口縁径とほぼ同様、やや広くなっている。
底部	不明	不明	不明	
底部	不明	不明	不明	
色調	内外とも青灰色	内外、青灰色	内外とも青灰色	
胎土質	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	精良な粘土を使用 堅緻	
備考				

II 石 器

石器は量的には土器の量に比して極く少い。地区ごとの(1971年12月の瓜生堂遺跡報告を参照)出土は表のとおりである。特に集中しているところや、特異な出土状況のものはみられない。ただ木棺内から出土した5CT8区の磨製石鎌(磨製石剣の折れを磨いたもの)のようなものはあるが、出土状況についての詳細は遺物についての報告の際にはずりたい。前期の層からはほとんど剝片のみで、66, 67年発掘のもの少量の他は、石器は全て畿内第3様式を主とする中期の層の出土である。石質は大坂市大理学部笠間太郎先生の肉眼による鑑定である。御多忙のおりに剝片にいたるまで見ていただき、御指導いただいたことを厚く感謝いたします。

1. 打 製 石 器

石鎌 (図版40・1-16)

半欠としてわからぬもの3個を除いて現在出土しているもの13個すべて凸基(山内清男博士・佐原真氏の用語に従う)であり、約半数の7個が鋭利な脇がある有茎式である。10, 16も腰挿は不明瞭であるが有茎式としてよいだろう。重さは13個のうち5個が約4g, 3個が1.3g, 他は5.2gが2個であり、4gの群が目立っている。

石槍 (図版40・17-24, 29-31)

両側縁が並行に近く、先端が尖り、断面凸レンズ状の石槍が大・小合わせて8個ある。大は巾4cm強から小は巾約2.3cmまでであるが、破片がほとんどであり、完形品はない。小形のもの2例はややつくりが粗い。他に極く細身の小形のものと、側縁が並行せず菱形に近い形のものがある。細身のものは巾ほぼ1.2cm、断面菱形、側縁は鋸齒状となっている。

石錐 (図版40・32-34, 102)

(32)は頭部と錐部が長さ2分の1ずつぐらい、断面4面体に近い錐部を細くつくり出している完形品。(33)は頭部のみであるが、錐部へ移行する部分がわずかに残っていて錐であることがわかる。あるいは欠けている他の一端も尖らせていたものかもしれない。(34)はほとんど加工痕のない剝片であるが、尖端から2分の1ほどの長さまで磨滅と縦方向の條痕が著しく、一種の錐であるとみなした。

尖頭部のある石器 (図版40・25-28, 図版41・40, 42)

図版41,(40)は一側に櫛面を残していて、また図版40,(27)は片面の櫛溝が極めて大錐把であるなど尖頭器というには不恰好であるが、いずれも先端を尖らしており、一応尖頭部をもつものとして分類する。図版40,(28)は半欠品であるが、尖頭器の基部かと思われる。

側縁に刃のある梢円形石器 (図版41・35, 38, 39, 49)

両面を完全に側縁面で覆い、ほぼ梢円形に整えており、特に一侧縁においては刃形した付刃がみられる。図版41, (49) は断面形が特に部厚くごろりとしているがこの類に入れた。図上半部の刃縁がひどく磨滅している。

柄部をつくり出している石器 (図版41・47, 48)

図版41, (47・48) は一見尖頭器風であるが先端に二次加工していない面をわずかに残しておらず、おそらく側縁を刃として使用したものと思われる。ともに基部に全形に対して柄部と考えられるつくり出しをみせている。

その他の刃縁をもつ石器 (図版41・36, 37, 43, 44)

(43・44) はうすさ、大きさとも石鎚に近いが不整形であり、44は調整の仕方も石鎚のようではなく、縁辺を細かく整形している。37は凹みの部分が刃部になっている。

不定形石器および剥片 (図版41・41, 45, 図版42・50-61)

不定形の剥片の側縁も調整側垂して刃としているものがある。原縫面を残している場合が多い。その他剥片は現在274個あるが、全く任意の不整な剥ぎ方を方をしていて、近畿地方に特徴的な横割は特に顕著ではない。

以上に述べた打製石器および剥片はすべてサヌカイトであり、二上山春日山の産である。ただ66, 67年度発掘のものの一部に春日山でなく柏ヶ峯・石まくりのものかと思われるものがある。従来、近畿・瀬戸内で発見されるサヌカイトは四重説岐および二上山の産であるといわれてきた。ところが近年石野淳信氏によって、神戸甲山にも原石の産地があるといわれはじめ、新たに注目されることになった。しかし笠間太郎先生によれば甲山のものはサヌキトイドであって、サヌカイトとは明確に区別できるし、サヌキトイドは石器製作には不適当であろうとのことである。なおサヌカイトは原産地から自然力によって遠方まで運ばれることはなく、原産地がきわめて限られやすい。近畿一円のサヌカイトはそのほとんどすべてが二上山春日山産に比定できるという。顧微鏡下のプレパラートをみると素人目にもサヌキトイドとサヌカイトとは判別できるし、笠間先生は岩石学的にサヌキトイド製の石器がないことは98%確信できるとのことであるが、さらに甲山のものが石器製作に適しないことを立証するためには甲山産の続いのある石器と二上山産サヌカイト



第5図 サヌカイトとサヌキトイド
(左の5片サヌカイト, 右の4片サヌキトイド)

製の石器とを等量に資料として、岩石学的な比較を試みれば即座に結果がでるのである。この点を一つの課題としておきたい。

2. 磨製石器

石庖丁 (図版44・77-94, 96)

今回掲載するもの19個。すべて半月形直線刃ないし紡錘形であるが、完形品はない。ほとんど2孔のうち1孔と半分ぐらいのところで割れている。2孔を残すもの11個のうち孔間の間隔（器壁と器壁との）1.0cmから2.9cmまで、1.3cmが4個で最も多い。7個に刃の裏側に刃の全滅にわたって光沢がある。2個に刃の側に光沢がある。使用痕のはなはだしいもの4個があるが、必ずしも光沢のあるものと一致しない。しかし一致するもの2個があり、使用痕のないものは刃をとぎ直していると考えられるので、これは使用に因巡する要素と思われる。使用痕もほぼ刃先から3cm、ちょうど親指で緒首を押えた辺りについていて、使用法は恐らく石毛直道氏論文（1968年）の第7図2に一致するであろう。しかし、使用痕と思われない刃に直角な條痕が、握った場合の手首よりの部分にも顕著にみられる2例があり、背部にも著しい打痕がある例もあり、これらは別な使い方をしているものと思われる。石質は77・不明。78・緑色片岩。79・黒色片岩。80・砂岩ホルンフェルス。81・緑色片岩。82・緑色片岩。83・緑色片岩。84・緑色片岩。85・緑色片岩。86・緑色片岩。87・緑色片岩。88・頁岩。89・流紋岩質凝灰岩。90・黒色片岩。91・凝灰岩質砂岩。92・凝灰岩質砂岩。93・凝灰岩質砂岩。94・緑色片岩。95・凝灰岩質砂岩。

大形石庖丁 (図版44・95, 97)

図版44, (97) は半月形外湾刃の半分だけ残っているもの。面の大部分が欠け去って、刃部の認められるのは端だけである。そのため詳しいことはわからない。図版44, (95) は三角形と思われるが半分を欠失している。一辺に片刃がつけられているが、あまり鋭利ではない。刃のない面の頂点近くに穿孔途中の小さな凹みがみられる。石質は、95・緑色片岩。97・緑色片岩。

蛤刃石斧 (図版43・62, 63)

(92) は典型的な太形蛤刃石斧であるが、刃縁と片側縁とに粗い打ち欠きが連り、一度欠損した部分を整え直そうとしたものらしい。(63) はやや小形で刃は直線をなしている。脇部に擦打痕がよく残っている。石質は62が砂岩ホルンフェルス。63がガブロ岩。(縦断面)

柱状片刃石斧 (図版43・64)

全体の3分の2ほどを残して刃部は欠失しているが、断面の一辺をなしている扁平な面からみて片刃石斧である。頭頂部にはきちんと稜をついている。石質は輝緑凝灰岩。

扁平片刃石斧 (図版43・65, 66, 70・71)

(65)は極く小形のもの。刃のない側の面は半分欠け去っている。刃縁は斜めに研がれている。刃部では横に体部では斜めに研ぎ目が著しい。(66)は頭部の一部のみで詳細は不明であるが、よく磨かれている。(70)は1971年12月の報告に載せたものであるが図が不完全だったので再度実測した。(71)は半欠品であり、刃部が欠け目で覆われていて、完全に復元すればもう少し長くなるだろう。裏面も剝がれています。石質は65が砂質泥岩ホルンフェルス、66がホルンフェルス、70は砂岩ホルンフェルス、71は輝緑凝灰岩。

磨製石劍 (図版43・67, 68, 69, 72)



第4図 第6号方形周溝墓
木棺内石器出土状態

(67)は両面にしのぎをもつ石劍である。全周が欠けていて、さらに折れ目を研ぎかけた痕跡がある。(68)はしのぎを持つ石劍の先端部の折れであるが、折れ目を横に研いでいるので改めて石鎌として使用したものと思われる。第6号方形周溝墓の木棺内から出土した。(67)はやはりしのぎを両面に持つ石劍の茎部である。図の左側辺は断ち切ったように磨られている。(72)は完形のむしろ磨製石槍といえるような石器である。しのぎはなく扁平で、両側縁にわずかに面取りして刃としている。石質はサヌカイト、または古生層の頁岩。または黒色片岩とのことである。67は頁岩。68は未鑑定。69が泥岩。

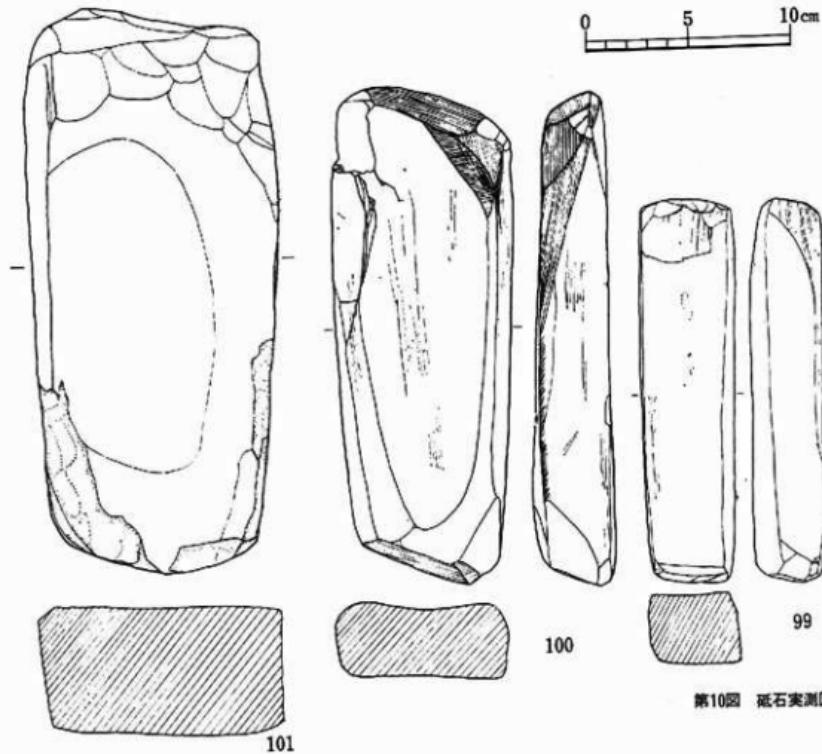
紡錘車 (図版43・75, 76)

そろばん形をした石製品と土製品とがある。どちらも穿孔が途中で止められているが、本来貫通するものであろう。土製品はボロボロと欠けやすく不整な形になっている。重さは石製品が128g、土製品は70g。石質は75が砂岩である。

砥石 (図版43・第6図73, 74, 99, 100, 101)

非常に大きなものから小形のものまで、また石質では砂岩と泥岩とがあるが、特にどの種の石器を砥いだものかは不明である。石質は73・泥岩。74・泥岩。99・泥岩。100・泥岩。110・泥岩。

<四手井晴子>



第10図 砥石実測図

摘要 器種	図No.	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石質	地区
石 磁	1	3.6	2.5	0.55	4.0	サヌカイト	SDU9
	2	4.4	2.2	0.4	4.0	サヌカイト	東マンホール
	3	4.5	2.5	0.3	4.0	サヌカイト	SDY9
	4	5.5	2.2	0.4	4.1	サヌカイト	SGH1
	5	6.6	2.4	0.5	4.2	サヌカイト	SGK1
	6	3.2	1.7	0.25	1.3	サヌカイト	SCH23
	7	3.6	1.4	0.3	1.3	サヌカイト	SCH23
	8	2.0	1.7	0.35	1.5	サヌカイト	C2
	9	2.7	1.25	0.3	1.4	サヌカイト	3PP24
	10	3.1	1.2	0.3	1.3	サヌカイト?	C1
	11	3.3	1.1	0.4	2.5	サヌカイト?	表 探
	12	4.0	1.3	0.45	2.8	サヌカイト	SCT8
	13	5.5	1.1	0.6	3.0	サヌカイト	東マンホール
	14	6.45	1.8	0.65	5.2	サヌカイト	SCT6
	15	5.7	2.2	0.4	5.2	サヌカイト?	C2
	16	5.7	2.1	0.75	8.9	サヌカイト	SCT8
石 椅	17	1.7	2.9	1.3		サヌカイト	東マンホール
	18	3.0	4.1	1.65		サヌカイト	3OH24
	19	4.2	2.6	1.2		サヌカイト	西マンホール
	20	4.0	2.3	1.05		サヌカイト	3LY19
	21	6.4	2.4	1.0		サヌカイト	5DT9
	22	3.7	3.6	1.25		サヌカイト	3LY17
	23	6.7	2.6	1.2		サヌカイト	O4
	24	8.1	2.7	1.1		サヌカイト	3DK24
	29	7.5	2.4	1.1		サヌカイト	SDY9
	30	6.8	1.5	0.7		サヌカイト	3PI25
	31	6.9	2.8	1.2		サヌカイト?	O4
尖頭部のある石器	25	3.7	2.3	0.6		サヌカイト	C4
	26	3.6	2.5	0.4		サヌカイト	3PY15
	27	4.7	2.6	0.6		サヌカイト	5DF24
	28	3.3	3.2	0.6		サヌカイト	3LY19
	40	6.5	2.4	1.0		サヌカイト	表 探
	42	5.6	4.0	1.8		サヌカイト	東マンホール
石 猪	32	5.7	(頭部) 0.4	(頭部) 0.4		サヌカイト	SCH23

器種	図No.	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm)	重さ (g)	石質	地区
石錐	33	3.0	1.4	0.6		サスカイト	5CT8
	34	5.0	(細部) 0.4	(細部) 0.3		サスカイト	3LY17
	102	2.05	(細部) 0.2	(細部) 0.15		サスカイト	3PT25
複数刃のある椎円形石器	35	6.9	5.1	1.5		サスカイト	3PY17
	38	7.25	4.1	1.4		サスカイト	3PT25
	39	8.1	5.1	1.0		サスカイト	東マンホール
	49	5.7	2.7	1.85		サスカイト	3PY6
刃縁をもつ石器	36	5.3	3.6	1.7		サスカイト	30H19
	37	4.2	3.2	0.9		サスカイト	不明
	43	4.1	2.7	0.55		サスカイト	表採
	44	4.4	2.4	0.6		サスカイト	
柄部をもつ石器	47	6.8	2.4	0.9		サスカイト	3LY17
	48	5.5	2.2	1.15		サスカイト	3LY23
不定形石器及び削片	41	8.85	5.6	1.6		サスカイト	30C24
	45	4.0	7.0	1.4		サスカイト	3OD24
	46	4.0	5.5	0.8		サスカイト	A4
	50	7.15	5.4	1.75		サスカイト	5BZ
51	6.0	6.1	1.2			サスカイト	3LY11
	52	5.3	2.8	0.65		サスカイト	3LY17
	53	6.8	3.1	1.4		サスカイト	3PI24
	54	9.0	4.2	1.2		サスカイト	5BX17
55	8.2	4.3	2.0			サスカイト	3LY19
	56	8.8	3.5	0.9		サスカイト	3PY10
	57	7.8	4.8	1.1		サスカイト	3PY18
	58	6.6	6.4	1.0		サスカイト	30C24
59	7.3	5.5	1.1			サスカイト	3PY24
	60	8.8	4.9	1.3		サスカイト	3PY15
	61	4.0	4.1	0.7		サスカイト	3LY19
	62	14.0	7.9	5.9		砂岩ホルンフェルス	5DP9
63	8.2	5.0	3.4			ガブロ岩(斑駁岩)	3LY17
	64	7.1	3.8	3.6		輝綠凝灰岩	3OY24 3OV24
65	3.5	1.9	0.6			ホルンフェルス	3PY8
	66	3.1	2.7	0.9		ホルンフェルス	B10
	70	7.4	5.1	2.0		砂岩ホルンフェルス	5BW4

摘要 器種	図No.	現存長 (cm)	最大幅 (cm)	厚み (cm) (現存部) 1.2	重さ (g)	石質	地区
扁平片刃石斧	71	3.9	5.2			輝綠凝灰岩	5DX9
磨製石剣	67	5.7	3.5	1.1		ホルンフェルス	3PI24
	68	3.0	2.3	0.6		未鑑定	5CT8
	69	3.6	2.7	0.1		泥岩	3OB24
	72	16.0	3.3	0.6		サヌカイトor氯岩or 黑色片岩	5DV9
紡錘車	75	5.0	5.3	3.85	128	砂岩	3LY
	76	4.7	4.6	2.9	70	(土) 製	ボーリングビット
砥石	73	11.0	4.5	1.4		泥岩	5OH24
	74	9.8	3.5	2.7		泥岩	3OX24
	99	18.6	4.5	3.3		泥岩	5DY9
	100	23.5	8.6	3.3		泥岩	5DB8
石毬丁	101	27.0	12.0	6.2		砂岩	5CH24
	77	13.2	5.65	0.8		不明	東マンホール
	78	9.7	3.9	0.75		緑色片岩	3LY23
	79	7.4	4.1	0.7		黒色片岩	3PI24
	80	8.0	4.8	0.7		砂岩ホルンフェルス	東マンホール
	81	4.3	3.6	0.6		緑色片岩	3PY20-19
	82	8.7	4.1	0.75		緑色片岩	5CH20
	83	7.0	4.2	0.7		緑色片岩	5BW4
	84	4.3	3.9	0.7		緑色片岩	3PT25
	85	6.7	4.6	0.7		緑色片岩	3PI24
	86	8.1	3.9	0.7		緑色片岩	3LY17
	87	4.6	5.6	0.7		緑色片岩	3OU24
	88	7.2	5.0	0.65		頁岩	3PY11
	89	7.7	4.85	0.7		流紋岩質凝灰岩	O3
	90	5.7	2.55	0.6		黒色片岩	3PW25
	91	2.3	3.65	0.6		凝灰岩質砂岩	O3
	92	3.6	3.8	0.8		凝灰岩質砂岩	C1
	93	4.3	3.7	0.6		凝灰岩質砂岩	3OD24
大形石毬丁	94	5.4	3.5	0.7		凝灰岩質砂岩	3PE24
	96	4.2	3.6	0.7		緑色片岩	O3
	95	8.9	5.9	0.75		凝灰岩質砂岩	3PI24
	97	8.8	4.95	0.6		緑色片岩	

III 木 器

1. 弥生前期の木製品

昭和41年度に行なわれた第2次調査においては、弥生前期の木製品が多く出土したが、今回の調査では、ほとんどが弥生中期のものであった。ところが最近の5CI地区の調査において、前期の遺構が検出され、それに伴なって弥生前期の木製品が4点発見された。

鋤 (図版45・7) 全長12.6cm、一本作りの大きな踏み鋤である。鋤身は、長さ51.5cm、幅15cm前後の長方形に近い形で、上端から6cmのところが少しくびれている。鋤身の中心部には、縦に長さ39cm、幅1cm～2cm、高さ1.5cmの細長い突起を作り出し、またその突起に続けて上縁と、両側も幅約1cm、高さ0.7cmに削り出されている。中央部の突起と両縁との間、および先端部12.5cmは平らに削られている。厚さは、上部が2.5cm、先端部が1cmで、中期の鋤身の厚さ(0.5cm～1cm)に比べて厚い。裏面は滑らかである。この鋤身は、土離れを良くするために、折れにくくするために、突起が作り出されており、使用時に、おける機械的な面までも考慮されたことがうかがわれる。柄は、長さ74.5cm、直徑約3.5cmの太さで、末端部は、逆三角形を呈し、外縁を2～3cm残してくりぬき、把手を作り出している。把手部分は、使用効果を大きくするために、中央部がやや太めに作られている。

脚付鉢 (図版46・13) 丸底深鉢の体部に巾広い2本の脚がついている。高さ11.5cmの容器であり、一本作りである。鉢部は直徑16.8cm、深さ4.3cmで厚さは、口縁付近で0.5cm、底が0.9cmである。内面は使用により、滑らかになっている。脚は鉢の体部に7.7cmの間隔で平行についており、高さ8cm、巾10.8cm、厚さ1～1.5cmである。この脚は上部の鉢に比べて、大きく、丈夫に作られているが、脚の下端が丸みを帯びているため、少し不安定である。

杓子 (図版46・17) 柄が折れており、頭部のみが残存している。口縁の直徑9.4cm、底部の直徑4.2cm、深さ4.5cmと小形のものである。内面、外面とも、磨いたのではないかと思われるほど、滑らかで、形も丸く整っている。柄は、底から1.2cmのところより作り出されており、口縁近くで欠失している。折れ口からみると、柄の断面は、直徑2cmの半月形である。

弓 (図版45・6) 残存長、47cm、断面の直徑2.2cmの、小型の丸木弓である。先端は蛇頭型を呈し、端から15.5cmは、一方が扁平に削られており、断面は半月形である。頭部を除いては、ほと

んど加工がなされておらず、樹皮を剥いだだけの状態である。先端部のくびれには、細い溝ができるので、弦による磨滅ではないかと思われる。また先端部より、30cm程のところに使用痕と思われる数余のくぼみが認められ、この部分が弓の把り部ではないかと思われる。

以上4点が弥生前期の木製品である。いづれも形がよく整っており、弥生中期の製品に比べて入念に仕上げられている。

2. 弥生中期の木製品

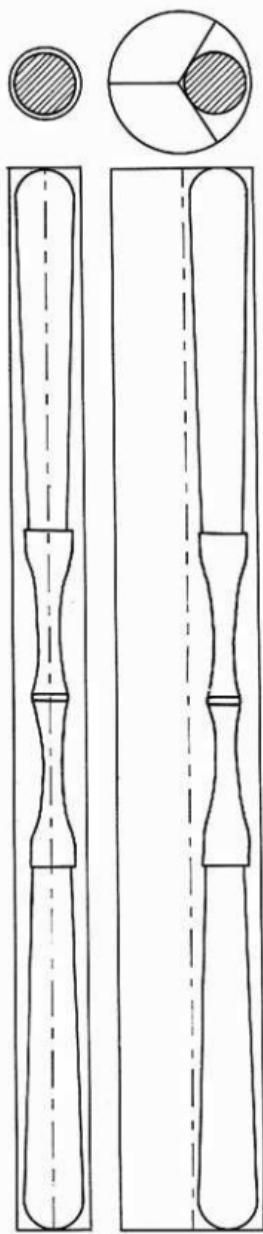
弥生中期の木製品の現存までの出土数は、錐9点、鋤12点、杵5点、容器5点、柄3点、その他20点である。今回は鋤2点、錐1点、杵3点、弓1点、容器2点、柄1点、その他4点を紹介する。

丸錐（図版45・2） これは1971年の概報で紹介した小型丸錐と同種のものである。長さ16cm、巾20.1cmと大きさもほとんど同じで、形も丸みを帯びた方形である。木取りも木目が錐身の左右に走るものである。刃は木目に直交する両側のみにつけられている。左刃部の上方と、鍔の下端部は使用によりかなりつぶれている。孔は直径3.4cmで、柄が、突起部を外側にした錐身に対して70°前後の鋭角に挿入されるように穿たれている。

広錐（図版45・3） この広錐も1971年の概報で紹介した、舟形突起が上にせり出して頭部をなしているものと同種である。頭部が16cm残存している。前回のものと比べて、舟形突起が、縦11.6cm、横6.5cm、厚さ2.4cmと非常に大きい。柄が舟形突起を外側にして挿入されたままの状態で出土しており、残存長7cmを測り、錐身に対して、70°の鋭角である。柄の先端は舟形突起より2cm突出しており、かなり磨滅している。

以上の様に、本遺跡では同種の錐が各二点づつ出土している。木器は資料数が大変少ないので、明確なことは言えないが、これらの錐は弥生中期の河内地方特有の形式ではないかと思われる。

鋤（図版45・4） 錐身と柄が別々に作られたものである。柄は分離、欠失しており錐身のみである。錐身の残存長は25.2cmを測り、巾19cm、厚さは、中心部で1.2cm、先端部で0.5cmである。柄の挿着部は欠失しているが、錐身の表面の中心よりやや上方に柄の先端を挿入する孔が穿たれている。裏面には、孔に続く溝が抉かれている。錐身の先端は少し焼失しているが全体から推定すると、長さ30cmになるものと思われる。左側がひどく磨滅している。本遺跡では12点の鋤が出土している。そのうち11点は一本作りで、別



第1図 斧の木取模式図

作りは、この點のみである。

柄 (図版45・5) 先端部を欠失しているので、何の柄であるか不明である。残存長43.5cmで末端から10cmは断面の直径2.5cmの把部である。把り部以外は、巾4cm、厚さ3cmの断面四角であり、先端部は厚みの半分が抉られており、平行な二又に分かれている。一方が消失している。

斧1 (図版45・12) 全長114.2cm、両端部の直径7.5cm、中央くびれ部の直径3.7cmを測る完形の斧である。両端の形は普通のものと変りないが、把りの部分は、中央部にそろばん玉状の突起を一つ有するものであり、その突起部から両端に向って約13cmの間が削られて、把り部となっている。また、この斧で注目すべきことは、木取の方法である。普通一般的な斧は、木心を中心として使っているが、この斧の場合は、木心が認められない。したがって、比較的太い木をあらかじめ1/4に割ったものを原材として使用したものと思われる。このことは、先端部断面が、正円形を呈さず、平面を有することから裏づけられる。材質は明らかではないが、木目などからみて比較的堅緻な木材を使用している。これも上述の木心を利用していないことと関係があると思われる。

斧2 (図版45・10) 残存長63cm、先端の直径は7.3cm、くびれ部の直径は3.6cm。この斧にも中心と思われるところ、に削り出しがあるが、1ほど顕著ではない。形体は1と同じものと思われる。木取りは1、とは異なり一木の木心を中心とする斧である。そのため全体にひび割れができる。先端は使用により少しくぼんでいる。

斧3 (図版45・11) 残存の長さ55.6cm、直径8.5cm、1、2よりは太い。くびれ部端の削り出しのところで消失しており、把り部の形状は不明である。全側面は幅1~1.2cmで縱方向の削りがなされている。先端は使用により、直径4.5cm、深さ1.5cmに丸くくぼんでいる。木取りは2と同じく、木心が中心になっているため、ひび割れがはげしい。しかし、先端の磨滅からみると、割れにかまわらず、使用されている。

以上のように斧には、木取りの方法が二通りある。**①**、完成品に近い太さで、断面円形の原材を用いる。**②**、太い丸太を、縦に3~4に分割した断面扇形の原材を用いる。

①は、木心が中心となるためひび割れがかなりひどい。**②**はひび

割れはできない。しかし、①は②と比して、製作が簡単であり、2, 3の使用痕からみると、多少のひび割れは使用に際しては、支撑がないものと思われる。そこで①の方が多くつくられたのである。

高杯杯部（図版46・14） 残存部から推定すると、内径9.4cm、で巾5cmで、外へ水平に広がる口縁をもっている。口縁の内側は0.7cm巾に削り出されており、外側には巾1.5cmの、たれが巡っているが外側へ反って変形している。一部分であるため、全体の様子は不明である。

高杯脚部（図版46・16） 脚の中心に、四角い孔を穿って、別木をはめこんだ、組み合わせ式の高杯である。すその周辺が少し変化しているが、ほぼ完形である。柱状部の直径4.3cm、すその直径10.5cm、高さ4.5cmである。別木は長さ5.6cm、上部の巾1cm、下部の巾2cmと、やや末広がりの方柱状である。この別木は柱状部の上端から1.5cm、突出しており。突出部に直径0.4cmの穴が穿たれ、細い棒が挿入されているが、棒はほとんど腐蝕している。元来はこの棒によって、杯部と脚部が接合されていたが、腐蝕により、杯部が分離、欠失したものと思われる。

蓋（図版46・15） 厚さ0.5cmで、側面の幅が0.8cmほどになると思われる、扁平な木製品である。円の中心に直径5.1cm、厚さ0.2cmの丸い削り出しが半分残っており、その上に、長さ2.4cm、巾1.1cmの木葉型の文様が3枚刻まれている。他の半分にも対称の文様が刻まれていたのではないかと思われる。内面は黒ずんでおり、わずかな凸凹が認められる。この木製品は円型の削り出しの上に刻み文様があるので、蓋としたが直としても使用できる。

下駄形木製品（図版45・9）（前回田下駄と称して紹介した本製品はその後の検討の結果、田下駄としては小さすぎて不適当と思い、下駄型木製品とする。） 縦9.5cm、横10.6cmの長方形の板に凹孔を穿っている。前回紹介した下駄形木製品と比べて、少し小さく、厚さも0.8cmとかなり薄い。また材質も異なっている。しかし孔の位置はほぼ一致するので、用途は同じと考えられる。

双孔木製品（図版45・8） 残存の長さ26cm、上部が欠損しており、上端の巾が9cmで、序々に狭くなり、先端が尖っている木製品である。先端に少し刃がつけられているが、全体的には厚さ1cmで、扁平である。欠損部に直径3cmと推定できる。2孔が残



第8図 蓋の文様

存している。全体の形体、用途は不明であるが、木の材質からみると、農耕具ではないかと思われる。

不明品(図版45・4) 我存の長さ33cm、巾8.5cm、厚さ1.5cm、の板の上に、巾4cm、高さ5cmで断面四角の突起を作り出したものである。突起の中央部に巾2.5cm、深さ3cmの決りがある。これは何であるか全く不明である。

(村) 前回柵と称して紹介したものは、その後の検討の結果、逆にして、椅子として使用する方が適当と思われるので、訂正いたします。

<大西真由美>



第13図 件出土状態

あとがき

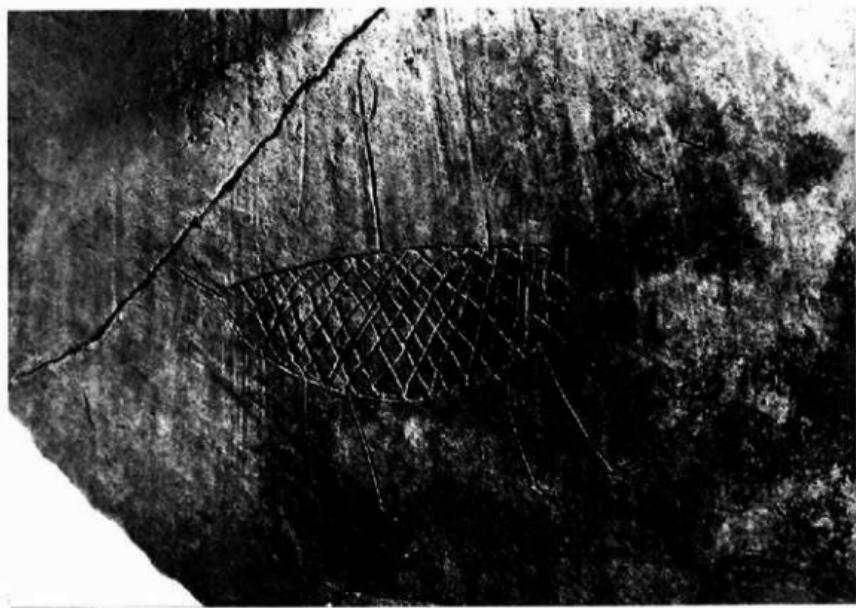
瓜生堂遺跡の存在すると思われる範囲は、東西約500m、南北1kmにおよぶが、大阪の動脈的な道路、中央環状線が、その中心部を南北に通りぬけており、また、東大阪市の下水処理施設としての小阪ポンプ場が遺跡内に存在することから、瓜生堂遺跡は、日々その姿を変えつつあり、さらに今後の開発計画も、着々と各方面より具体化の方向へ向かって、立案されているといわれる。

今回、この小冊子を出版することにしたのも、一つには、こういった状態の中で、再度瓜生堂遺跡という古代の大遺跡を、考え方してもらいたいという、調査関係者全員の希望があったからである。

瓜生堂遺跡は、沖積平野に存在し、幾多の水害を受けながらも、強く生きた古代人の生活を、その埋没状態から知ることが出来るとともに、弥生時代の生活面が、地下数メートルという深いところに存在するため、当時の集落の姿が、より完全な状態で今日まで残っており、全国的にみても、極めて貴重な遺跡と言わねばなるまい。こういった点で、今後の瓜生堂遺跡の保存および顕彰は、より一層前向きな姿勢で行なわれねばならず、関係各方面的協力を心から願わずにはいられない。

最後に、上述のような強い願望をもって、また、一人の研究者の責務を全うすることを目標として、調査関係者一同、完全な資料集の作製を意図したが、学問の域は無限であるため、完全の領域へは達するべくもない。したがって我々一同、より積極的な御批判、御教示を期待するとともに、今後一層努力を続けることを約して、あとがきに代えたい。

図 版





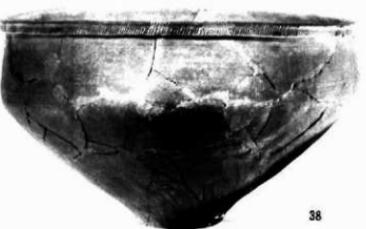
133



134



38



39

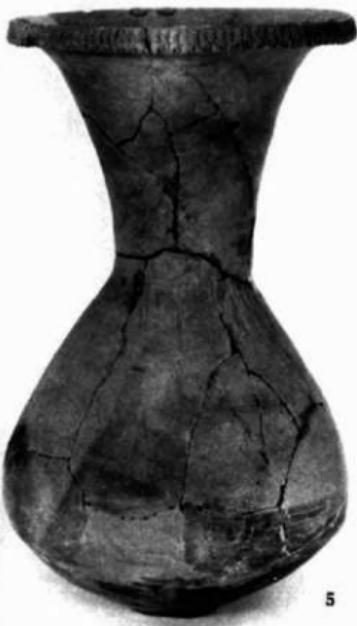




25



1



5



3



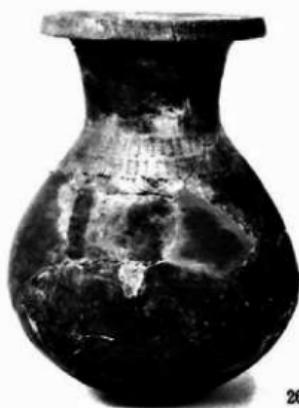
4



135



12



26



10



2



27



11



13



20



34



35

図版九 弥生式土器（壺、水差形土器）





49



55



52



79



75



53



138



137



120



58



121



72



68



69



139



66



65



140



64



60



62

圖版三 弥生式土器 (續)



92



103



141



142



109



113



95

圖版一四 弥生式土器、古式土師器



127



128



129



131



130



132



124



123



1

圖版一五 古式土節器、土節器

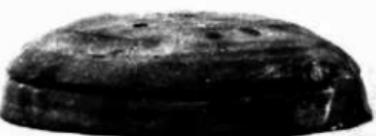




4



2



24



8



25



19



15



21



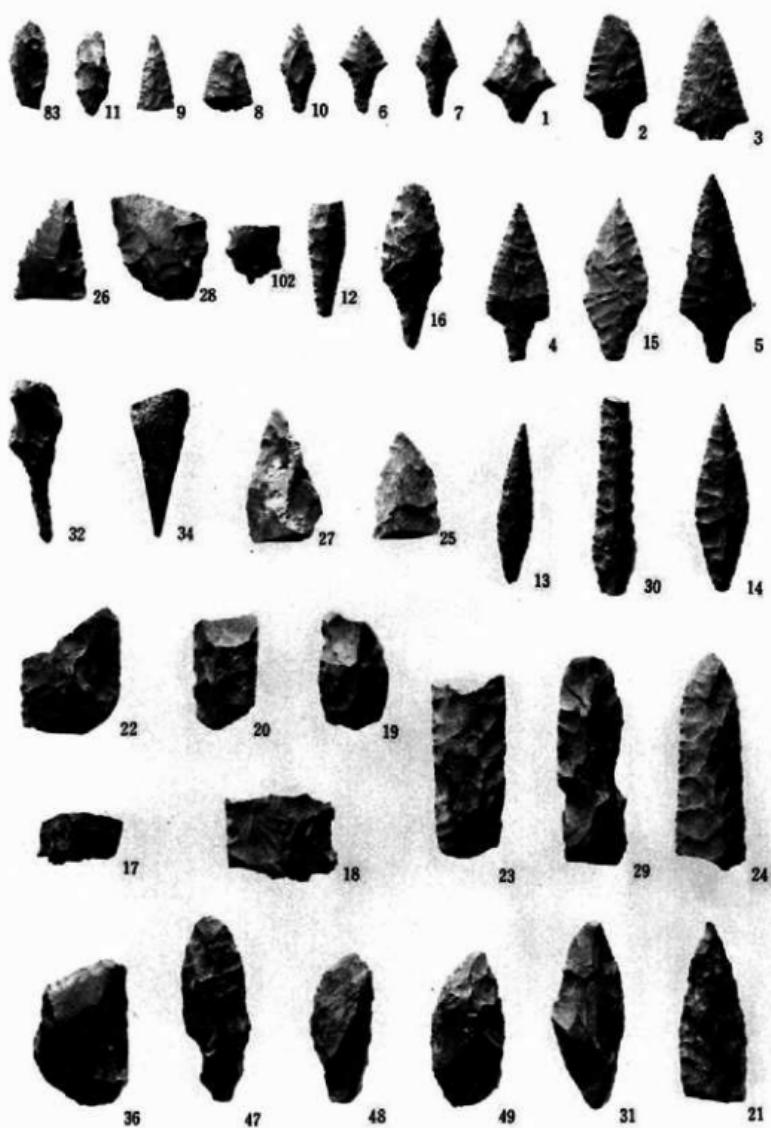
22



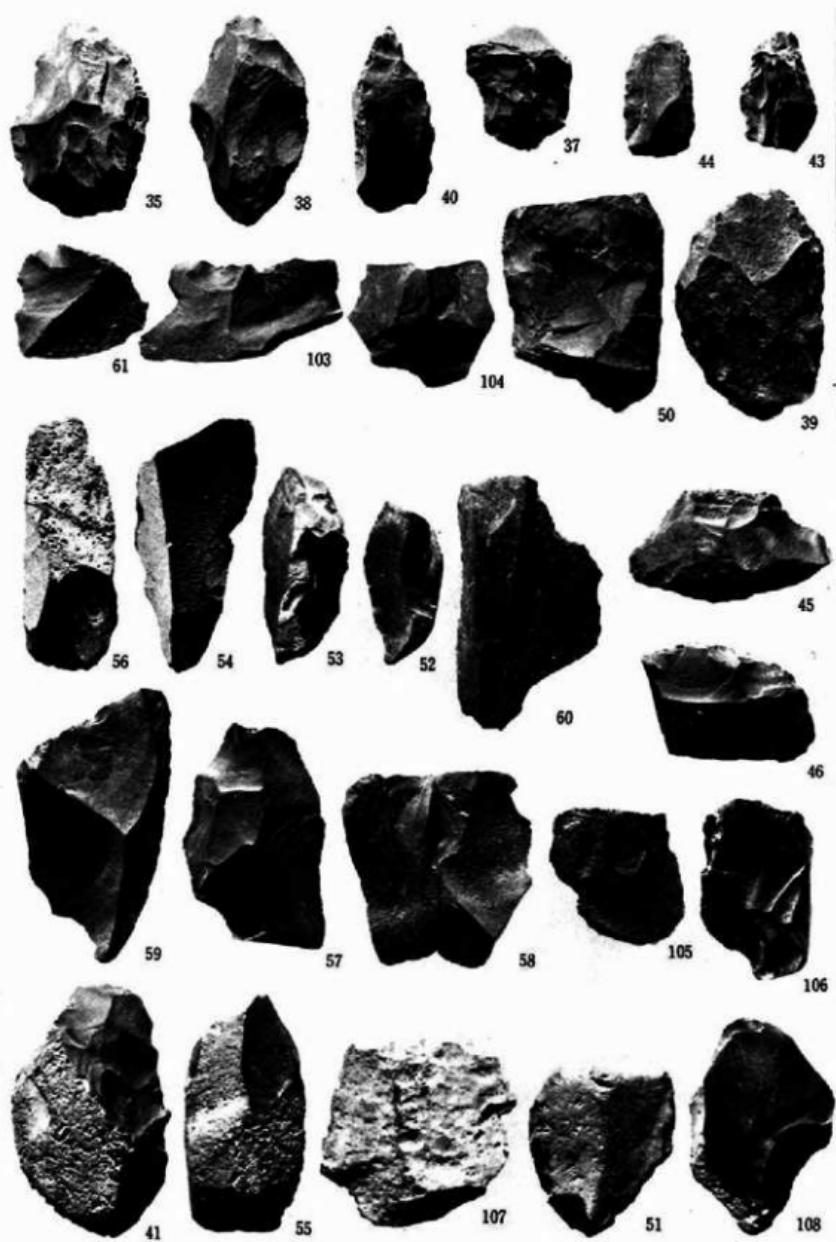
23



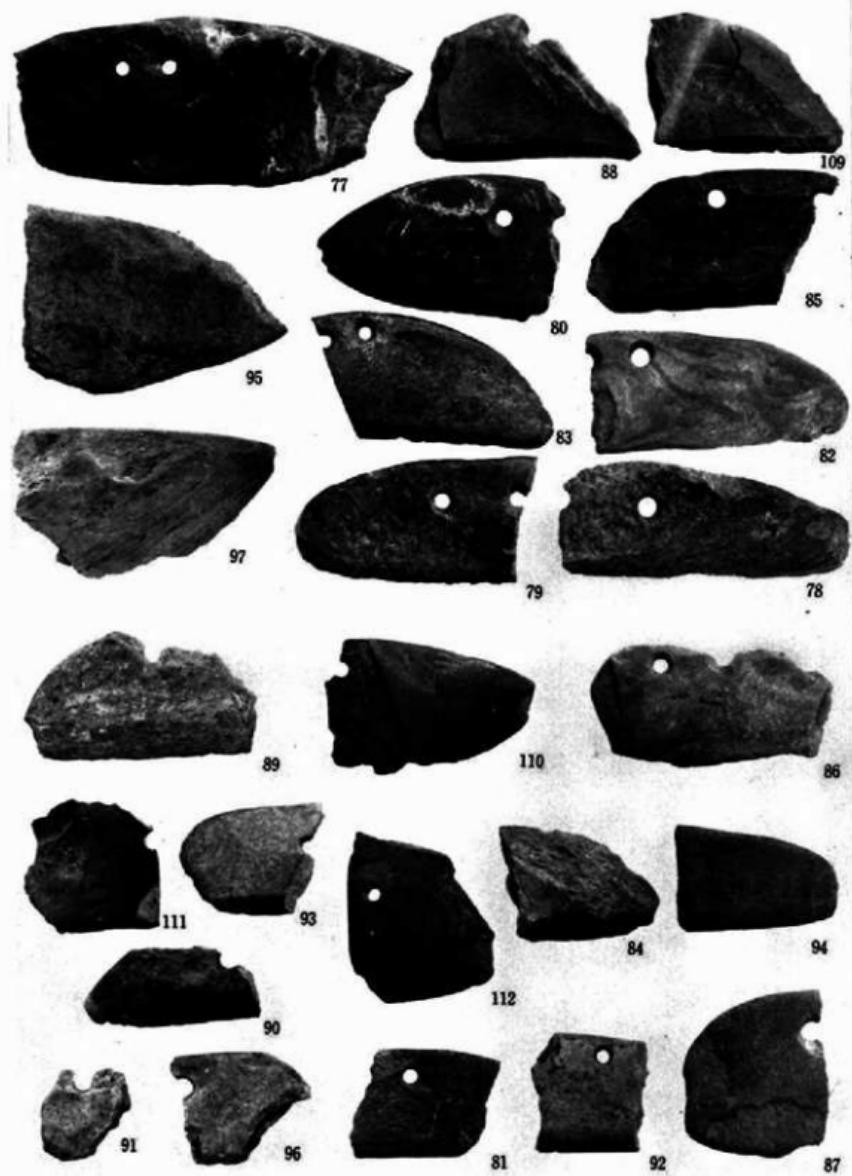
18



圖版一八 打製石器（否定形石器、刮片）

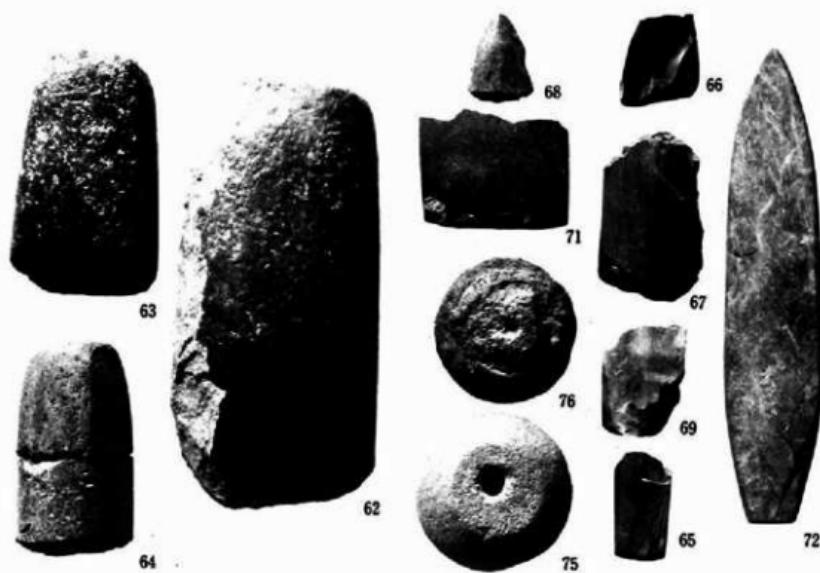


図版一九 磨製石器(石刀)

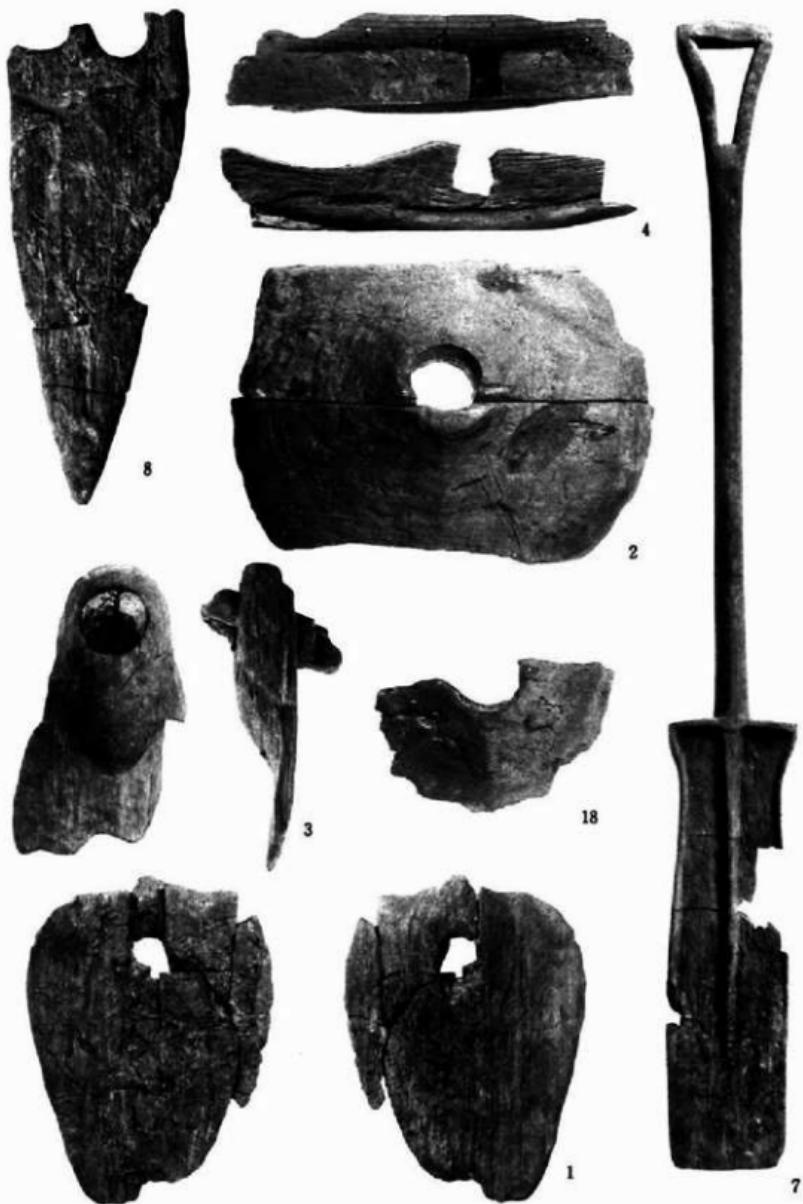


圖版二〇 磨製石器（石斧、石錐、石刺、紡錘、研石）

研石



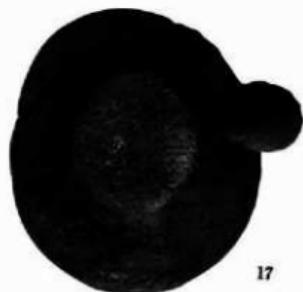
圖版二 一 木器（錘、鋤、双乳木製品、用途不明品）



圖版二三 木器（杵、柄、弓、下駄狀木製品）



図版二三 木器（合付鉢、高杯、蓋、杓子）



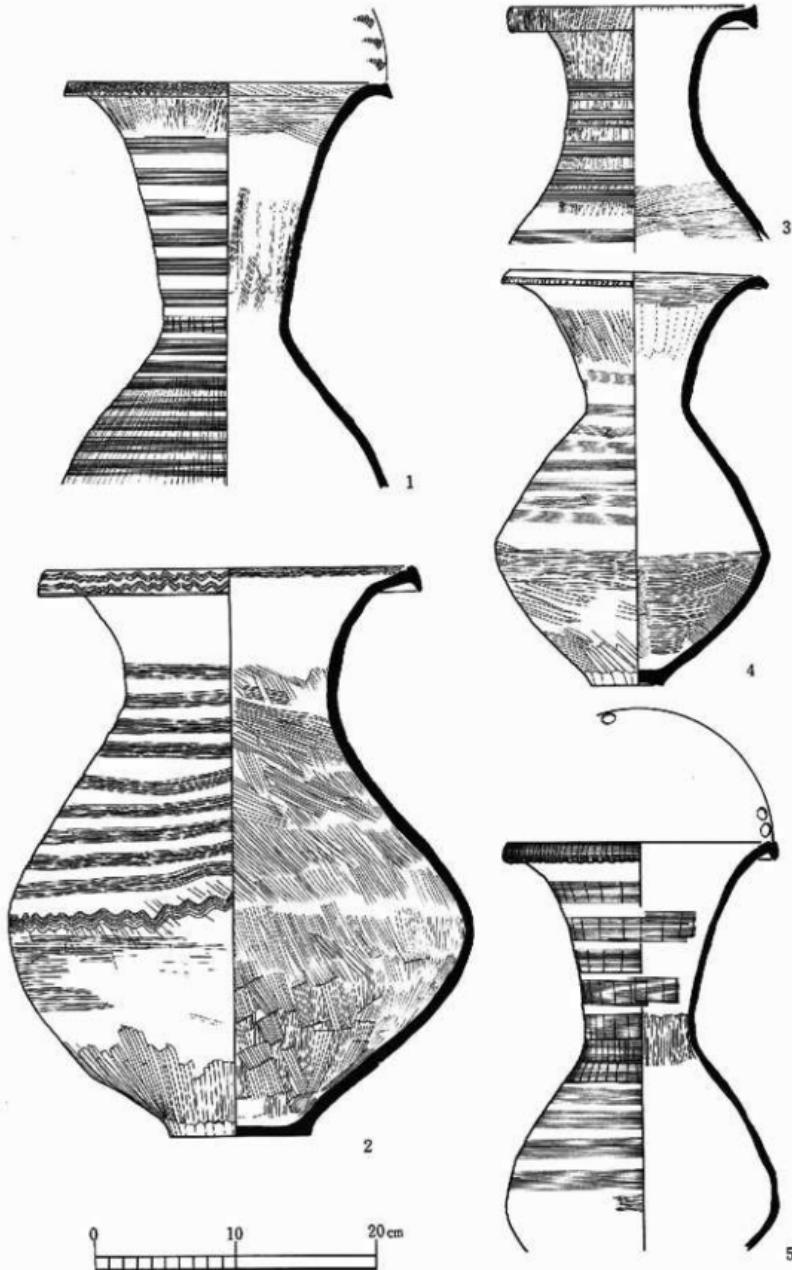
17

15

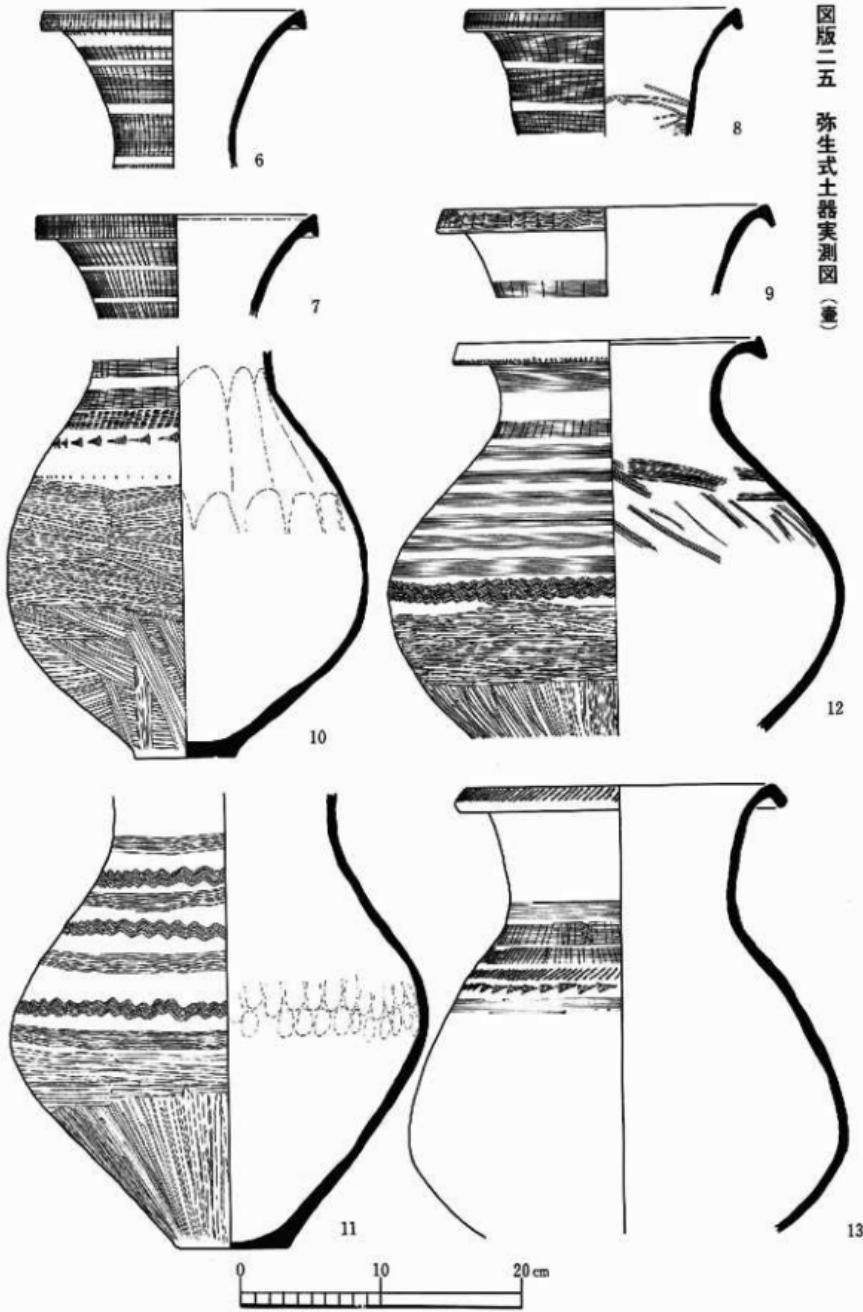
13

14

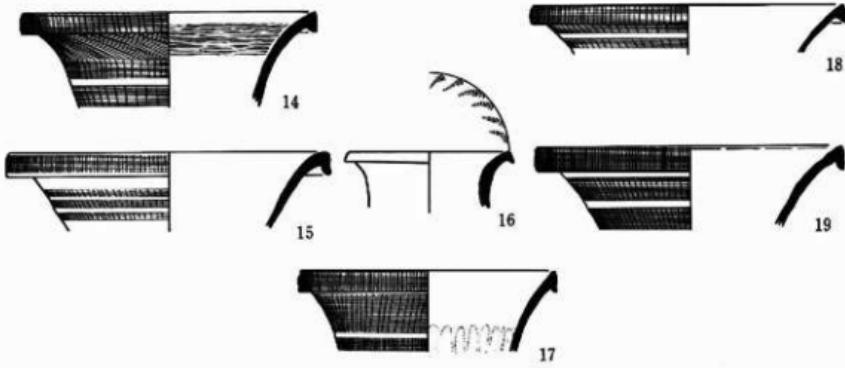
図版二四 弥生式土器実測図（壹）



図版二五
弥生式土器実測図（壹）



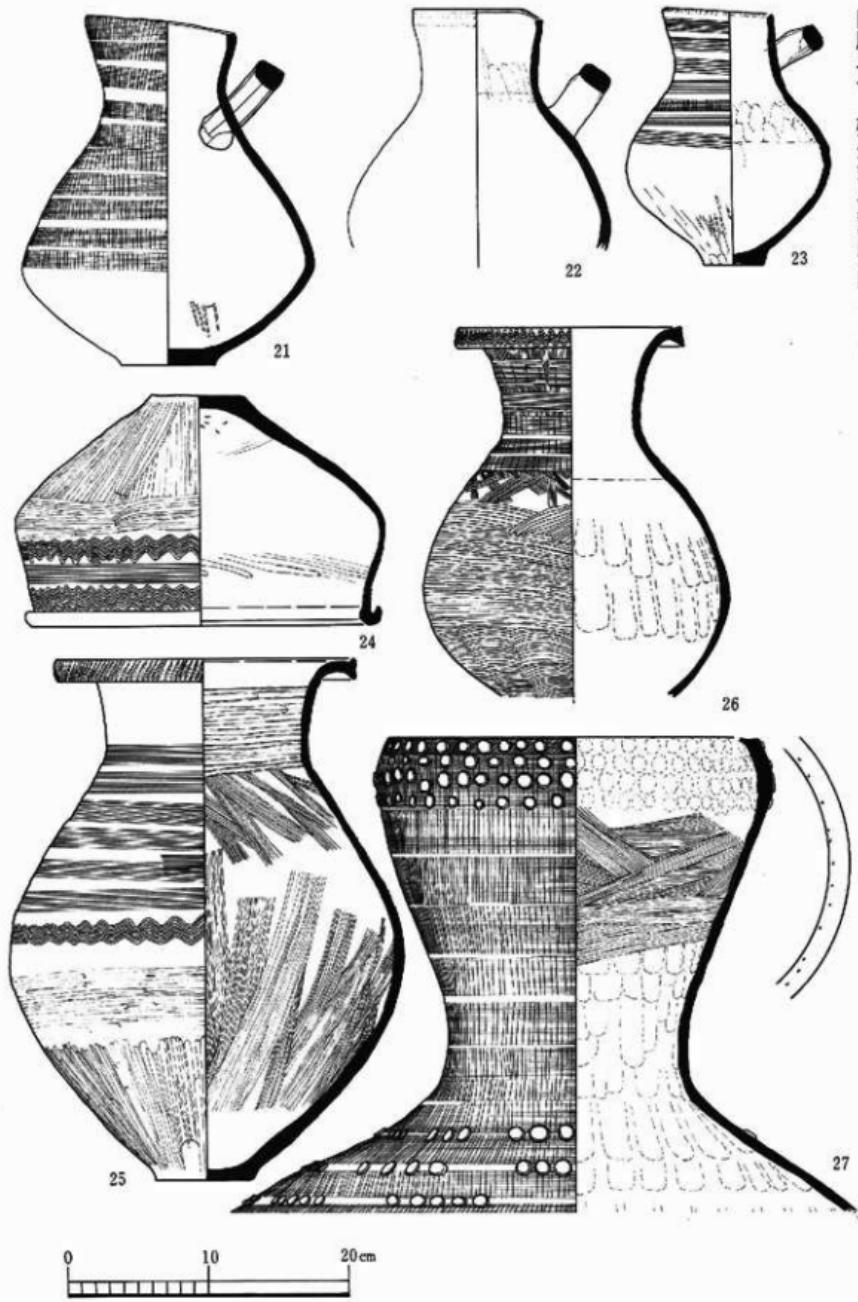
圖版二六 弥生式土器実測図（壹）

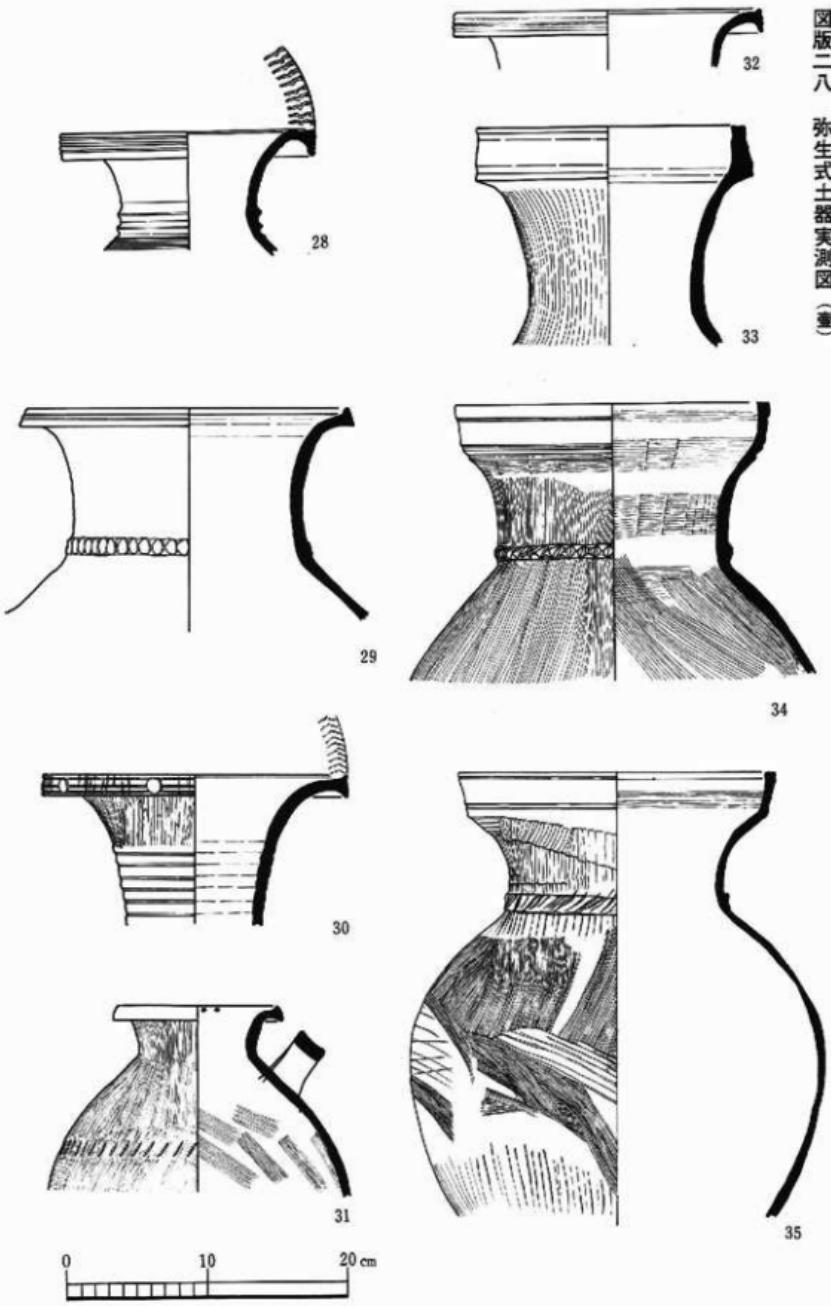


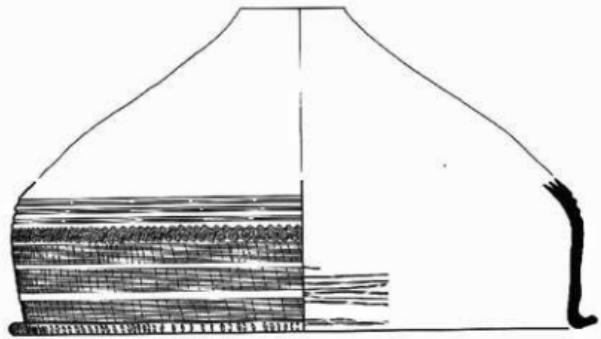
0 10 20 cm

20

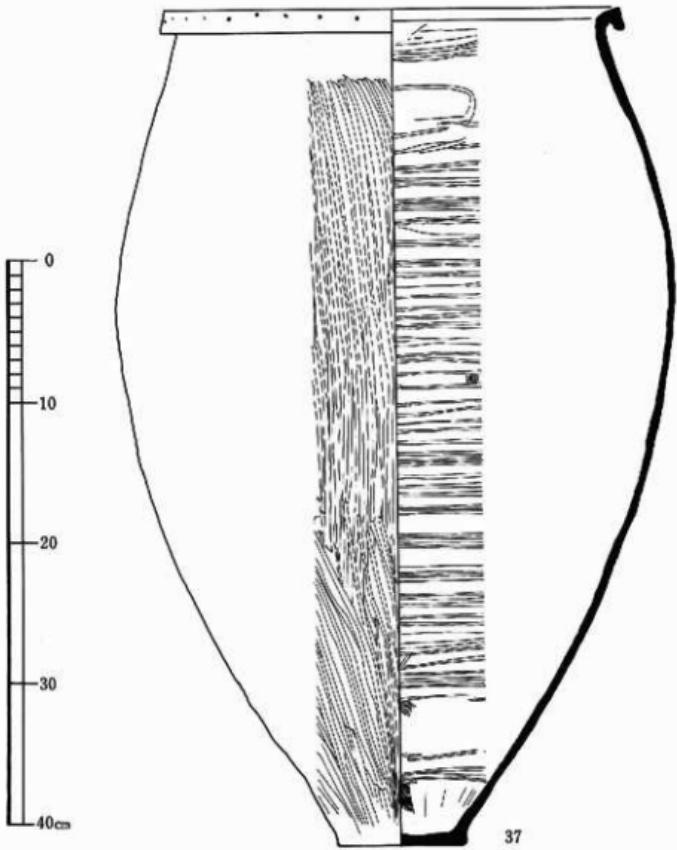
図版二七 弥生式土器実測図（水差形土器・壺棺・壺）





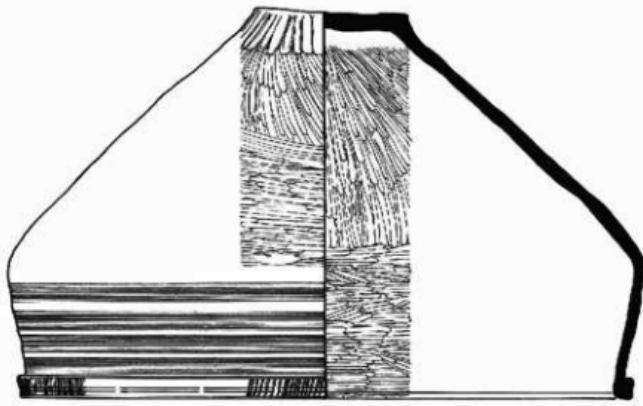


36

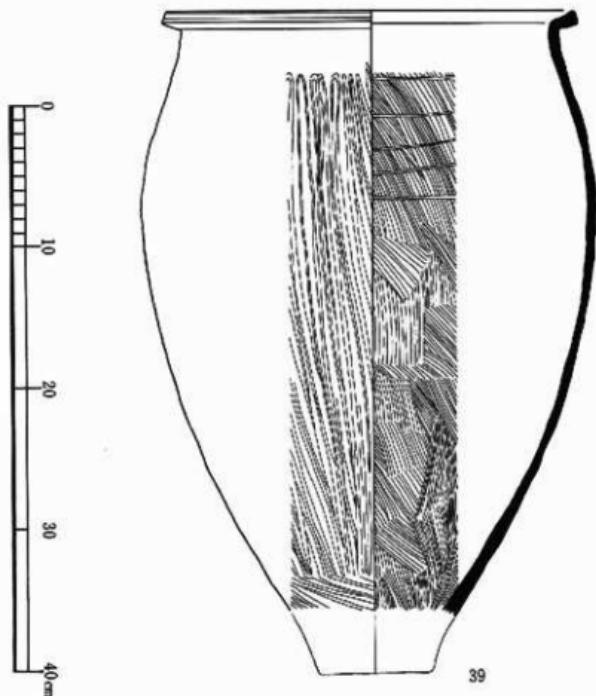


37

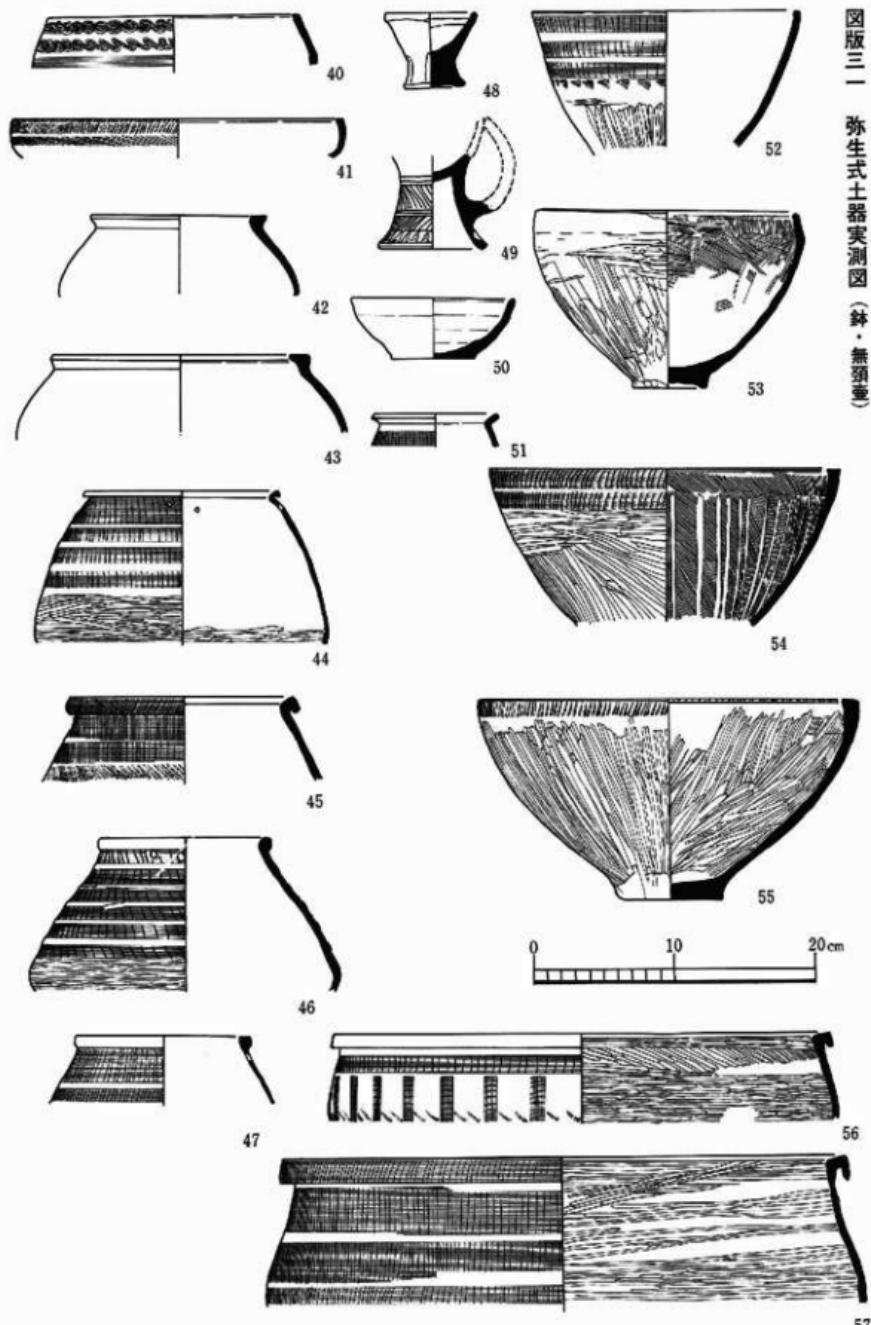
圖版三〇 第二号方形周溝墓第二号漆棺



38



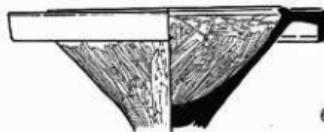
39



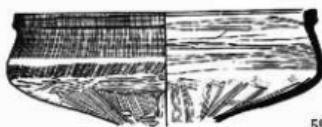
図版三二
弥生式土器実測図
(高杯)



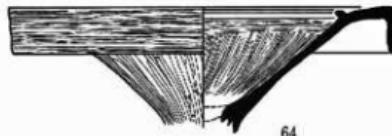
58



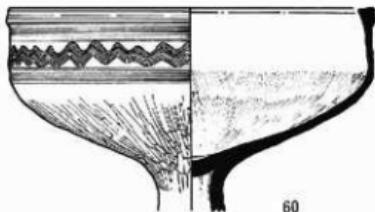
63



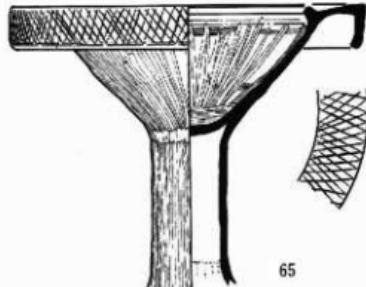
59



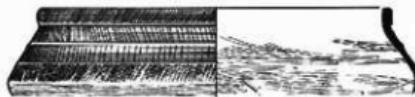
64



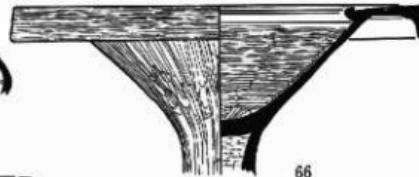
60



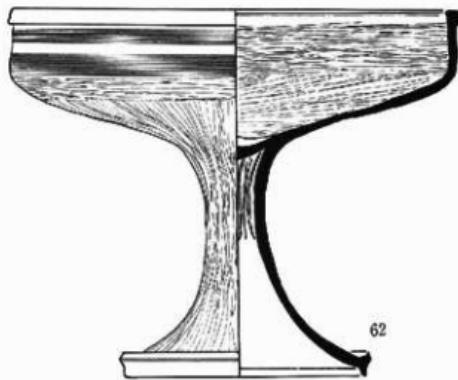
65



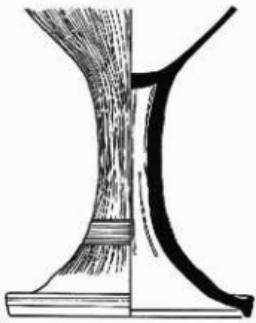
61



66



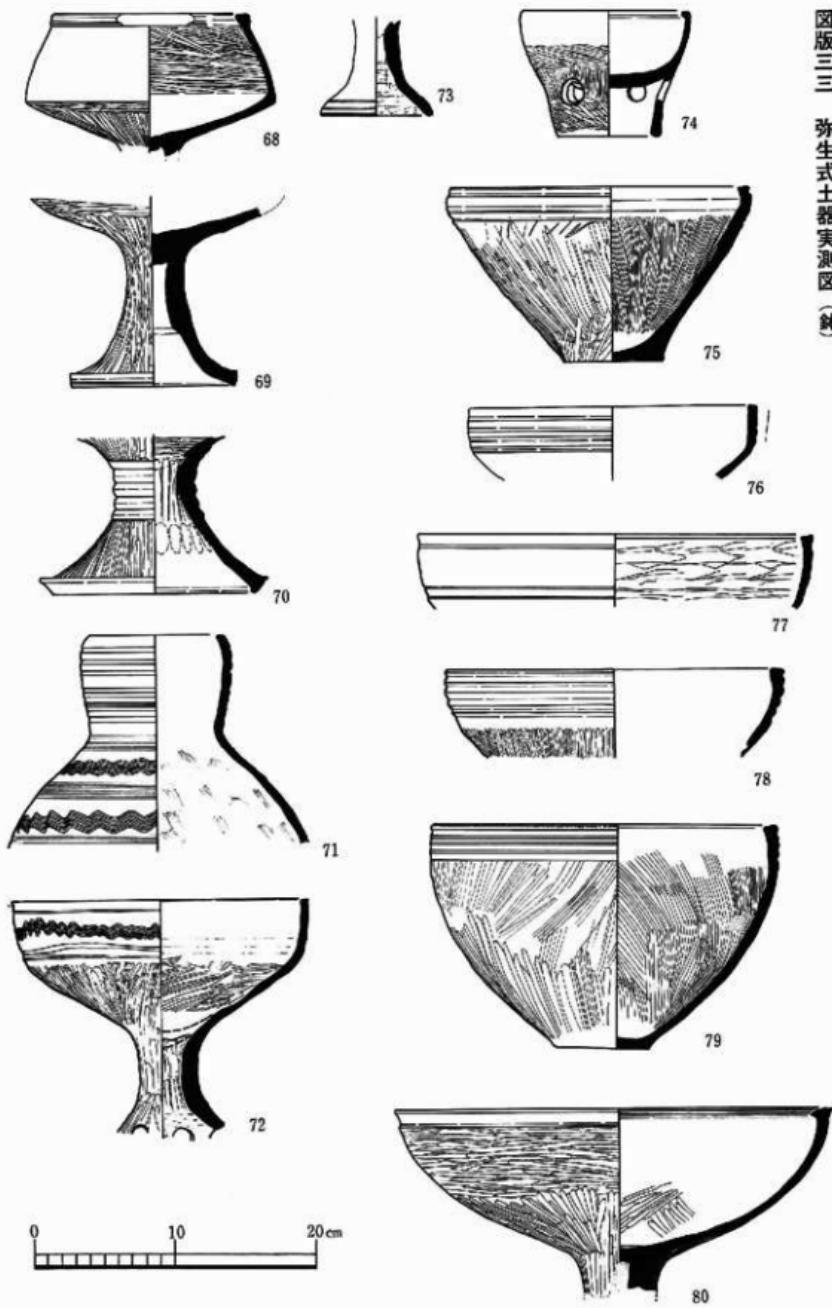
62



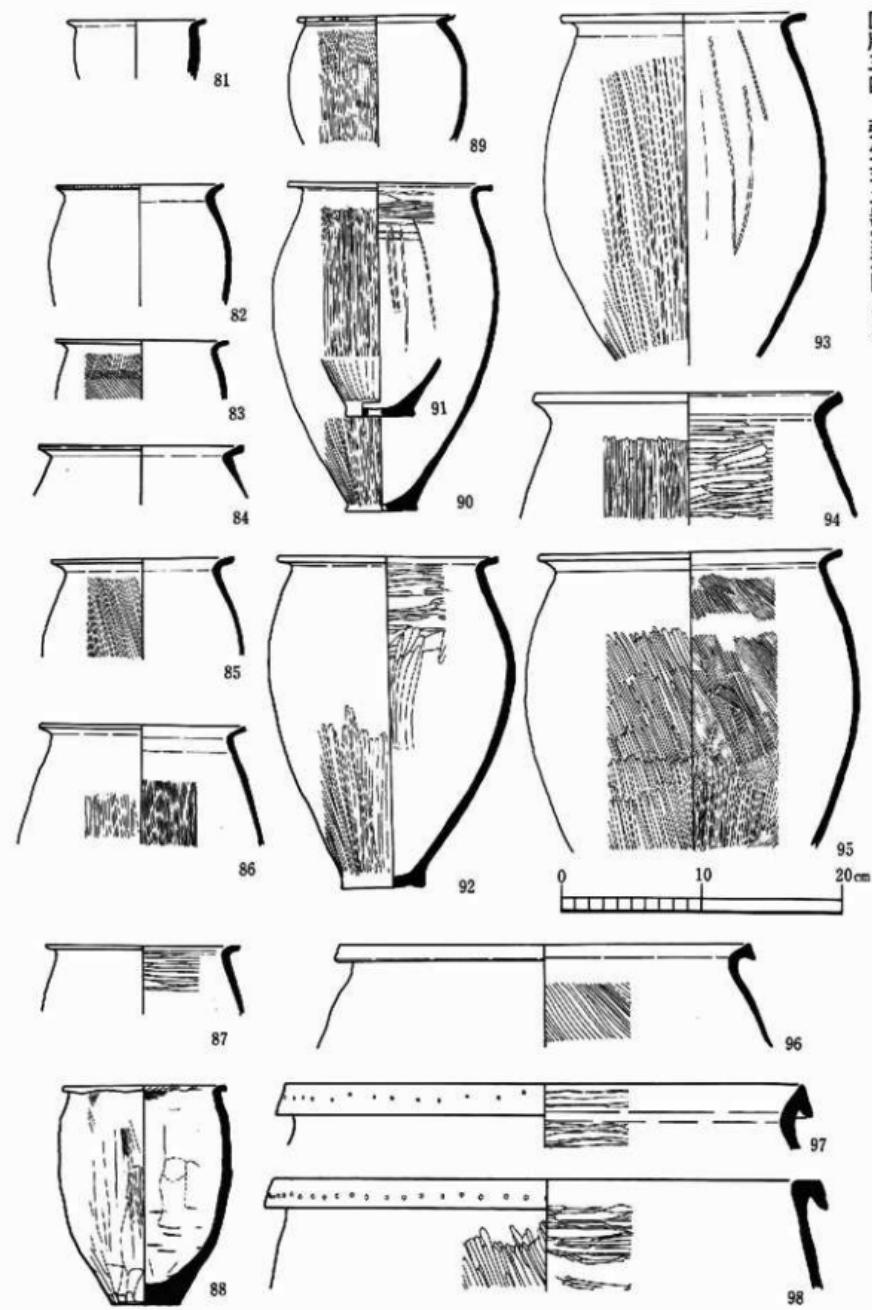
67

0 10 20cm

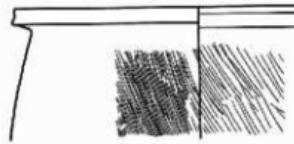
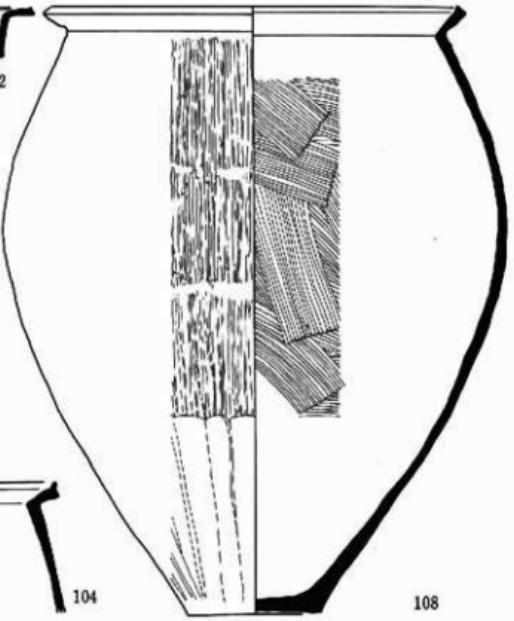
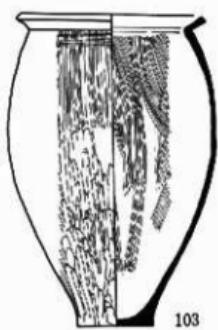
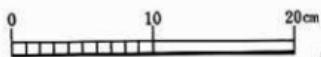
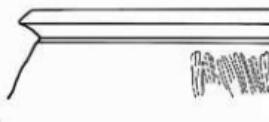
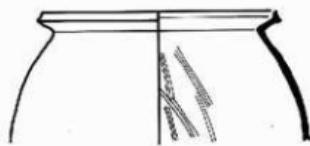
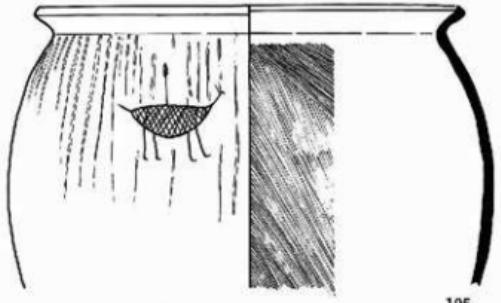
図版三三 弥生式土器実測図（鉢）



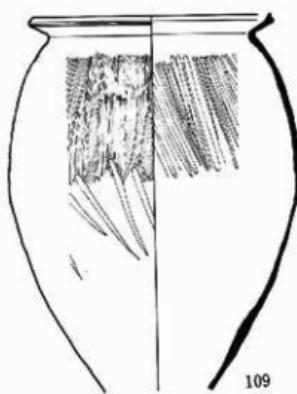
図版三四 弥生式土器実測図(要)



図版三五
弥生式土器実測図
(甕)



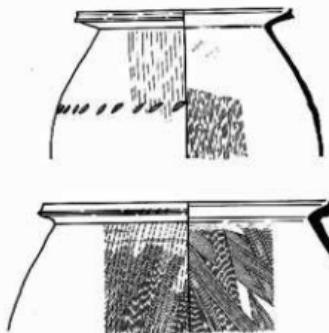
図版三六 弥生式土器実測図(要・蓋)



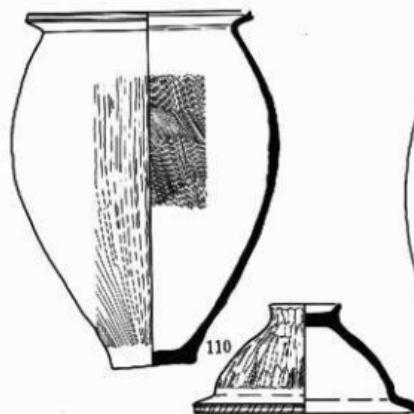
109



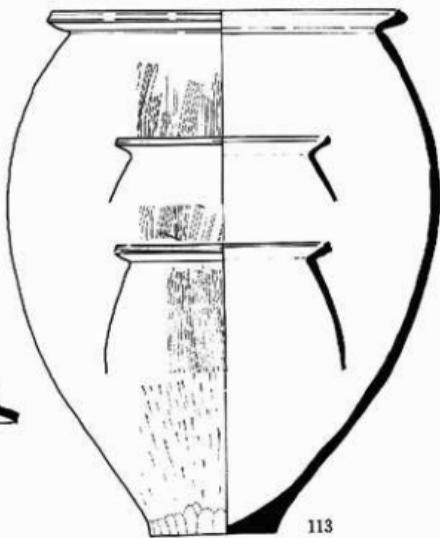
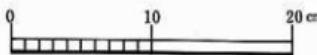
111



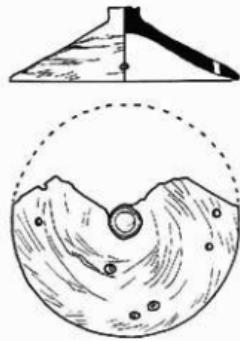
112



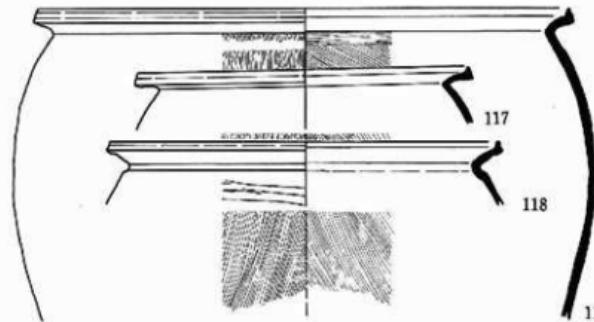
110



113

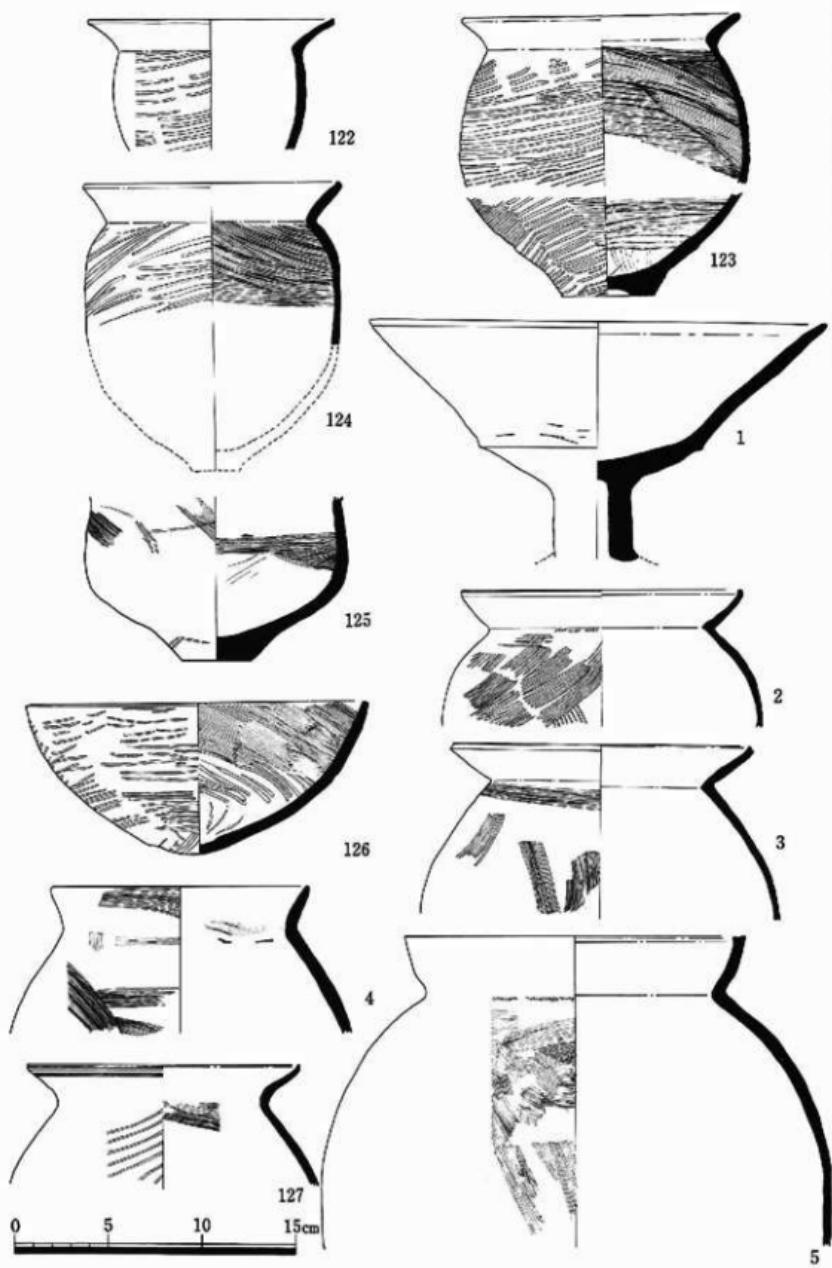


116

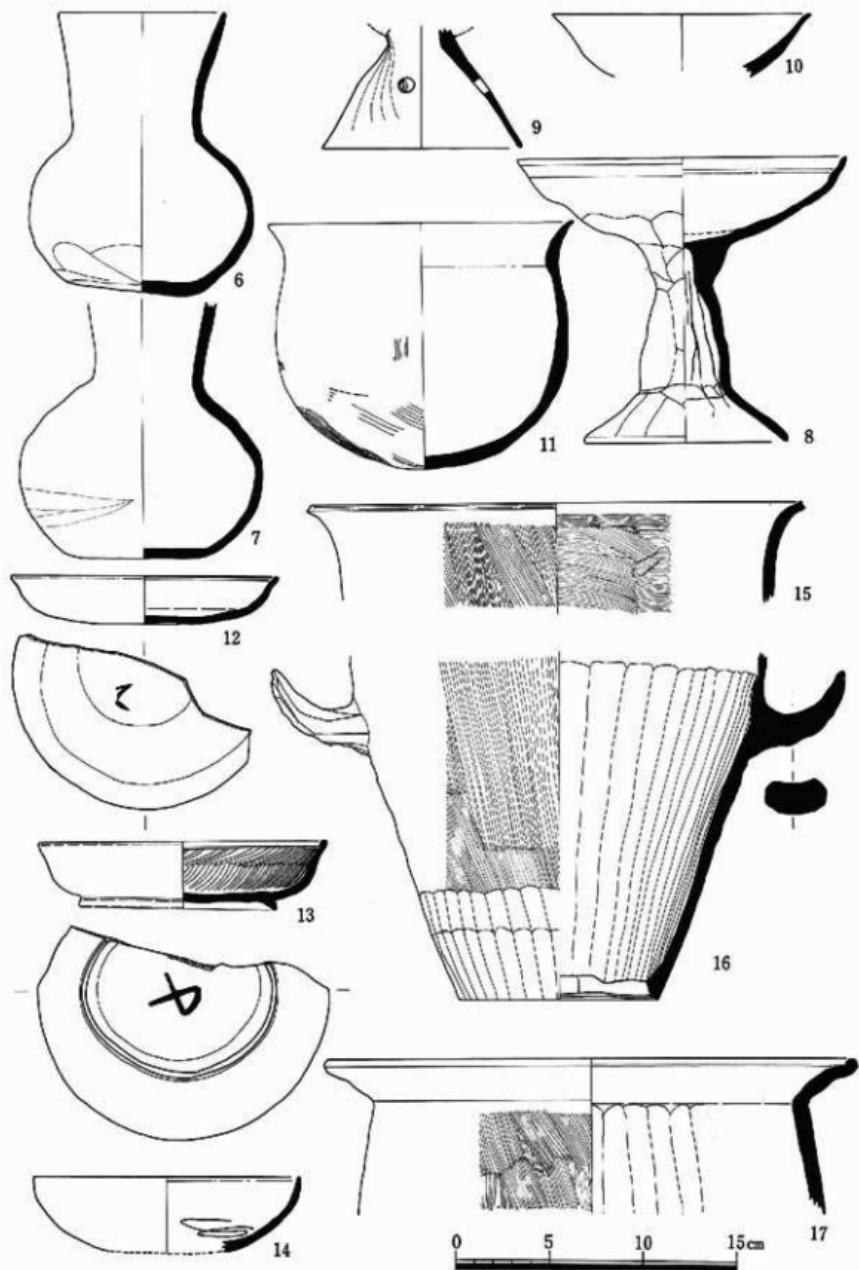


117

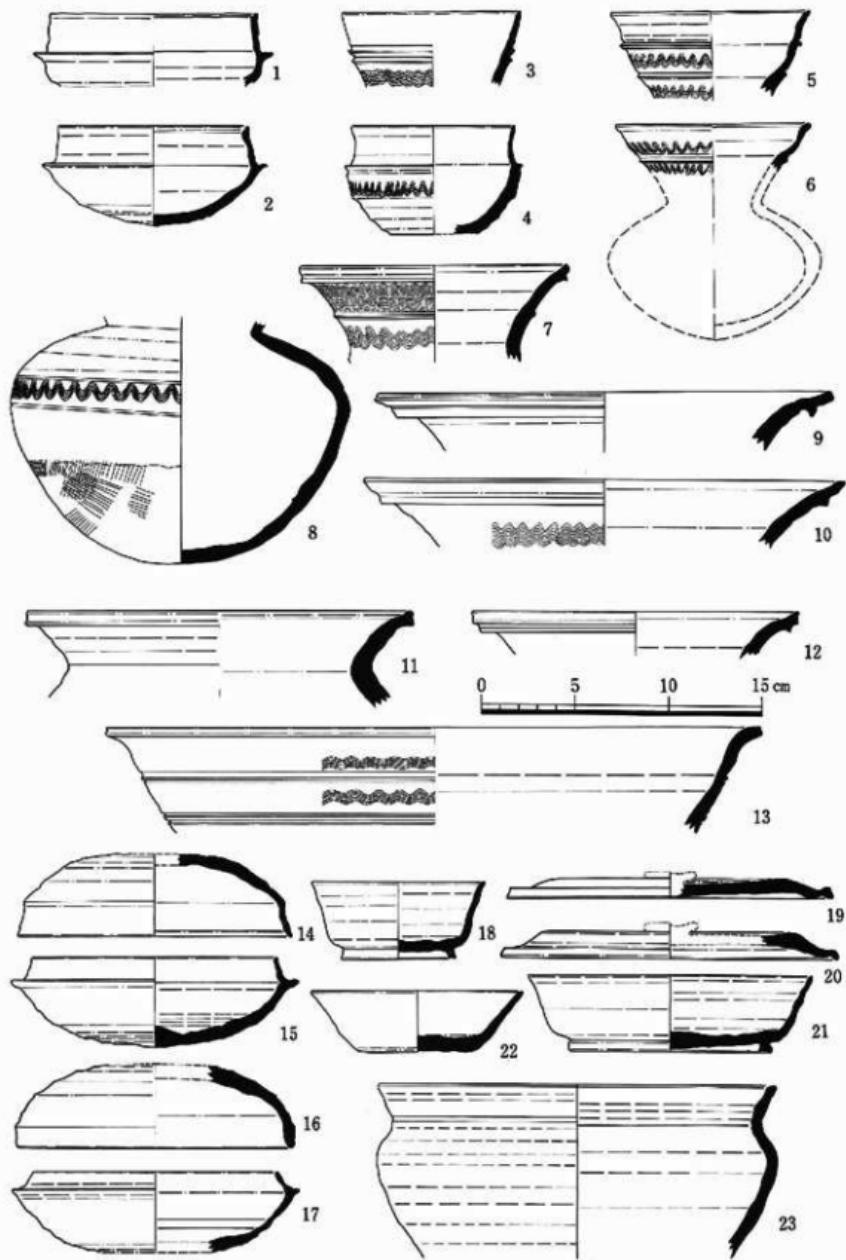
118



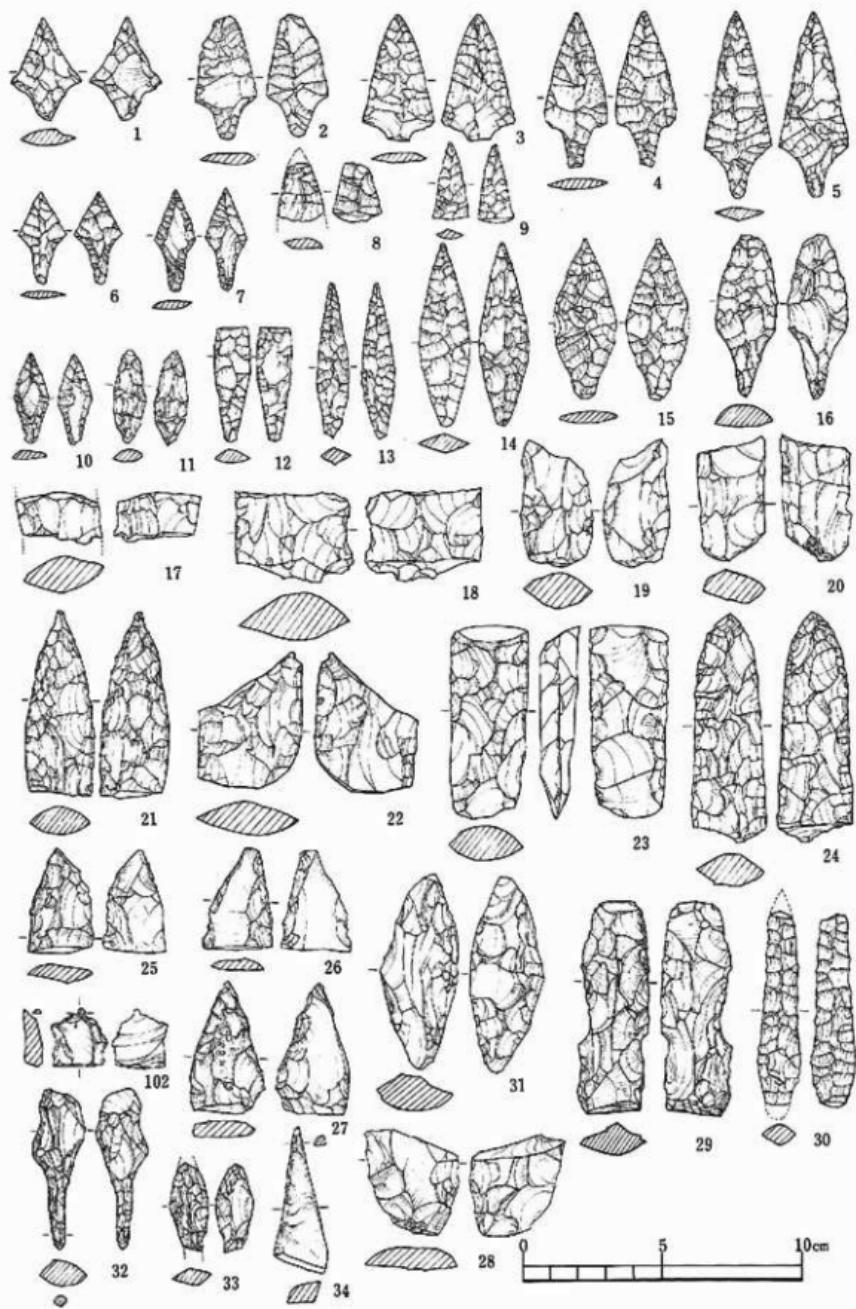
図版三八 土師器実測図



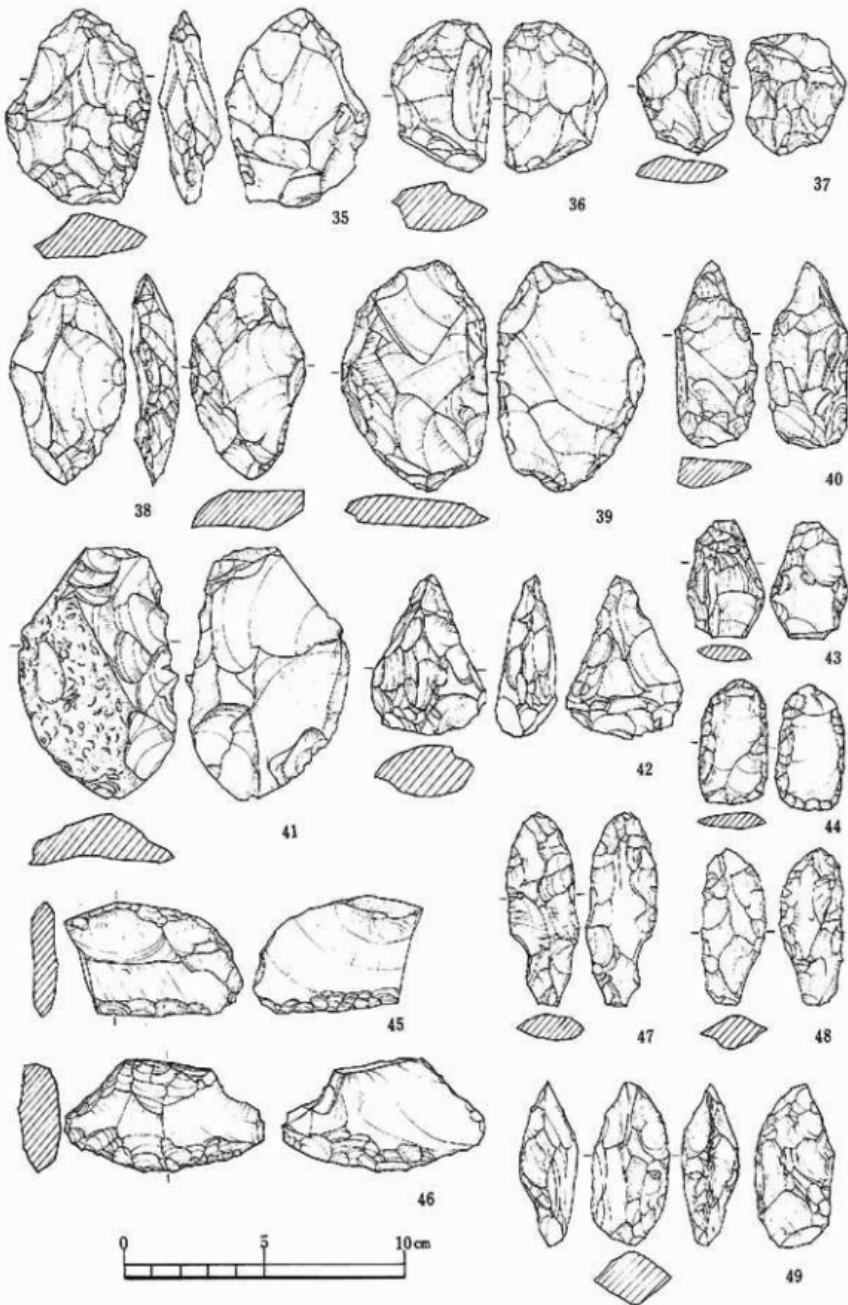
図版三九 須恵器実測図



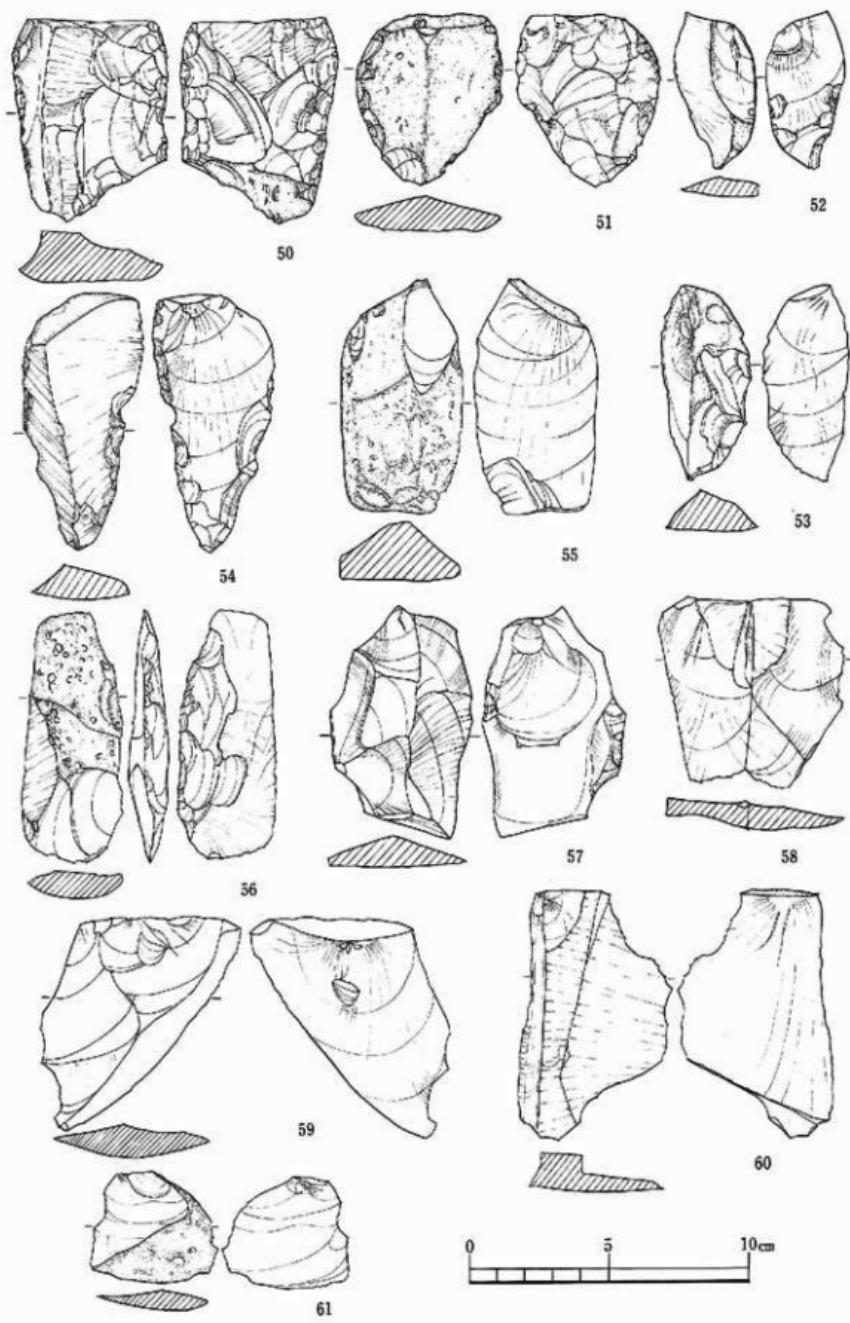
図版四〇 石器実測図
(石鏃・石槍・石錐)



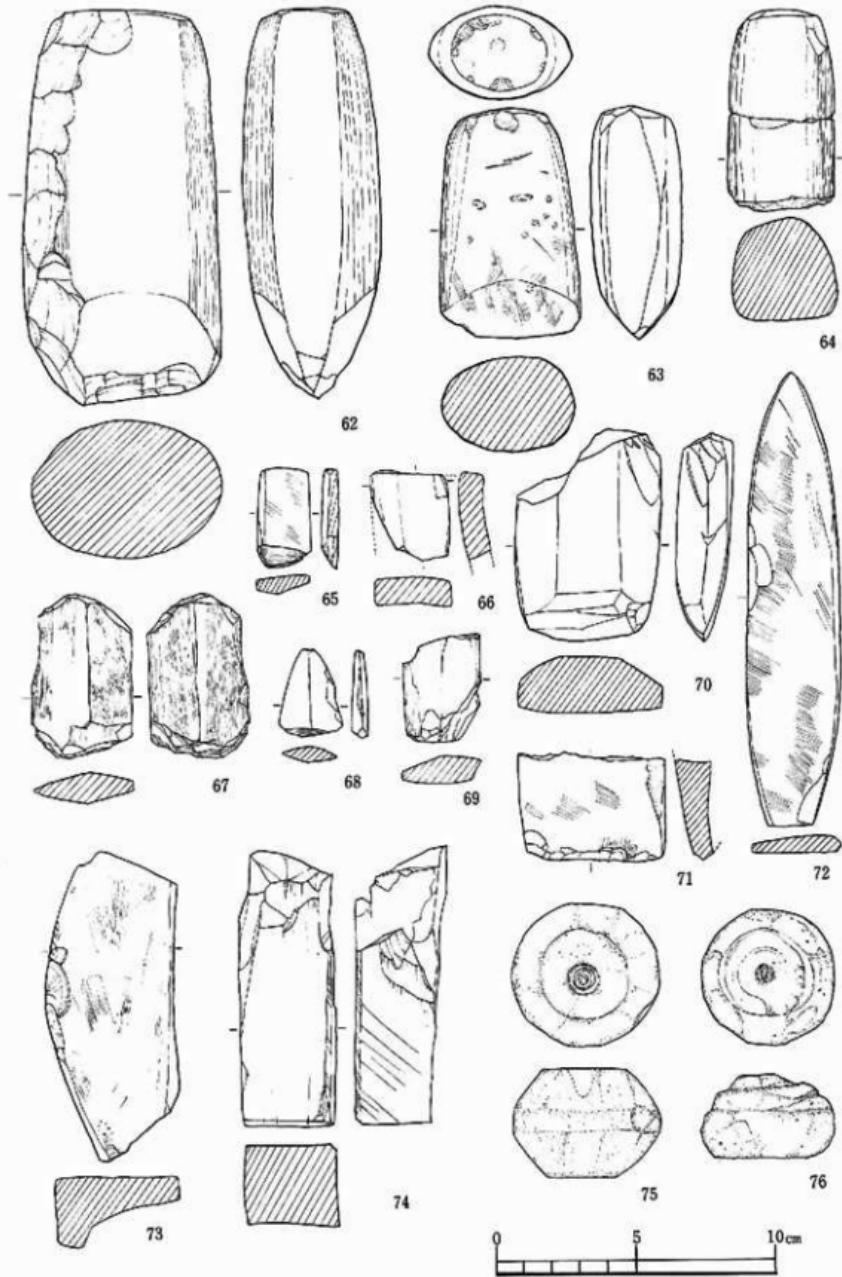
図版四一 石器実測図 (不定形石器)



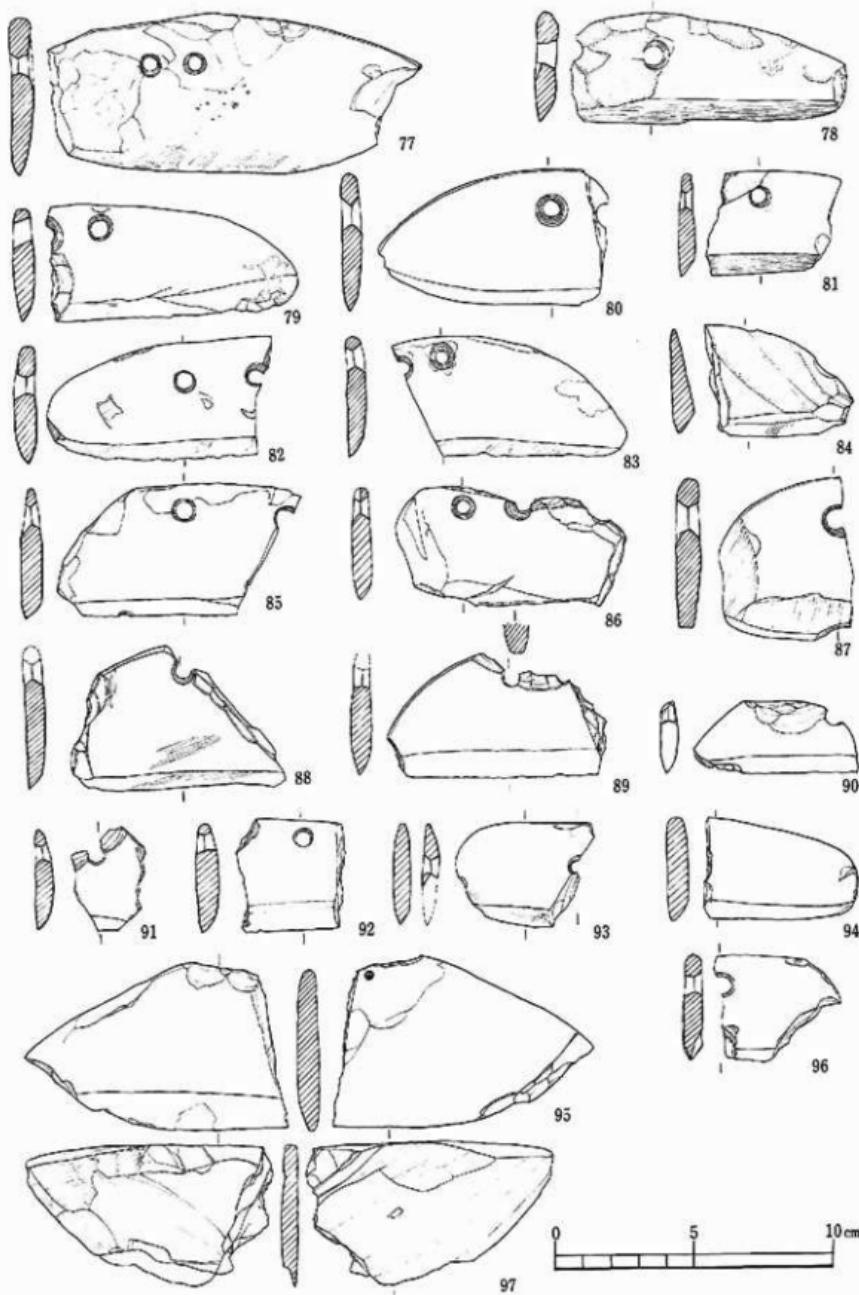
図版四二 石器実測図
(剥片)

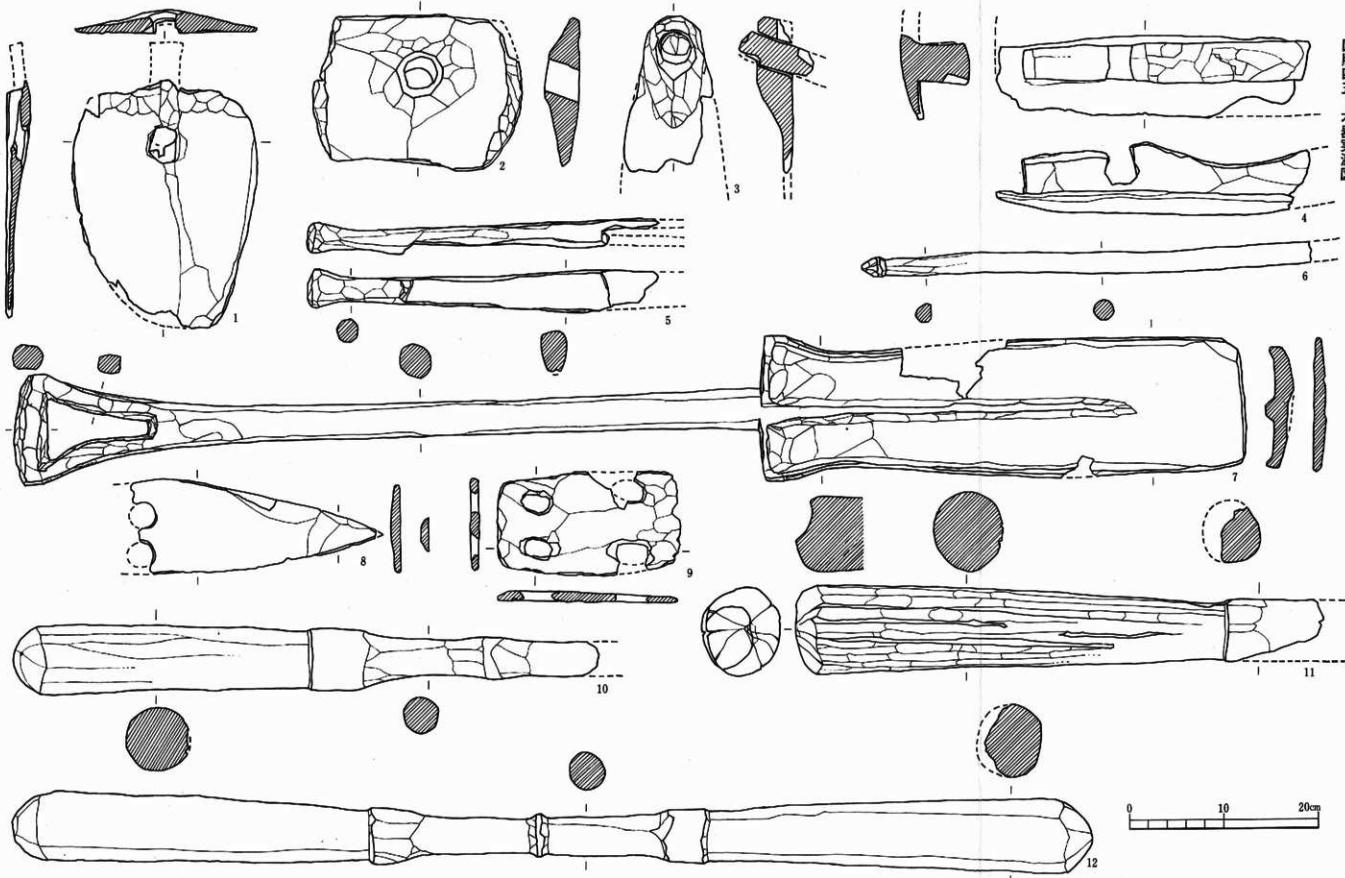


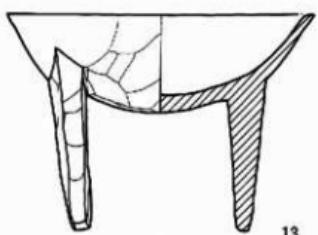
図版四三 石器実測図（磨製石器）



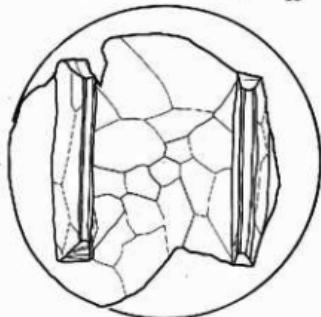
図版四四 石器実測図 (石包丁)



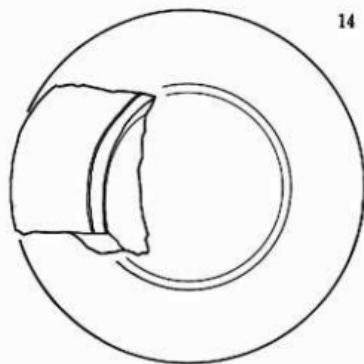




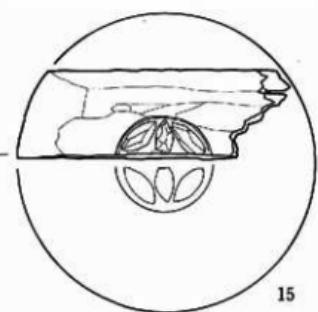
13



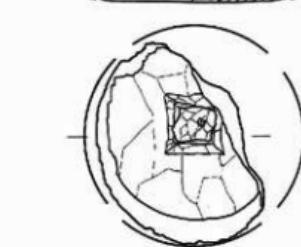
14



15



16



17



0 5 10cm

瓜生堂遺跡(資料編)正誤表

ページ	行(欄)	誤	正
3	表目次の表2	3 O C 24 C溝	3 O C 24溝
8	9	施している。	施している。
8	19	い。	い。
11	11	(128)	(131)
11	13	(129)	(130)
11	15	(128, 129)	(131, 130)
11	上から11行目	内面にも叩き目が	内面にはサケ目が
15	摘要	胎工	胎土
15	土器番号2の出土地区	方形周溝基	方形周溝墓
15	土器番号2の口頭部整形(外)	刷毛目以	刷毛目以外
17	土器番号10の出土地区	方形周溝基	方形周溝墓
19	土器番号17の胎土	鐵砂粒	微砂粒
45	摘要	胎工	胎土
46~47	土器番号122、124、123、127	壺	甕
46	土器番号125の種類	小形壺形土器	鉢形土器
46	土器番号126肩廻部	○内・外面とも叩き目が	○外面には叩き目が
48	摘要	胎工	胎土
48	上器番号131口頭部	思われる叩き目が	思われるサケ目が
48	土器番号132の種類	小形壺形土器	鉢形土器
53	土器番号1、2の種類	杯身	杯身
55	土器番号11の胎土	(若干の砂粘を含む)	(若干の砂粒を含む)
59	16	他は5.2gが2個であり	他は5.2gが2個、3gが1個、2.5gが1個、8.9gが1個で、
60	16	側縁も	側縁を
60	18	剥ぎ方を方を	剥ぎ方を
61	34	ガブロ岩。(斑駁岩)	ガブロ岩(斑駁岩)。
62	27	頁岩。	頁岩、
69	3	不明である。	不明である。
69	20	ところに削り	ところに削り
69	22	木取りは1、とは	木取りは、1とは
図版18	見出し	否定形石器	不定形石器
図版20	見出し	紡錘	紡錘車

正誤表

誤 正

P10 表8 Na Na₂HPO₄
(+17%) (±15% ±10%)